

院へ入らせ給御堂の北のやを御所とす同廿五日の丑の刻に 御歩行にて
 るによりて侍臣以下松明をどる權大納言師忠仲實朝臣時々 尊儀をたすけたて
 の路をも雲影に伴て攀深谷縦横の 梯をも鳥殿を踏でわたる 仙步取てわづらひな
 に成んどおぼゆ豈た十善の宿因のみならむや多くはこれ三寶の冥助なり申刻に笠木坂に
 せ給ふ彼處に寺家御所をしつらふ三間一面の御所南方に 各五間の板屋をかまへて公卿侍臣の
 座とす皆これ假屋なり今日御山へ 着せ給ふべき處に日既に晩におよぶうへ 御窮窟をやすめ
 たてまつらむがために俄に議ありてこの所に 御一宿あり人々荆棘をつかねて枕とし菫苔を
 はらひて薙とし侍けり

同廿六日笠木坂の御宿より山上中院へ 入御寺家の沙汰として御所みな新造す同廿七日に先興
 の院へ 御參御經供養あり金泥法華經一部墨字の理趣經三十卷開題せらる廟壇の前に導師呪願
 の高座をたて東西南北に七僧の座をまうく七僧の座の東に三十人の座をしきて住山の僧題名を
 あぐ石壇の上に卅萬燈をともさる禮殿の北の庇に 上皇の 御座をしつらふ御導師法印權大僧
 都隆明呪願長者權少僧都定賢三禮權少僧都寬意なり頼昭澄成永尋維覺唄散花等の役をつとむ其
 時御導師の啓白に昔釋尊の悉達太子たりし時皇城を辭して道に歸し今太上皇の寶位を抛て靈窟
 に攀踏 往昔未聞 將來又可難この詞いまだおはらざるに隆明身づから涕泣す貴賤涙をのこ

はすといふ事なしこれ風月の金句にあらねども道理のいたり威志をもよほす故なり此間公家よ
 り頭中將 源 雅俊朝臣を 勅使として御誦經物をたてまつらる又 上皇權大納言師忠をもて
 勳賞を 仰らる三口の阿闍梨を置て傳法灌頂をつがしめ大塔を造立して舊儀に復すべきよしな
 り御經供養の後禮殿にして卅口の住侶をもて理趣三昧をおこなはる禮殿の南の方に三間の假屋
 を立て御聽聞所とす其後長者定賢僧都大師御筆二卷をたてまつる權大納言雅實卿これを傳へ進
 り事終て 上皇中院へ還御ありける

同廿八日に御影堂へ 御參あり執行良禪たりと雖ども凡鄙の身御前へ進がたきゆへに寬意僧
 都仰によりて堂の戸をひらく大師の御影を禮拜し在所什物を 獻覽あり御共の侍臣庭上に徘徊
 して三鉢の松の由來をとひ聽て結縁の爲に各其枝を折て懷にす此間長者并に三綱等の祿物を給
 てのち藥師堂へ 御參すなはち中院へ 入御あり廿九日に 還御すべて始中終の儀式くはしく
 注するにおよばず大師入定の後二百餘廻におよぶといへどもいまだ 上皇の 臨幸をきかざ承
 和の 聖代より以降一十九代をへしかども尙この山の 御ゆきなかりき寛治いま希代の例をの
 こさるこれ一旦の 敵信のみにあらず定て多生御宿因たらむかし遙に 都城の霞を出て紀州の
 靈地に 幸し遠く深山の露をわけて坐禪の廟窟に詣給へるふかき 御志大師いかにかりか御納
 受ありけんそれよりこのかた明時の佳例として代々の 上皇 仙躰を促すいみじかりし事ども

なり誠にこの山は諸佛常住の峯冥衆守護の洞なれば一度あゆみをはこぶ人はながく三途のどば
そをどち一念信心をとる者は必ず二世の望をとぐ心ある人は欽仰の志をつくしまとあらん類
は參詣の願をとぐべきにや

弘法大師行狀記卷之十二 大尾

弘法大師行狀記跋

弘法大師行狀記

惠乘於終焉之際遺告生徒曰余寓居于當寺有年於
茲遂陳平生之力描鏡我弘法大師行狀記蓋欲使
人知大師之所以爲大師也庶幾永藏完璧長久院而
宜續吾志矣然後住持不能其事而轉住于他寺已二
世矣嘉永己酉年小僧尊清來住于當寺歎盛舉之廢
置於是乎盡衣鉢之資就事於茲聊報高祖無窮之
德者則所以續惠乘之業也

庚戌之秋八月

江都長久院住持 尊清謹誌焉

是以考之欽其德者因是以識之則其大師之所以爲
大師益以顯然矣是則前世撰者之意而吾儕所報於
師德之微衷也已矣冀世之向斯道者潛思而觀焉

天保四年歲次癸巳冬十有一月

於東武之客舍

東寺十輪院住持 慧乘謹誌

玄々憲謹錄

永平道元禪師行狀圖會傳序

先是越前永平寺第十四世建撕和尚叙其創祖道元禪師事蹟
名曰建撕記若狹面山和尚補且注焉並皆用眞國字旣行於世
矣頃珍牛和尚草國字鈔其要又每事加圖蓋使愚夫易通也稿
成請序余其辭禮之厚似有以者也夫禪師本久我源公之子如
本書所言也而吾先世祥光公養久我廣通公之孫爲嗣相襲至
予則余於禪師實爲血屬之親此余不可固辭者而和尚之所以
請不已亦必在此也歟乃強拙題此于首端云
于時文化己巳夏五月

權中納言源 經豐撰
權右中辨藤原資善書

永平道元禪師行狀圖會乾

傳實僧高宗各教術

我國曹洞の初祖越前國吉田郡比志の莊吉祥山永平寺御開山道元禪師御父は久我内大臣通親公
 御母は忠通公の御次男攝政基房公の姫君なり人皇八十三代土御門院御宇正治二年正月二日 御
 誕生なり
 御懷妊の後光り母屋を照らしひしらぬ薫りこゝらみちみつ又空中に聲ありて此見は五百年來
 の大聖人なり今この國に興法利生のためうまれたまふと聞ゆれば御一門こそりて歡喜し玉ふ
 御父方の系譜

○村上天皇 八皇六十二代 具平親王 二品中務卿 師 房 賜源姓 右大臣 顯 房 左大臣 雅 實 久我家祖 太政大臣

雅 定 右大臣 雅 通 太政大臣 通 親 内大臣 通 光 太政大臣 通 忠 右大臣
 道元禪師 母君忠通公御孫女

御母方の系譜

○大織冠鎌足 藤原氏始祖 内大臣 淡海公 右大臣 房 前 參議 眞 楯 大納言 内 磨 左近衛大將

冬 嗣 左大臣 良 房 太政大臣 基 經 攝政關白 忠 平 攝政關白 師 輔 右大臣

兼 家 太政大臣 道 長 太政大臣 賴 通 太政大臣 師 實 攝政關白 師 通 關白

忠 實 攝政關白 忠 通 攝政關白

基 實 近衛殿祖 攝政關白 師 家 號松殿 攝政關白
 兼 房 攝政關白 女 子 久我通親公 兼中
 兼 實 九條殿祖 攝政關白

永平元禪師行狀圖會 三八三

ある相者高祖を觀奉りて申けるは容貌閑雅にして御眼に重 瞳ありこれ神童なりと
 御四歳にて唐土李嶠か百詠の詩をよみたまひ御七歳にて毛詩左氏傳等をよみたまふとか
 承元二年丁卯御歳八ッ御母公かくれさせたまふとき喪屋の香の烟燈火の風に塵を見て無常を觀
 じ出離の志をおこし玉ふ

高祖御九歳のとき俱舍論をよみたまふある人其趣をどふに明らかに答へたまふされは益雪の對は針を股に刺細を願にかけし古人を慕ひ玉ふ御心凡ならず

高祖御眞攝政關白師家公は致仕の後松殿禪閣と稱し奉る世にならひなき學匠にて朝廷鹽梅の臣の軌範と申し傳ふか常に高祖の奇才をめて御猶子になされ公事政ををしへ行すも輔佐にもなさはやとはかり玉へとうけかひたまはす至心に志を決したまへり

高祖御十三歳の春臘月に都を忍ひ出木幡山の別荘にいたり夫より日枝の麓なる眞の僧良觀法眼の室に入剃髮をぬかひ玉ふに法眼おとろき玉ひ初冠のころなれば父公の御心覺束なしいかてかといなみ玉へは我慈母終りに臨みて仰言あれは出家學道して菩提を吊らひまいらせんと聞て法眼もやゝ感涙し許し玉ふ

建保元年癸酉御十四歳四月九日横川の首楞嚴院般若谷の千光房にいらせ玉ひ座主公圓僧正によりて御かさりをあろさせたまふ

同日高祖戒壇院にのほつて菩薩戒を受持し玉ふ戒師は則公圓僧正とぞ

高祖十四五歳の間一切經を閱玉ふに御疑あり所謂本來本法性天然自性身と顯密二教ともこれとを談すもし志からは三世の諸佛なにとて發心修行して菩提を需め玉ふらんと一山の碩學にとひ玉へとも明らかに其旨を答ふる人なし其ころ三井寺の公胤僧正觀法に委しきと聞へければ彼

方に行て問玉ふに僧正申させたまふは宗義なきにはあらねともおそらくは其のむねをつくしかたからんこれは建仁寺の榮西禪師に參問すへしと指揮せらるされは僧正の教によりて榮西禪師に相見し前のことくに問玉ふに禪師答へてのたまはく三世の諸佛ある事をしらす狸奴白狐還而あることをしると高祖爰におゐて御うたかひ春の氷の解るかことくしてそれより臨濟宗に入たまふ

建保三年甲亥御十六歳の時榮西禪師涅槃の雲に隠れさせ玉ふそれより法嗣佛樹房明全禪師にしたかひて佛祖正傳の菩薩大戒を傳へたまふ此書貞應元年御廿三歳なりこれまで一代藏經を拜閱し玉ふと二回なりとぞ

貞應二年癸未御歳廿四の春明全禪師と入宋の事を企て玉ひ二月廿二日禪師にしたかひ錫をひさけて都を出たまふ日を経て筑紫博多の津に赴き三月下旬乗船して宋國にわたり玉ふ彼國の嘉貞十六年四月のはしめ明州の津に船をつなかせたまふてより掛錫の地をもとめたまふ一口小船に棹さし阿育王山の典座大用和尚とて學匠の聞へあるかはからすきたりて文字辨道のゆえよしを語らる其むね至て深かりければ船中のうさをわすれかれこれ問答におよび日影かたぶけは別れぬ此相見を悦たまふ

秋七月天童山にのほり錫をとめ玉ふ時の堂頭は無際了派禪師なり然るに宋地の叢林にては他

國の僧席受戒の前後によらず新戒なみに着けるを高祖歎してのたまふは佛法中に自他今古の義あるまじきとて屢々正させたまひしかと舊例なりとて改めさりければ深く弊風をかなしみ吾不肖といへとも願くはこれを改めさらんやとて上表して宋帝に訴へたまふ 朝廷にも勅裁決しかたかりけるにや其沙汰等閑なればふたゝひ上表しておとろかし玉へは 帝叡感のあまり天意山に勅して如法に僧席を定めさせ玉ひしとぞ

高祖天童の僧堂にゐませし時隣位の僧御袈裟をいたゝきて搭るさま如法なるを見玉ひ始めてこの正法ある事をしらしめして感涙し玉ふ

宋寶慶元年乙酉の春平田の萬年寺に詣たまふに堂頭元龜禪師前夜の夢に大梅法常禪師とおほしきか梅花一枝をかさしてのたまひけるは若し船舷をこゆる人あらんには此花を惜む事なかれとて花を玉ふとみて覺ぬ將しく高祖をまちて佛祖正傳の嗣書は一大事の秘藏なれとも容易に取出して拜見なさしむ時に久しく侍者たりし人も初て拜覽のよし歡喜大かたならず此後大梅山に登り且過寮に宿し玉ひし時大梅禪師來りて一枝の梅花をさつけらる靈夢を感じたまふことありこれら寔に不思議の勝因なり

高祖宋の諸山の知識にまいり玉ひしかともあさりとしたまふへき人も見へねは再び無際禪師にまいらんと天童にかへり玉ふ途中にて無際禪師遷化のよし聞し召し頻りに歸朝の思ひいてきぬ

永平道元禪師行狀圖會

頃いとすうなる僧のくしき扇をもち眼の光り常ならずみゆるか高祖を見て語らひけるは此ころ勅に應じて天童に住せらるゝ如淨禪師は道眼圓明なり急のほりてま見わたまへとをしへらるゝいと嬉しくてろの名を問たまふに我は此わたりに住老璉といふものぞとてされり高祖よろこびいりぎて天童に登りたまふ

同乙酉五月一日高祖天童山に登りはしめて如淨禪師と詳したまふに禪師つきての給はく佛々祖々面授の法門現成せりと懇待ことにあつきを侍僧あやしみて問奉れば禪師の給はく前夜正しく洞山大師光臨の瑞夢を蒙る今朝求法の人に逢ふこともとも不思議の勝縁なり思ふにうれ吾法此人によりて廣大世にをこる事あらんと此とき明全禪師重病に罹らせ給ひ天童山の了然寮に居ませしをどひ玉へは師を見てよろこびかぎりなく前に師榮西禪師の下にて法身の迷悟ある事を省り玉ひし縦由を糺し一偈をもつて師の得處を證明したまふしかるに五月七日禪師圓寂せしませは悲泣に堪すやかて烟となし舍利を收てねんころに供養したまふ

如淨禪師ある日坐禪の僧の眠るを責て參禪はすへからく身心脱落なるへしひたふるに眠りて何かあらんどのたまふ
高祖かたへに聞居たまひて豁然として大悟したまふ高祖やかて方丈にいたりて悟る所を演説したまへは禪師よろこひ印可し玉ふ其旨甚深なればこゝにもらす別記について需めしるへし

高祖江西に行脚の時日暮に荒村を過たまふに風さと吹荒ひ猛虎たけりて口をはりきたる高祖不驢柱杖を擲て巖上に避坐したまふに虎怖畏てにけさりぬ高祖の避玉ふいはほと見わしは彼柱杖の龍と化したる頭上にて有りける彼國にても希有の事なりとて繪かき仰きけるとなん其後寒巖和尚（顯德帝第三の御子肥後大慈寺の御開山なり）入宋の時この畫様をうつし歸朝せられて今にいたり世に虎はねの柱杖といひつとふ其一幅江州大津の驛青龍寺に秘藏す高祖あるとき道正庵を具せられて江西に行脚し玉ふ途に御病惱ありける元來人里とほき曠野なればいか、はせん道正をもひわつらひけるに驀地いとあやしき翁あらはれて一丸藥をあたへ奉れば頓平癒たまふ道正の名をとへば我は稻荷明神なり求法を加護すとの玉ふ道正の藥方を授かりて後行方をしらすこれ今の世に弘むる解毒丸なり

道正略譜

本祖道正者俗名懸山左兵衛督正四位下藤原隆英世居於京兆木下故氏曰木下京極相國爲光公九世之裔顯盛之男清水谷亞相公定之養子也生質俊逸博學孔孟之書委儒理兼玩蘇韓之法絕干詞章諸官家輩多滿門戶與同服之官僚角納言不遂而叙從三位任左衛門督治承年中外祖源仲家戰於宇治川而敗績自殺由是而邁世雄

髮乃隨伴永平祖師之入宋云云

高祖江西に居ませし時一朝ひとりの童子あらはれていひけるは師早く日本へ歸り法を弘め人を度したまへかし此地に淹留したまふことなかれと其名をとひ玉ふに我はこれ章將軍なりとそいまわか宗の寺院に安置しまつる守護神章馱天なり寶慶三年丁亥の冬天童如淨禪師にいとまを乞玉ふころ種々の法寶をもつて告ての玉はく汝異境の人なるかゆへに是を授て信とす國に歸りて化をしき廣く人天を利せよ將城邑麗落に住むとなかれ國王大臣にな近つきそ深山幽谷に栖て一箇半箇を接し吾法をして斷絶せしむる事なかれとまめに教示し玉ふ

高祖まさに天童を辭し玉はんとて黄昏におよび碧巖集をえて寫させ玉ふに鷄明にいたれと其巧終らされはかつ憾かつ勞れたまふ折から神人來りて助寫しつゝ速になりぬこれ我國の白山權現とそその書一夜碧巖と號して今加州大乘寺の寶庫にひめおきぬ御歸朝の船中にてうき雲まよひてあはやと見るかうち風吹きすさみ大波山のことうきみ沈みあれぬれば水主かん取もたましむ身にそはすあはてける時高祖默然として坐したまふに觀音大士一葉の蓮葉に乗じて海つらにおりまれたまへば風なぎ波しづかになりてつゝかもなく肥後國川尻の津に着たまひぬされば一葉蓮華の尊像を刻みて一字を草創したまひ南溟山觀音寺と號た

まふ本邦安貞二年戊子正月十八日なり高祖これよりすぐにみやこにのぼり建仁寺にいらせた
まふ

永平道元禪師行狀圖會乾終

永平道元禪師行狀圖會坤

されば建仁寺に三年安居ましくて寛喜二年庚寅の春より愛宕郡深草のことに閑居したまふ時
に偶作あり

生死可憐雲變一更 迷途覺路夢中行
唯留一事醒猶記 深草閑居夜雨聲

此庵を安養院と稱せし事了然道者になしたまふ法語の末に見えたり

此頃より高祖の御事を深草の佛法房上人とて道俗の崇敬おほし中にも日蓮親鸞等の上人の折に
ふれて参見のよし書に見えたりされは隨從の叢樹下露地にたゞめは高祖堪かたく思しめして
行法の道場建立をおほし立玉ふ勸化帖の序の略に曰

敬而十方一切諸佛菩薩聖賢僧衆天上人間龍宮冥府の諸衆善男女等にまうす一錢の淨信をもつて

一處の道場を建立せんともふ經に曰山林園田に安居の所を建へしとしかれば寺院は是諸佛の

道場なりゆへに良縁をむすはんかためは廣く十方にのることは唐土天竺のをしへなりと云云

時嘉貞二年十二月御發願ありて翌年四月落成せり同冬安居のはしめに開堂の大盛事ありまた臘

月除夜懷裝禪師を請して乘拂の式を行はる是我國禪林開堂上堂小參成道會乘拂等のはしめなり則寺號を興聖寶林護國禪寺觀音導利院と稱せらるされは化門日に隨ひて廣大に參禪の衆いくそはくそかゝれは由良開山清澄禪師等もこゝに仕へて菩薩戒をうけたまふ

文暦元年懷裝和尚始て高祖に相見して衣を更て事たまふに行業衆に超へ玉ひしにより屢々高祖に印澄せらる終に嫡嗣となり玉ふて我國曹洞の第二祖と稱しける其傳の略に曰

禪師名懷裝洛陽官族藤氏子幼依台山圓能祝髮博學教觀兼修淨土行一旦棄去參禪于談峰覺晏纔有省俄聞道元和尙親傳洞上之旨寓居建仁寺特往歸向一日元舉一毫穿衆穴因緣師於言下大悟寶林開堂冬命師分座說法嗣後開山永平師從焉凡有法令命師施行建長五年七月承命董住持之席由是道價益高於天下弘安三年夏四月示疾遺誠門人云我滅後火浴收遺骨即瘞於先師塔旁勿別造塔八月廿四日半夜書偈畢溘然寂云

當時越前國に波多野出雲守義重とて世に聞えたる勇士あり其妾みめうるはしくこゝろさますなほなるに愛て寵みもてかしのけは妻女ふかく妬みてひそかに從者をして彼妾を太山の池に淪めしむるかに亡魂夜なくあらはれてくるしけに叫喚ければ里人おそれてゆきも絶にき

ある僧あはれみ高祖の道德をつたへきて都にのぼり血脈をこひ歸りてかの靈に授けけるに忽紫雲棚引妙なる聲して吾無上の正法をえし功力により幽冥の苦をまぬかれたりと夫より義重高祖を尊崇せらるゝ事いとふかし
仁治三年十二月十七日波多野義重京六波羅の館にて高祖を請し奉つりはじめて御說法を拜聽せらる

波多野家畧譜

大職冠鎌足公七代田原藤太秀郷十四代の後裔義通の妹は中宮太夫進朝長の母也保元の頃より左馬頭義朝と不和にて都を退き相模の波多野に移る依て氏とせり義重は義通より五代波多野五郎とて東鑑三十八卷に歴代武勇の家と載たり

高祖深草の御寺に十年あまり住たまひしにさすが都ちかき里なれば月卿雲客の尊崇車馬の往來日々に絶さりければうれたきことに思召うへ淨先師の教誡おほしめされ更に深山寂靜の地を求め玉ふか諸檀越請し奉らんとて山林田園膏腴の地十二所まで奉りしかとも御心になはばすこゝに義重申されけるは拙者所領越前の深山に勝地あり元來古寺の跡なり御下向ありて說法度生したまはゞ吾等一族の幸甚はさらなり北國の勝運このうへや有べからずと高祖こたへてのたまはく吾本師淨公は宋國越州の産なればその名をおひて尤なつかしく我望む所なりとて御返答

あり寛元元年七月深草の御寺を出させたまひ日あらず越の國志比の莊に着したまひまつ吉峰の精舎に入らせたまふ

高祖吉峯におはしますこといまだ幾ばくならざるに四方の雲霧磨のことく集る是によりて閏七月朔日より御教化の事はしまりき先歸依の檀那には出雲守義重左金吾入道覺念をはじめとして前大和守藤原真人源藏人野尻入道覺阿左近將監安主等その外諸人徳風になびきて新に道場を建立し奉らんと便宜の所を擇るゝに市の山の東傘松の西山水の鍾秀の境地なればとて義重等手づからみづから其の地を平らげ吉峰の茅舎より此地へ移りたまふ明ければ寛元二年甲辰二月半大佛寺建立礎なりて同四月の末吉日をえて上梁の御式あり此日天神地祇感應あれば龍神河伯瑞雨を降し林木山草おのづから吉祥をあらはすさてこそ山を吉祥と號したまふ同霜月の三日僧堂建立の時も祥瑞前のことしとぞ施主は左金吾禪門覺念同子息左兵衛尉藤原の時澄なり建擲和尚の記に曰左金吾禪門覺念といひしは今の北村真柄の先祖なりとしかれば北陸七國志三卷に見えたる真柄備中守同姓左馬助等の先祖なること面山和尚擲記の補註に出せるかことし

寛元三年乙巳四月十五日上堂説法の折から天華雪のごとく降る誠に末代希有の瑞相なり

寛元四年丙午六月十五日より大佛寺を改て永平寺と號し玉ふ同五年正月十五日布薩御説戒の時

五色の彩雲丈室のあかり障子にたな引てしはしきえす參詣の人々たときこととに拜みすゑの世に隨喜せしめんかため不思議日記を書遣されたり其略に曰

志比莊方丈不思議日記事

寛元五年丁未正月十五日説戒此日自未之始至申之半一分正一面障子有五色光聽聞衆貴賤拜之云云 佛子尊慶。同昌圓藤井光成。大中臣真安。

坂田守宅。久瀨有光等（各々一列に書し名の下に華押あり）右の日記現今信州松本全久院にあり

鎌倉最明寺殿高祖の徳風を慕ひあつく請せらる寶治元年鎌倉に下向まし／＼菩薩戒を授け法體を道崇と名つけ玉ふ其外道俗こそりて受戒し法味に潤ふもの數をしらすあるとき道崇の請によりて不立文字の意を詠したまふ

あら磯のなみもえよせぬ高岩にかきもさく／＼きのりならはこそ
と道崇禪門朝暮説法を拜聽し歸敬のあまり一字を建てたまふ今の建長寺是れなりさて開山と仰かせらるゝをかたく辭したまひ翌年春志比に御歸山なり

最明寺殿より玄明首座をめしてのたまはく越前國六條縣にあゐて三千石吉祥山によせんとて券狀を給ひ彼方に贈るへしとありければ玄明歡喜していそぎ高祖の御許にはせつき御券狀を奉り

滿山の大衆にもよろこび玉へと披露ありけるを聞しめして玄明の心きよからすとて衣をはき取
撰出したまひ其座禪せし床下の地をさへ七尺うち捨させたまひ券狀を厚く謝して鎌倉へ返上
したまふいさきよき御ころ仰へし貴ふとふへし

因云此玄明首座も常人ならず高祖御入滅の後百三十年餘り經て伊豆の國箱根山にて陸奥より
行脚の僧木陰に憩ひ居りしに老僧竹杖にすかりて高祖御在世のことを語られける僧ふかく感
して如何なる御方そととひ侍れば我は玄明といひしものなりと答へてさりぬ此僧永平寺に登
りて語るといふ

寶治二年戊申の夏の初より妙なる香氣僧堂の内外にかほれりこれ諸佛諸天の影向したまふら
んと人々尊く覺ゆ

寶治三年己酉正月元日一山諸堂を莊嚴し聖賢の諸尊を供養したまふに羅漢尊者の木像畫影を
し供物法式はさらなり勸請敬禮のとき此木像畫影をはしめ諸堂の尊像一同に光りを放ち供養を
うけ玉まふ又寺の東なるいはほの松の梢に十六尊者彩雲に乗して降臨あり故に其老松を今に羅
漢松と號すその時團扇一柄を遺したまふ檳榔扇に似たり收て寶庫にありこれ高祖行脚の時宋の
徑山羅漢堂の前にて相見し玉ふ老璣の持玉ひしに似たりされは老璣は羅漢の一尊なるへし此時
俱法會の行式は高祖みつから撰せられて其草稿今に信州松本全久院にあり又彼羅漢像畫十

七軸並現瑞の記高祖御眞蹟にて常陸國若柴の金龍寺に安置せり其文に曰

寶治三年酉正月一日己午時供養

十六大阿羅漢於吉祥山永平寺方丈于時現瑞筆記

佛前(特殊勝美妙現)

木像十六尊者(皆現)

繪像十六尊者(皆現)

現瑞花之例大宋國台州天台山石橋而已餘山未嘗聞也當山已現
數番寔是祥瑞之甚也側知

尊者哀愍覆護當山當寺之人法所以如是開闢當山沙門希立

建長二年の頃波多野義重一切經を書寫して吉祥山に納れしことあり在俗の身として信心もど
もたのむへしこれによりて高祖兩度まで上堂御說法ありし事御録中にもみえたり

後嵯峨帝より紫衣を賜りけるを三度まで辭し玉ひしかども 帝許させたまはさりければ頂戴あ
りて一偈をつくり上謝し玉ふに云

永平雖三谷淺一勅命重一重一々

卻被笑猿鶴一紫衣一老翁

うの御衣は高閣にさし置かれて終に御着用なしとす

建長三年辛亥後山のおくに時々不思議の鐘の聲聞ゆるよし出雲守より尋ねられしかは高祖御返書に曰

御尋につきて申候此七八年の間たひく候也今年正月五日子時花山院宰相入道と希玄と靈山院の庵室に佛法の談議しるところにかねのころ二百ころはかりきこる其あはきさ京の東山の清水寺のかねもしは法勝寺のかねのころほとに候へはずいきしてき候うろにたふとくおほへ候宰相もふしきのれいちなりとすいきしいりて候き入道うせられても中將(兼頼朝臣)一室に候なからきかす候めの子に右近藏人入道(經資法師)これもきかす候うのほか女房二三人さふらひ七八人候もみなうけ給りし候はす候 此御眞蹟の書今にあり 建長四年壬子夏の頃よりいさか御心地例ならずされと正法眼藏八大人覺の巻を御教示あり此御教海は遺教經をもととしてかねて入涅槃の近きを示し御遺言と見たり懷裝禪師の曰もし先師を慕ひ奉らは此巻を書寫して護持すへし是釋尊最後の教勅かつ先師最後の遺教なりと是れより此巻を詳覽する輩は感涙を催し住持も此巻を談する時は聲をあけて泣玉ふといひ傳ふ末の世におゐても此遺教を守らは宗風永く扇き門派流通して退轉すへからすと成り 建長五年七月十四日高祖永平寺を御退ましく懷裝禪師へ御住を御譲り則普山の法式嚴重に調

へさせたまふさてまた高祖御惱日久しくまませは御親族の公卿並義重覺念等までも御藥養ましませと頻にすめ奉れば八月五日御上洛したまふ懷裝禪師御隨伴なり徹通和尚は脇本の宿まて御伴ありしが高祖の尊命に汝は是より寺に歸り能々守護せよとて御暇を賜はりしかは徹通和尚はこれを最後の拜顔ならんと涙にむせひ肝に銘して忘すれすと申されけり夫より木部山といふ所にて

艸のはに門出せる身の木の部山雲に道ある心地ころすれ
と詠し玉ひやかて御入洛ありて高辻西洞院俗弟子に覺念か館に入らせ玉ふをかしこくも
主上聞し召いろき典藥頭をして御脈をうかへはせ玉ふと最もあつし又諸人聞きおよひて御枕邊に拜する輩多し御腦のうちにも機に隨ひて御教化ありしは尋常にかはらせたまはされしと

同秋中秋の月をなかめたまふて

また見んとおもひし時の秋たにも今宵の月にねられやはする

と遊はしければ御傍に侍る僧おのくあはれに涙にむせひけるとあり

高祖ある日覺念か館にて法華經の若於中園若於林中若於樹下若於僧房若白衣舍若在殿堂若山谷曠野是中皆應起塔供養所以者何當知是處即是道場諸佛於此得阿耨多羅三藐三菩提諸佛於此轉於

法輪諸佛於此而般涅槃と微音に誦し室内を經行し玉ひ又此文を面前の柱に書つけ玉ひ終りに妙法蓮花經庵とかきとめ給ふ是は御入滅のところ則諸佛道場諸佛如來もかくのことしとの給ふなり

同廿八日高祖沐浴して淨衣を整へ玉ひ中夜にいたり筆を採削を書し玉ふに曰く

五十四年照第一天一打箇躑跳一觸破大千一

嘆 渾身無著處活陷黃泉一

と筆を擲ち正身端座して寂を示し玉ふ此時靈光あたりを照し異香室中にかほる懷焚禪師は悲歎に堪へず半時許り絶入玉ふ慧凱慧鑑義進覺佛等の舊參並に教毫圓智佛僧實智了然左義重覺念等をはしめ有あふ人々天に仰き地に俯して悲泣のさまいふはかりなし一時の憂氣王公大臣におよへりこゝにおゐて金龍を天神中の小路の草庵に入れ奉り此にとゝむること三日御尊影なほ在すかことく異香止らさりければ結縁の道俗群集りあらしひ拜み奉りて父母をうしなふかことく見聞の人々感涙を催さるはなかりき

同九月二日懷焚禪師を始として隨侍の人々金龍を東山赤築地の精舎にうつし奉り釋尊の規範に準し茶毘の法式あれば金色の舍利數十粒を收めけり實に道德の勳煉なりとて誰もあふかさらめ

同六日御舍利を收め都を出つ御隨伴には懷焚禪師をはしめ慧顯慧鑑惠進覺佛圓智佛僧實智等なり(各位本朝の僧史に載たり)さて御親族の公卿よりは家司に仰せて路次を護らせらる義重覺念らは自ら歩行にて參られしとそかゝれば途中行禮の輩貴賤蠅のごとくむらかりあふきつゝ知もしらぬも袖をしほるめり大和前司清原真人源藏人左近將監安主らは志比の山にまち請て臨本今庄のあたりまで出迎ひ奉らる御寶棺夜にひるにいそかれて同十日酉の刻はかり吉祥山に着せたまふ夫より御法事勤行の法式ねむころに營み玉ふつはらにはしるさす同十二日御入塔供養の折から風にたくひてももの音空にひゝき空炷ならぬ薫りこゝらみちぬ山の草木みどりの色赤みて凋るは名に聞し鶴の林に異ならずやかて西北の隈に墓をつくり奉りて承陽庵と稱す嗚呼其山高ふして其樹ちのつから茂く其谿深ふしてその流れいよゝ遠し今六十餘國中に三萬五千餘の閑若充滿て水もとに涙り法の燈火かゝくも五百五十餘年にいたるまで諸嶽にぬき出て高祖の徳光谷くゝのさわたるきはみ舟の艦のごとくまる限り語りつき云つきてしたはぬ隈なければ長へに無明の長夜を照し無邊受苦の衆生を救ひ玉ふいさをしかきかそへは濱の眞砂もつきなんかしされは十かひとつを書しするすにとる筆の命毛もちひてあし手なせはとめつ誰もこゝろあらはあふかさらめやたとまさらめやといやまひてまうす

吾 高祖無作の徳業はいかてか凡人のはかり知るへきやされとも時のわたの顯に見ひそかに

察し奇珍のとうとき遠後の世の人にも知らせはやと前に波多野氏か需めによりて建斯和尙の記せられしか委しなれども風に草の偃す迄にふよはさるは末の世につとめ易き教の法にあらされはなりかゝる御法遠は今更に拙きうつし繪となし將た眞海名もてしるしぬるを知者達の関て老婆親切と委さみたまふ共よしや賤手巻くり返し
 祖恩の高き御徳を四の海の隈々迄も愚人どもに仰はやとおもふあまりにこそ
 文化五のとし冬
 珍牛しるす

永平道元禪師行狀圖會坤 大尾

日蓮聖人一代圖會叙

叙曰昔朝公述鼻祖一代之大綱名之曰化導記爾來諸師著作桃李矜艷蘭菊爭芳各雖盡善非無小異獨至如六牙潮師之別頭統紀可謂集而大成矣雖然文章廣博句句聯玉意味深長不爲易解童蒙之徒何以得探其頤哉于茲清信之高士深憂此事寓目囊箱終集薩埵一代之事業撰爲六卷大憑潮公之統紀取樂和文傍填國字往往舉諸傳之異說間又加以圖繪逆機之兒輩見之豈不結勝緣哉若有我慢之輩雖起輕毀之言謗罪猶勝敬權佛本化薩埵利物化他唯要使本末有善之族終歸實善惟塔中別命之徒眞俗殊體互現娑婆廣開妙扇普靡玄風所作佛事未曾暫廢冥顯六或和光同塵底下凡慮何以可測哉憶以高

士謂六万恒沙之眷屬亦不可乎文字即解脫無離文字說解脫然則無此書者無由見法祖一代之成功祖者是色讀法花之理體也欲見法花之理體宜於此書尋求焉嗚噫偉哉文字之德方如其現紙面應于世務成功而退猶孫吳之應變用奇正不有文字何知奧妙之佛心不有著作爭知古今之事蹟於茲傳記著述之功德猶勝讚恒沙佛陀者聊傾微管題其首時安政戊午仲秋

房州小湊誕生寺

現住 日 琢

日蓮上人一代圖會卷之一

第一 上人家系誕生及び清澄寺に入て修學の事

それ日蓮大菩薩は。本化上行菩薩の御再誕にして。末代濁世の時にあよび。身を閻浮提に現じ給ひ。末法萬年の妙法蓮華經を弘通し給ふとは。世人のよく知る所なり。蓋し上行菩薩の本紀。佛祖統紀に載る處。絳長きにより卷中往々。弘法の因に據て鮮明さん。抑々日蓮大士が俗性を索ね奉るに。姓は藤原にして。大織冠鎌足の苗裔なり。御父を貫名次郎重忠といひ。御母は清原氏にて。舍人親王五十世の裔。山崎左近從五位兼良の女なり。その名を梅菊といふ。按ずるに本化別頭佛祖統紀には清原氏云々。畠山家の族梅千代といふ。上總國大野吉清が娘なりといへり。また註書には。蓮師姓三國氏父遠州刺史貫名重實次子重忠也師其第四子其先聖武皇帝之裔父自遠州。窟安房國長狹郡東條郷片海市河村小湊浦。成漁叟。母清原氏云云とみゆ。かゝれば本文と同じからず。世間流布の御傳記には姓は三國氏にて。先は武天皇の孫。父は三國大夫なり。母は畠山の氏族にて。をさな名を梅菊女といへりとみゆ。各異同ありて一定せずといへども。恐らくは佛祖統紀に載る處。正しき説ならんか。後の職

者これを正さば幸甚ならん

かくてその母一夜の夢に。朝日晃々と輝きわたる。心中にいと貴く覺え。一心に念誦するとき。日輪虚空を離れ給ひ。蓮華に乗じてその口に。飛入るよと見給ひしが。驚き覺てそのとを。其人重忠に語らるゝに。俱に奇異なる想ひはなせど。何の故といふを知らず。然るにそれより身重になり。月日満て誕生ありしは。人皇八十五代 後堀河帝。貞應元年 壬午二月十六日。午の刻にてなんありける。この日は天氣殊に朗にて。風も風ぎ波和らかなる。海上に青蓮華を生じ。いまだ時節も至らぬに。數十莖の華開き。その長さ丈餘あり。遠近の人これを見て。これ何の奇瑞ぞ。といひ傳え聞傳え。船に乗り汀に集會。觀る者市をなせりとぞ

撰者按ずるに。およそ蓮華に四種ありこゝにいふ青蓮華は。梵名を優鉢羅花といふ黄なる蓮華を拘物頭花といひ。紅なるを鉢曇摩花といひ。白き蓮華を芬陀利花といふ。因て法華經は白蓮華に喩ふ。白きは色の根本なるゆゑ。この法華經は諸の經の根本なりといふ義とぞ。但註書讀には。海上蓮華のとをいはず

この兒容貌嚴毅にして。宛然成長の人のごとく。復とあるまじき嬰兒なれば。父母共に深く愛し。掌の珠頭挿の花と。慈しみ給ひつゝ。名を善日麻呂と號らる。當下またも不側なるは。この家の傍に清水を涌出す。常にはあらぬ所ゆゑ。人々また是を奇として。それを汲とりこの嬰

兒の。産湯に用ゐられけるが。夫より後この清水。早に減せず雨中に増ず。實に奇特の靈水なれば。上人の誕生水。あるひは蓮華潭と號け。今も尙こゝに存せり

按ずるに上人は重忠の第三子なり。長を重政といひ次は天す。次は高祖にてその次は重友。貫名仲三郎藤平と稱す。この藤平の後豪富にして子孫多く上總國。多喜郡に居住せり。抑この家大織冠鎌足の後裔として。かゝる邊土に身を潜め。耕漁の賤しき業をなし。活計となす緣故を索ぬるに。鎌足十二代の孫。備中守少納言共資。遠州の國司となり。從五位に拜す。かくて同國井谷八幡宮の。傍に一の井あり。永延元年正月朔旦。社司某こゝを過るに。井の中に嬰兒あり。奇みてこれを見るに容貌殊に清らかにて。眼睛人を射るに駭き。これ凡人にあらしと思ひ。抱きとりて家に還り。慈しみ育つゝ。既に七歳に及ぶとき。共資聞てこれを奇とし。養ひて己れが子となし女を以て妻合たり。十五歳に及び首服を加へ。名を共保と呼けるが。人品絶倫智謀勇睿。實に神の如くにして。民を撫で士を愛し。軍功居多なるにより。徳に懷き威に怖て。國民多く從ひけり。共保その初め井中より。出たるを以て井伊と稱す。またその傍に盧橘子あり。因て井の中に盧橘の子を畫き。家の紋として旌旗及び。兵器調度にこれを用う。これより井伊共保と稱せり。共保六代の孫。四郎政直。遠州貫名の郷を領す。因てその氏を貫名と更め。世々この所に居住せしが。重忠三十歳のとき平氏の餘黨。富田基

度三浦盛時等。伊賀伊勢の兩州に起り。同國の守護山内首藤刑部經俊を襲ふ。軍不意に發つて經俊防ぐと能はず。士卒みな狼狽たり。基度盛時勝に乗り。日永若松高角富田の。數城を搆へ威を震ひ。鈴鹿の嶮に據りて往還を塞ぐ。都鄙これが爲に困めり。當下京都の守護源朝雅。畿内近國の兵を發し。これを撃と甚だ急なり。基度盛時防ぎ難く。大に敗して潰え奔る。京軍直に迫り來つて。終に賊將兩人を誅す。こゝに至つて忽地に。州内平定するを得たり。貫名次郎重忠も。この謀叛に同意して。若松の壘に籠る。國中平治の後その罪により。安房國に竄せられ。夫より田を耕へし漁をして。年月を送られしなり。復按ずるに共資の會祖父。共良は少納言たり。この時いかなる故によるか。三國を以て氏とせるよし。佛祖統紀に見えたるを。流布の本にこれを擧て。當時貫名と稱するをいはず。高祖三國氏は生れ給ふも。天竺震旦日本の三國に。法華經流布の表といへるは。例の附會といふべきにや。また御父を大夫といへるも。その據を知るによしなし。重忠は次郎といひて。元來大夫に任ぜられず。其後竄謫の身となられたり。その先。聖武帝に出たりといふも。更に證とする所なし。されば世間流布の本は。間杜撰多くして。疑ひなきと能はずといふべし

かくて人皇八十六代。四條帝の天福元癸巳年。上人十二にならせ給ふ。元來聰明伶俐なると。自餘の童のちよびなきに。幼きより佛乘に皈し。假初の戯れにも。幡蓋を建會座を設け。說法

の景勢を做し。佛を禮する學びをなし給ふ。于茲同國長狹郡に。千光山清澄寺といふあり。眞言宗にして當住を道善といふ。博學宏才の智識なりしが。善日丸の噂を聞て。父母を勸めこの寺の。徒弟たらんとを誘へども。重心その身の罪によりて。かく邊土に放たれけれど。靈祖は既に鎌足なり。この兒異相の奇童なれば。頓て廢れたる吾家名を。興すべきはこの見なり。と思ふから曾て諾せず。志かるにまた善日丸も。只管出座の懐ひあれば。右左して父母に歎き。道善を師とし學問を。勉げやと乞れけるに。父も即ちこれを許し。その年五月十二日。清澄寺に到り給ひ。名をも藥王麻呂と更められ。外典といひて諸の經書。諸子百家の書籍を學ぶに。ただ一回にして暗誦せられ。夫より眞言の教書を受。たゞ一見にしてよく暗記せらる。道善只管驚き歡び。圖らざる大法器なり。我門を起さん者。この見ならで誰かあらん。と心中の喜悅限りなけれど。その聲めより父母の。深く惜むを知るがゆゑ。取戻さるゝとやあらん。と恐れてこれを人にも語らず。年を逐ひ月を積て。藥王麻呂十八になり給ふ。いよく才智兼に勝れ。年老なる同宿徒弟も。これが右に出難し。こゝに於てその英名。忽地に發するより。今は猶豫もなりがたく道善は小湊に來り。重忠夫婦にうち對ひて。云々の由を告。實に絶倫の英才なり。殊に藥王麻呂も佛に皈す。今より貧道が徒弟となし。出家得度を許したまへ。それ世俗の常言にも。一人出家する時は。九族天堂に生ずといふこの事。いかにと談せらるゝに。重忠夫婦も

嚮に似ず。忽地に諾ひければ。道善大いに歡びて。藥王麻呂にこれを告。同年十月八日。剃度の筈を設て鬢髮を剃落し。頂相を圓にして。その名を是性その字を蓮長と號られ。これより受戒入壇密印。灌頂。悉曇の類まで。師より盡く授けらる。かくて仁治元庚子年。高祖御年十九にして。學徳修力この山中に。及ぶ者一人もなし。智徳兼備の名一時に發し。胎藏金剛の曼荼羅に入り。十五壇供養の次第を承給ふ。抑十五壇戒法といへるは。一には一字金輪の法。二は四天王の法。三は不動明王の法。四は大威徳の法。五は轉輪聖王の法。六は十壇大威徳の法七は如意輪の法。八は毘沙門の法。九は如法愛染明王の法。十は佛眼の法十一は六字の法。十二は愛染明王の法。十三は不動の法。十四は大威徳の法。十五には金剛童子の法。また尊星王の法大元の法五壇の法守護經の法なりとぞ。諸もある時室を閉。その中に籠り給ひ。熟思惟し給ふやう。吾衣食を事として。山より高く海より深き。父母の恩を捨て。法場に入たるならず。無上菩提を求めん爲なり。然るに今因縁ありて。眞言の教へを稟け。大日如來金剛薩埵。龍猛龍智金剛智。不空慧果鐵塔の。相承綿々として今に到る。然るにその密授に至りては。多く金剛智不空の私語なり。また吾邦なる弘法慈覺いよくもて私語を加へ。交顯密を争ふものから。蘇悉地經は金剛手。軍荼利夜叉の爲にこれを説く。佛説といふにあらず。また菩提心論は。或ひは龍樹の造るといひ。或ひは不空の作といひ。その異説紛紜として。信を取るに足ものなし。

露宗の祖師相好を備へ。大神通力を現じて法を説ども。大丈夫たるべきもの。何ぞ世尊の公言を棄て。自家の私説に陥らんや。大般涅槃經を讀に。法に依りて人に依され。義に依て語に依され。智に依て識に依され。了義經に依て不了義經に依されとは。如來最後の遺教なると。坦然として明白なり。これをもて師に問んと。自らよく胸に納め。一時師の道善坊に。このことを問けるに。師は何とか思ひけん。また答ふると能はざるか。口を箝みて默然たれば。高祖は其處を退き給へど。彌疑惑心に凝て。只管この義を氷解せん。と日々密室に籠られたり

第二 高祖虚空藏の示現により鎌倉光明寺に入給ふ事

諸も高祖は種々。智慮を廻らし給へども。いまだその疑心を解に至らず。こゝに清澄寺の山の頂に。虚空藏菩薩の祠あり。その應驗響の如く。尤もこの山の開祖なる。不思議法師の作にして。本朝無双の靈佛なり。いさや一百日の參籠を企。かの菩薩の冥助を請んと。かの祠に參り給ひ。一心不動に祈られけるが。その滿散の曉に及び。夢ともなく現ともなく。六十計りの異なる法師。忽然として顯はれたり。高祖誰ぞと看給ふに。異僧右の手に大寶珠を擎げ。その光り赫奕として。四邊も輝くばかりなり。當下異僧告ていはく。汝われを祈ると切なり。因て大寶珠を授けんと出し給ふを。辱しと。左の袖に受給ふ。寶珠躍りて胸に入ると。思ひて

夢は覺給ふに。徧身に汗を流し。壁に倚て茫然たり。少頃あつて常に復し。心中歡喜充足せると。喩えをさるに物もなし。且く念誦三禮して。この堂を下り給ふ。さてその年も暮に及び。明れば仁治二年となり。大歳辛の丑にあたる。高祖御歳二十なり

按ずるに流布の本には云云。ある時氣高き老僧一人。後門の方より影向なつて。右の手に明星のごとく。光り輝く大寶珠をもちて。聖人にむかひ曰く。汝が祈る所の大智慧を。さづけんとして與え給ふ。聖人右の手にうけ左の袂に納め給ふ。御歡びの用想ひやられて。有難かりし奇瑞なり。夫よりいよく一を聞て十を曉り。辨舌懸河の流れの如く。まじくけりと記す。これは註書證にいふ所と同じ。但いさゝか異同あり。註書證には云云。三七日夢に六十有餘者宿右手。掌下如明星。大寶珠。授我。吾自後聞。一知。十或云。夢下。當堂後門老僧來。取二本尊所持寶珠。與二爾所祈之智慧。不三言訖。一投。玉。進。通。胸。入。左。袂。とみえたり。こゝに載て參考に備ふ。また按ずるに近年印行の『高祖紀年錄』には。この事を高祖十六の歳として。嘉禎三年丁酉とす。統紀の説と大いに異なり

其後高祖は吾も覺えず。才智いよく宏大になりて。万卷の書も見るに。随つて氷解し。胸中義理に明らかにして。實に曇りなき鏡のごとく。また是晴たる月の如し。然れども猶御心に。いまだ足りと思ひ給はず。再び虚空藏の祠に入り。また百日を限りとして。求聞持の法を修せら



高祖
虚空藏
宝珠
授し給ふ

る。然るに行滿の晨におよび。忽地に眼瞑み。彷彿として人事を覺す。將に絶倒せんとし給ふ。この時血を吐こと數升。更に昏瞑して臥給ひしが。暫時ありて夢のごとく。また醉の醒たる如く。眼を開き給ひけるに。氣息泰然として起居輕く。智辨自在を得給ひけり是偏に虚空藏の感應靈驗著るし

按ずるにこの段諸書に見えず。統紀に斯の如く載たり。或人のいはく高祖の英才。元來本化の分身なれば。今佛神に請ふてその智量を得給ふべきにあらずといへども。一切の衆生。根鈍才なるも。よく信心勇猛なれば。智をも授かり福をも得るとの。法則になし給ふなり。と後世淨土の僧祐天が。血を嘔吐たる話説などは。天地懸隔なるものといへり

それより高祖大藏に入りて。一代經を閲し給ふ(一代經とは世にいふ一切經なり)當下無量義經を讀み給ふに。佛大莊嚴菩薩に告給ふの文あり。あれ先に道場菩提樹下にして。端坐すること六年にて。既に阿耨多羅三藐三菩提を得たり。かくて佛眼を以てこれを見るに。衆生の性欲種々なれば。強て正法を説といへど。或ひは耳に入り或ひは入らず。入ざる則はこれ空言なり。故にその時に應じ。種々にして法を説に。みな方便力を以てす。この間四十餘年。いまだ眞實を顯はさず。この故に衆生得度差別ありて。無上菩提を得るとなし。譬は水の垢を洗ふが如し。この水あるひは井あるひは池。あるひは河あるひは江。あるひは溪渠あるひは大海。みな悉く水にして。よく垢を洗ふといへども。その水の性に依て。洗ふ所齊しからず。されば衆生煩惱の垢穢を洗ひ去るに及びて。亦復斯のごとくなれば。初中後の差別あり。初は中にあらず中は後にあらず。その説文辭は同じけれど。義に於ては各異なり。と高祖これを閲し給ひ。忽地に禮拜し。今諸宗瓜の如く裂け。おのゝく權實を争ふなり。それ如來は何の宗ぞや。今この經を閲するに。全く諸宗兼學にはあらず。いざゞ是より天下に遊學し天下の道を竭してその致を究め。再び大藏に入て自ら佛乘を解し。更に佛界の公道を得て。衆生に示し迷路を開き。天下の妄想を新にせんと。大誓願を發し給ひ。この事をもて師の法印に告給ふに。道善大いに呵つていはく。無量義經は法華經の序分なり。それ法華は顯教にして。無明の域を出たるもの。祖を欺き師を欺いて。逆路伽耶陀に墮することなかれ。と高祖聞給ひて心には。應せぬ所ありといへども。師資の禮を重んじて。再び口を開き給はず。かくて仁治三年になれり。高祖御年二十一。遊學の志確乎として扱されば。慈師の許しを得て。たち出んとすればこそ。さまざまの妨あれ。言ずして立出なん。と密に發足の準備をし給ふ。同宿等は豫め。これを知りて譏るを聞。燕雀何ぞ鴻鵠の。志を識べきか。吾少く背くに似たれど。理を押ときは順なり。他日大に佛眼を開き。恩を報ずる時に至りて。俱に歡喜の眉を伸ん。必定々々と心を定め。密に清澄寺をたち出て。まづ鎌倉に遊學せん。と程谷の驛に到り給ひ。一族店に宿し給ふに。佛の木

像をもて小兒の戯具となし。また主は法華經をもて。破れし隔紙を繕ひ居たり。高祖これを視給ひて。什麼汝達何をかする。聖像をもて翫ひとなし。聖經をもて隔紙を張る。勿躰なきにあらざるや。といひ給ふに主答へて。これはたゞ木偶人。これはたゞ戯文の反古なり。何の勿躰なきとあらん。吾は淨土宗門にて。聖像といふは阿彌陀佛。聖經といふは三部經のみ。その他はみな益なきもの。何の怪しむことあらん。と自若としていひければ。高祖は眉を皺め給ひ。俗書だに捨べからず。况やこれは佛經なり。小乗も猶佛說なり。况やこれは大乘なり。淨土の宗趣怪むべし。といふを聞て主の漢士呵々とうち笑ひ。御房がごとき事をいふ者。折にふれて見聞すれど。吾祖法然上人は。切にこれを誡めて。捨附閣抛と教へ給ふ。則ち捨よ附よ抛よとのに於して。吾宗躰の意味深ければ。疑ひ易くして信じ難し。吾をもて御房を見れば。千中無一の雜行に執着して。百卽百生の正行を蔑にす。これ佛法を學べるの外道なり。と強に譏りしかば。高祖熱聞給ひ。さても異なる主人が言辭。それ法然は何爲者ぞや。方便か眞實か。甚だ怪むに足ものなり。まづ往て淨土を學ばん。と翌日鎌倉に到り給ひ。光明寺に入給ふ。是は淨土の談林にて。能化を良忠と號けまた然阿と呼ぶ。高祖これに謁し給ひ。修行の爲に來れりと宣ふ。良忠諾して吾宗に。旨とする處の書。撰擇本願念佛集を。授てこれを讀しめけり。高祖彼書を閱し給ふに。全篇たゞ十六章あり。名を阿彌陀の本願に假り衆生を欺き誑かす。稠の

日程谷の旅店の主が。いふ所に一點差はず。その書中に聖道淨土の。二門を立れどその實は。聖道を去て淨土門に。入らしむるの教へなり。この邪見は元曇鸞法師が誤より出て後の沙門。具眼を開かず迷ひに惑ひ。一言衆盲を欺くに至る。これ視るに足ものなしと。たゞ一回にしてこれを見限り。懣もしからずは思はれけれど。猶得る所やあらんかと。暫くこゝに返り給ひ。一時大集經を看給ふに。佛のいはく我滅後に。正像末の三時あり。また五の五百歳ありて。一にははく解脱堅固。二にははく禪定堅固。三にははく持戒堅固。四にははく多造塔寺堅固。五にははく闍淨堅固。白法隱沒と載られたり。高祖熱聞して。掌を破と拍れ。奇なるかな奇なるかな。佛纖の炳然。更に符節を合し。如し。今の時を考ふるに。末法第五の五百歳。闍淨堅固白法隱沒。この時に當つて佛法王法。闍淨あつて息となく。白法の隱沒せるも。理數にして誣べからず。これ人力の及ばぬ所。嗟天なるかなと歎じ給ひて。御心裡いさゝかは。開悟し給ふ所あり。然るにこゝなる能化然阿は。日々講筵を開きけるに。諸宗聽聞としてこゝに來る。高祖もまた碌々として。日々その列に在しけるが。更に一事の取るべきなく。淨土の旨は悉く。曉り玉ひて今ははや。こゝに用なしと去り給ふ

撰者欽て四方にまうす。抑この御傳記は。それ〴〵の古書ありて。世にまた乏しからざるを新に梨棗を費す所以は。その本書は碩學の作にて。婦女童蒙に解し易からず。然とて國字

に編りし書は。實に俗書にして誤謬多く。且はいふべきことをいはず。始め終りを詳にせず。これもまた沓を隔て。痒きを搔くの思ひあれば。這回暴に發起して。秃筆と走らすものから。己れもまた固陋にして。後の嘲りをいがはせん。然れどもたゞ高祖の眞實。何が故に諸宗を誇り。此大乘を弘め給ふ。とその所謂を説ざれば。この書の著述更に詮なし。因てその辭の十が一をも。説んとすれば前文の如く。經文を掲げ出し。婦女童蒙に解し易からぬ。條も多くなりもてゆき。讀者大いに倦んを恐る。まかれども猶閣ず。眼を著て讀に至らば。自然に會得するとあらん。看官勉めて讀んを請ふ

第三 高祖比叡山及び南都七大寺遊學の事

諸その年も暮て寛元元癸卯は。高祖御歳二十二にならせ給ふ。這回は比叡に至り。天台宗を學ばんと。遠く京路へ杖を曳給ふ

按ずるに去年浄土宗を鎌倉に學び。それより房州へ歸り給ひ。清澄寺にして戒體即身成佛義を著はし給ひ。また鎌倉へ往給ふに。叡山の尊海事ありて。此地に来るに逢給ひ。それより同行して比叡山に。到り給ふと紀年録にみゆ。俗間普通の本には。たゞ故郷に歸り給ひ。鎌倉にて觀經畫修の。粗を同朋に語り。いかにもして佛の種を補。生死を離るゝ身とならんと。

諸人の願ふ所なれば。阿彌陀佛を憑み名號を。只管唱へ給ひしが。さても法華經に若人不信毀謗此經一則斷一切世間佛種乃至其人命終入阿鼻獄と説たるをもてまた疑ひ。日本國に渡る處の。佛經を始め菩薩の論。人師の釋に及ぶまで。盡く視たらんには。理を究むる所あらん。と笠を千里に笈ひつゝ云々とみえ。夫より遊學の次第に於ても。まづ律を學び禪を學び。京に上り儒家に入り。東寺にいたりそれよりして。比叡山に到り給ふと記したり。註書讚も概これに齊し

まかるにこの山は延暦年中 桓武帝の勅願にて。傳教大師草創あり。天竺の靈鷲。支那の天姥。日本の比叡とたち並びて。實に無双の靈地なれば。巍々たる戒壇堂々たる禪室。濟々たる慧苑。寔にこれ智者章安荆溪の芳響にて。鐘吼鼓鳴慕若たる聖境なり。大象鳳雛三千の大衆。佛祖の章疏は架に堆く。棟に充て宏麗なり。高祖はこれを巡見し給ひ。實に奮迅の大獅子峰。他の野狐窟に似るべくもあらず。こゝに久しく住するならば。究めて得る所あらん。と心中歡喜し給ひて。たゞ妙經を讀誦なし。寢食をさへ忘れ給へば。經中の章義自から。通徹せずといふ事なし。その聲また適亮にして。人みな聞んとを喜ぶ。こゝにその頃叡山の碩德。尊海心賀聲明心聰。經海政海とて。六人の英雄ありけるが。始めのほどこそ鄙わたりより。來たる沙門何ほどの。事かあらんと侮りしかども。智德兼備の景勢に。這は凡僧にあらざりけり。と渠等も親し

く訪けるまゝ、高祖もその志を感じ。常に睦み給ひけり。かくてこの僧等が計らひにて東塔の圓頓坊に。高祖を居奉り。その後横川の定光院を。兼職となし給ひ。こゝに杖を駐め給ふ。これより後も怠らず。盛雪の窓に對ひ。法華を誦するを課となし給ふに。一時法師品を讀むはく。藥王今告汝。我所說諸經。而於此經中。法華最第一。爾時佛復告藥王。菩薩摩訶薩。一我所說經。典無量千萬億。已說今說當說。而於其中。此法華經最爲難信難解。藥王此經是諸佛秘要之藏。不可分布妄授與人。諸佛世尊之所守護。從昔已來。未嘗顯說。云々とある文に於て。高祖率て愕然と。膝を拍給ひて此處なり。既に安樂行品に。此法華經は諸佛如來秘密之藏。諸經の中に於て。最その上に在りと説き。壽量品に如來秘密神通之力と説き。神力品には如來一切秘密之藏と説る。實にこれ如來秘密經とは。この法華經の他ならず。むかし無量義經を讀しに。四十餘年未顯眞實。と今また已今當の三説を覽る。佛語了々分明なり。と是れよりいよく意を法華經に傾け。諸宗は如來の本願ならぬを。粗察し給ひけり。その翌元二甲辰には。高祖二十三にならせ給ふ。かくて一時講筵あつて。その講主法華經と。大日經との同異を擧たり。高祖これに對ひていはくそれ法華經は醍醐の極説。大日經は生蘇の權謀。豈その同異を論すべき。これ偏に當山の開主。傳教大師の意に乖けり。といひ放つて尊海に往てこのことを告給ふ。尊海聞て否然らず。むかし慈覺大師入唐して。金胎兩部の大法

を傳へ。細かに印契を受けてより。吾山三觀三密を旨とし。車の輪の如く鳥の翼の如し。傳教は顯教の妙味を施し。六宗の麁食を賑はずといへども。秘密醍醐の説に至りては。暇なくして偈止たり。顯密俱に兼て祖意大成なるは。惟慈覺の功なりといふ。高祖また推返して。されば弘法の眞言と。同じき哉異なる哉。尊海答へて天地懸隔なり。弘法は私に十住心論を造て法華經を。第三の藏論とす。これ法中の罪人なり。慈覺は法華獨妙と。印契の微密と事理圓融にして。一醍醐味をなすものなり。故に大日經をもて。理同事勝の經と呼ぶ。委くこれを知らんと要せば。覺大師の書を讀べし。と金剛頂經の疏。蘇悉地經の疏。各七卷を與えけり。高祖これを借たまひ。退きて閑し給ふに。書中盡く傳教に戻る。實に逆路伽耶陀の書なり。顯教を以て劣れりとし。秘教を以て勝れりとす。かくて慈覺の傳を讀給ふに。この二經の疏を造り。これ佛意に協ふや否と。心中疑惑を生じつ。則ち佛像の前に置て。七日七夜祈念を企つ。かくて五日の五更の比及。吾にもあらで間睡しに。午の刻にあたり虚空を仰ぎ。日輪の圓なるを見。弓をもてこれを射るに。その箭過たず日輪に中り。日輪暴に轉動すと見て。夢は忽地覺にけり。因て悟りて佛意に通達し。後世に傳ふべし。とあるを看て駭き給ひ。眉を擡めて道は怪からず。まづ第一夢をもて。教へを判するを聞ず。夫のみならず日に向ひ。弓を彎と吉哉凶哉。將擬冥せるか覺束なし。矧や我日本國。日の神を尊敬す。往昔神武東征のとき。皇軍大に利を失な

ひ。五瀨命薨じ給ふ。天皇思惟し給ふやう。朕は日の神の孫にして。日に向ひて寇を撃。これ
 射を失なふ所以なりと。退き給ふ先縦あり。むかし阿闍世王は月の落るを夢て。佛の入滅を知
 り給ひ。須跋陀羅は日の落るを夢に見て。佛の入滅を知るといふ。夏の桀王は日を射てより。
 身を亡ぼし國を喪ふ。それ慈覺何爲者ぞや。將この書の流傳は。法滅の兆なるか。恐るべし。
 懼るべし。と夫より直に尊海に返し。且そのとを密に語り給ふ。尊海聞て眉を蹙め。子が詞理
 ありといへども。今この山中に在る處耆髦より沙彌に至り。みな覺大師の苗孫なり。高くこれ
 をいふとなかれ。我年來貯へたる書。許多あるを子に假ん。たゞ私にこれを讀め。讀熟せば自
 から。傳教慈覺の密意を識ん。と懇切にいひけれど。高祖は快々として樂み給はず。將に去ら
 んど去給ふを。尊海強て留むるから。其志に絆されて。復足を駐め給ふ
 附ていふこの條。講筵の時より初めて。法華大日蘇悉地金剛頂。諸經の説ありといへど。事
 長くして看ん人の。煩はしきを恐れて載ず。實にその大畧のみ
 こゝに傳教大師の書一卷あり。高祖或時開き給ひて。熟覽あるにその文にいはいはく。讀んで普賢
 菩薩。勸發品を按ずるに。爾時に普賢菩薩。佛に白して言さく。世尊後の五百歲。濁世の中に
 於て。其この經典を受持するとあらん者は。我當に守護すべし。當に知るべし法華眞實經は。
 後の五百歲に於て。必ず應に流傳すべし。又いはいはく。亦後其陀羅尼咒を與へん。是陀羅尼を得

ひが故に。非人の能破壊するもの有こと無し。當に知るべし法華經を護せんが爲に。眞言を持
 者に與へて。自身常に守護するなり。他宗所依の經には。都てこの勸發無し。天台法華宗のみ
 具に此勸發あり。妙法の眞言は。他經に説ざる所なり。又いはいはく。我日本國は圓機已熟しぬ。
 圓教遂に興らん。正像稍過已て。末法太近きに有り。法華一乘の機。今正まき是其時なり。又
 いはいはく。代を語れば則ち像の終り末の初め。地を尋ねれば則ち唐の東徧の西。人を原れば則ち
 五濁の生鬪諍の時なり。經にいはいはく。猶多怨嫉況滅度後と此言眞に以あるなり。又いはいはく。他
 宗所依の經に。諸經の王等一兩句の文あり。當分に王と爲が故に。轉輪聖王と名けず。已顯眞
 實の法華經は知んぬ。これ轉輪聖王なることを。又いはいはく。他宗所依の經には。大海の徳ある
 こと無し。唯法華宗のみ有り。大海深大の徳あり。又いはいはく。他宗所依の經は。未だ九易の局
 を出ず。天台法華宗のみ。惟六難の頂に居す。詎か智あらん者經文を分別せざらんや。淺きは
 易く深きは難し。釋迦の所判なり。淺を去て深きに就は。丈夫の心なり。又いはいはく。藥王今汝
 に告く。我所説の諸經あり。而も此經の中に於て。法華最第一なり。當に知るべし釋迦世尊宗
 を立るの事は。法華を極となす。金口の校量深く。信受すべきをや。又いはいはく。法相宗の人は。
 法華の義を屈して。唯識に歸せしむ。法華經を贊すとらへども。還て法華經の心を死すなり云
 むと見えけるを。高祖讀了りて胸襟を開き給ひ。昔し清澄寺に在しとき。無量義經を讀に及び。

釋迦はこれ何れの宗にや。決して諸宗を兼るにあらじ。當下世人咸いへらく。一代の聖教は。咸金口の所説なり。何ぞ權實の別あらんや。と然れども我猶疑ふ。今この傳教が遺訓を讀て。闇夜に月を見るが如し。慈覺いかなれば是に反せるや。我嚮に自ら誓ふ。豈大丈夫たるべき者。祖々の私語に誑されて。佛の公言を欺くとをせんや。と今暗に傳教が意に合ふ。始めて識る如來はこれ。法華宗なることを。經といひ釋といひ。纖毫の差ひなし諸宗の祖々法華の心を死し。衆生の佛種を斷ずると。實にこれ痛むべし。剩へ慈覺にちける。師資の道に違ひたる。實ても猶餘りあり。墮獄の罪人疑ひなし。と大にこれを發明し給ひ。他日我大勇猛力を揮ひ。傳教大師の鴻恩を報せんと。志を確うして。他に之んことを欲せず。また志を秘して人に語らず。時々密に尊海には。そのとを告給ふ。尊海聞て敢て悖らず。いよく交はりを結びて悦びしと云ん

因にいふ。正像末三時の教へとは。釋迦入滅より年數を推て。正法の行なはるゝと一千年。夫より像法一千年。それより後の五百年にして。末法の教へに入り。行なはるゝと万年といへり。むかし久遠大覺世尊應化の日。迹門法華經を説き。本門法華經を説給ふ。迹門法華經は迹化の大士。觀音藥王等に付囑して。像法は一切衆生を化度し給ふ。本門法華經は本化の菩薩に付囑して。末法本未有善の衆生を化度し給ふ。觀世音は南嶽大師となり。聖德太子とな

り。藥王は天台大師となり。傳教大師となる。本化の菩薩は下方空中の。淨土に在て佛敎を深重し。教機時國教法流布の。前後を鑑て少くも休廢せず。時運既に末法に入る。一闇淨提を觀見し給ふに。三類の法敵我神州より強きはなし。こゝに於て佛滅度後。二千一百七十年にして。高祖大士と現じ給ひ。偕こそ末法萬年の。本門法華經を弘通し給ふ。佛の後來を示さるゝと。毫末の差ひなし。實に仰ぐべし尊むべし

高祖紀年錄に大悲經を引て。正法千年像法千年。末法萬年矣云々。釋尊滅度は周の穆王五十二年壬申に當り。神州鷓鴣草管不合尊。八十三万五千七百五十四年壬申なり。二月十五日滅度あり。その明日より滅後となして。以て正像末を分つ。則ち管不合尊壬申より。人皇十一代 垂仁帝八十一年辛亥まで。一千年の間正法の時機なり。また 垂仁帝八十一年壬子より。人皇七十代 後冷泉院の永承六年。辛卯まで。一千年の間像法の時機なり。永承七年壬辰より。一萬年に至つて末法の時機なり。高祖の誕生は末法に入り百七十一年目なり。意を法華經に委ねたまひ。法の爲に身を惜まらず。大小の難數を知らず。終に末法萬年の基を開き給ふ。因て本化上行菩薩の。再誕なること疑がふべからず

かくて寛元四丙午。高祖二十五にならせ給ふ。然るに三塔の經疏有用の分は。盡く讀畢りぬ。さらば是より園城寺(江州三井寺)に往て。智證大師の家風を問ん。と叡山をたち出給ひ。直に

三井寺に入り給ひて。その奥藏を探り給ふに。智證もまた入唐して。法全慈輪に誑かされ。眞言の邪を稟て。天台の正脈を汚す。慈覺と同罪の一漢のみ。山門寺門法已に滅しぬ（山門は比叡山寺門は三井の園城寺なり故に山とのみいへば叡山にて寺とのみいへば三井なりとぞ）刹の俗の爲に掠められ。實地は變じて戰場となり。法鼓は乾きて軍鼓を鳴す。法寶亡び僧寶去り。今の殘黨は修羅界の奴なり。と高祖はこれを見限り給ひ。幾ならずして去給ふ。この時宋國より歸朝の僧。道元といふ者あり。教外の宗を傳へて深草に居り。曹洞宗を唱へけり。また圓爾も宋より飯り。稻荷山の傍に住て。臨濟宗を唱へけり。高祖これを聞給ひ。往て兩僧に謁し宋國の俗を問ひまた法談に及ぶ。二僧も始めは侮りしか。風姿の盛なるを看て。屢禮を竭し慙慙を加ふ。高祖彼國のさまを聞。長大息して嘆じていはく。衰へたるかな宋國の佛法。正道は既に滅して。邪禪のみ屢起るか。その風更に憑しからず。吾も初め滄溟を。越るの志ありけるが。今二僧の言を聞て。その念慮頓に失たり。とこれより泉涌寺に入給ふ。この寺は俊苜の舊趾にして。唐地將來の書籍多し。僧に憑てこれを讀給ふ

因にいふ釋圓爾。東福寺を作るに及び。高祖これに材木を贈り。逆縁を施して賀を演給ふ。彼徒歡び賞稱して。日蓮木と號せしとぞ

寛元五年二月十八日。改元あつて寶治元といふ。大歲丁未なり。高祖二十六にならせ給ひ是

より南都の七大寺を遊學せんとてまづ興福寺に入給ふ

因にいふ南都の七大寺と稱するは。添上郡東大寺聖武帝の勅額。八宗兼學といへども。三論華嚴を以て本とす。また同郡興福寺。初の名は山階寺。大織冠鎌足造立。法相宗にて坊中百院あり。今滅じて七十餘坊とぞ。また同郡の元興寺推古天皇の御願にて。高市郡飛鳥の地に造立。初の名は法興寺といふ。元正天皇靈龜二年。今の地に移さる三論宗なり。また同郡大安寺。推古天皇二十五年。聖德太子草創にて。初の名百濟大寺。その時は熊凝に在り。舒明天皇十一年大安寺と改めて。こゝに遷し給ふといへり。こゝに沙門道慈といふもの。唐の西明寺を以て模範とし。この大伽藍を立といへり。同郡西大寺。稱徳帝の天平神護元年草創。開山は。常騰僧都。中興敝尊僧正にして。内に密教を持ち。外に律宗を興し。旁唯識に沙るといふ。平群郡法隆寺。別號また種々あり。聖德太子の草創なり。釋智藏は吳國の人なり。吾邦に來りこの寺に居る。三論の微旨を受け。盛に空宗を弘むと云々。添下郡藥師寺は。天武の皇后疾あり。この寺を建て賑救を祈り給ふ。初營構の規を知らず。釋祚遵入定して。龍宮の伽藍を見て。定より出て造式を錄奏す。帝大に悦び給ひ。その規に隨ふとぞ。故に當寺の宏莊麗妙。他に双ぶへきなしといへり。初め高市の岡本にあり。養老二年こゝに徙さる。この七寺を七大寺とまうす。また十大刹十五大刹。廿五大刹と唱ふるあり。今こゝにこれを

省く

高祖は右の寺々に入給ひ。それ〱の教へを學び給ふに。各佛の本意に差ひ。宗祖々々の私語を立て。唯一家の教へなれば。早くこゝを退給ひ。再び空海が眞言を究めん。と紀の國高野山に赴き給ふ。寶治二戊申にして。高祖二十七歳なり。その頃泉州に江川氏。太郎左衛門尉吉久なるもの。高祖の威儀嚴然たる。凡僧にあらぬを知り。これを請待して數日逗め。法要を窺ひ教を受く。この人後に豆州に住し。宗を改めて日久と呼り。かくてまた東寺に遊び。法華堂の別當眞廣に昵み。これに就て東寺仁和寺（御室といふ）の。書庫を盡く探り給ふ。また眞廣に憑み聞え。冷泉藤爲家卿に謁し。和歌の道を學び給ふ。これや青によし檜の葉の。名にあふ宮の故事より。人丸赤人の古風はものかは。貫之躬恒が奥義を究め。八代集を始めとして。新古今の花あるまで。悉くに傳授あり。高祖元來聰敏なれば。一を聞則は十を知り。本朝の風俗たる。和歌の道を明らめ給ふ。爲家卿その奇才を感じ。かの家に秘す處の。古今三鳥三木の傳。洩さず傳へ給ひけり。兼て書を學び給ふに。往古道風佐理行成。空海の四家ありて。おの〱紀妙なりといへど。高祖の書法これに過たり。爲家いよ〱これを讀て。家藏の秘軸を手目出し。これが外籙を書せしむる。高祖辭み給ふことなく。彼人の意に任せらる。爲家大に優賞すといへり。かくて後建長元年。己酉には御歳二十八。再び北嶺に歸り給ひ。定光院に住

せられて。摩訶止觀の訣を稟けらる。這は智者大師の所説にして。古今獨歩の妙説なり。傳教智者の後身として。是妙説を弘宣し給ふ。實に優曇鉢華なるかな。三塔おの〱旗を樹て。派流相激するは。檀那流あり慧心流あり。安海流あり安然流あり。その説々の異なるを聞。默して正義を取り給ふとぞ。また毎朝沐浴まで。妙經十番を讀誦せらる。一日一人の異人あり。來りて讀誦の聲を聞。歡喜の跡にて去りけるが。それより毎朝來りて聽聞す。高祖怪みて什麼おん身は。いかなる人ぞと問れけるに。異人對へて我はこれ。法華經守護の付囑を承たる。三十三番神の其一なり。仁大誓願を發す。吾々深くこれを歡喜し。來つて即守護するなり。仁は本化上行菩薩にして。本門法華經の付囑を承くる人なり。今後の五百歳の運に膺り。深く佛勅を重んじ。凡夫の身を現じ凡夫の事を作す。奇なるかな奇なるかな。我等仁が化を守護して。更に間斷あるとなし。むかし法華會上にして。守護の付囑を稟たるが故なり。曾て咒を説くの並或ひは親となり或ひは怨となりて。衆生を誘引す。故に三類の法敵も出ぬ。今白法隱沒せるは。大白法流布の前相なり。律宗の偽れる。眞言の邪なる。淨土宗の横なる。教外宗の妄なる。みな是小白法を除去するの方便にして塵埃を拂ふの一帶。大眞風を吹出すの鞞瓊なり。大白法興隆せば。土闍諍なく民に凍餒なくして。本國土妙一時に。顯現せんと云畢ると齊く。衆神列をなし給ふ。當下神また告ていはく。世世番番上行菩薩の出世は。則日本國に在り。仁を見ること

世尊を見るが如しといふて。漸々に去給ふ。高祖は奇異の思ひを做し。たゞ夢の覺たる如く。自身筆を採て神名を記し。深くこれを秘し給ふ。後に畫工に委ねてこの盛儀を摸さす。今いふ三十番神の像これなり

按するにこの事は紀元録に大略して載たり。註畫讚及び流布の本には。更にこの事なし

第四 高祖天王寺に入りまた伊勢の宗廟に詣給ふ事

一時高祖思惟し給ふやう。法華寶塔品を按ずるに。近令有在遠令有在といふ説あり。後五百歳の弘經。迹化大士の發誓。本眷屬を召して十神力を現じ。結要付囑し給ふ。闍靜堅固自法隱没の時。本化上行菩薩世に出現せると。實に掌を指が如し。今の神語少も差はず。殊に傳教大師の織にも。法華眞實の經に於ける。後五百歳にして流傳すべし。日本は既に圓機熟しぬ。圓教遂に興るべし。五濁の生鬪諍の時。經にいはく猶多怨嫉况滅度後。と經といひ釋といひ。神の告といひ。實にこれ符節を合せたるが如し。われ凡夫身たりといへども。素よりこの大願を懷ふ。奚ぞ忽にすべけんや。とまた再び思惟すらく。上行菩薩別付囑の大事は。至重至微至絶至妙なり。我今これを吐顯さば。忽地三類の法敵來たらん。勸持品の偈を視るにも。その説甚容易からず。さればまづ本國に往き。父母に見え師友に謝禮し。後に身命を法華經に奉ぜん

思ふ所既に決しぬ。とそれより山王の宮に詣で。傳教大師の廟を拜し。曾て尊海を誚て別れを告ぐるに。尊海大に悲しみつゝ。涙を流してこれを駐む。高祖その厚意を謝し。重ねて告給ふやう。われ一たびこの地を去り。大勇猛力を揮ひ。慈覺が穢れを洗ひ滌め。傳教大師の本意を遂んとす。素より吾志願なり。と懇に示し給へば。尊海聞て忽地感悟し。大丈夫の志し。奚ぞ再回止めんや。己も昔この志あり。しかれども鈍才下根。能はざるを知つて黙止たり。努々力め給へとて。相祝して涙を含み。こゝに袖を願ちけり

佛祖統紀の細書にいはく。海也瑞世主無動寺第五席一壽九十餘歳於後遇我昭尊者受二本門大戒而終焉とみえたり紀年録の頭書にもこれを引たり。蓋尊海は信尊の門人にて。四俊の一なりとみゆ

夫より高祖はまづ浴に出て。長途の装ひをなし給ふ。五條の橋邊に住むものあり。家號を天王寺屋といふ。その家の主浄本なるもの。高祖の凡ならざるを見て。尊敬して家に駐め。叮嚀に仕へける高祖もその志を感じ給ふ。かくて節寒天に逼る。長途の獨行を恐れ。言語を盡して止めければ。その誠心に愛給ひ。滯留して年を越え。建長二年庚戌となる。高祖御歳二十九なり。曾て浄本は叻より。天王寺の役を執る。因てこれを介として。四天王寺に到り給ひ。聖徳太子の舊紀を索め。悉く熟覽あり。また科長の廟に謁す(太子を葬りし地なり)こゝに居給ふ

と一七日。晝夜念誦して將に去らんと給ふ。先の夜深更におよび。一天澄わたりて白月皎々たり。四方に聲なく實に寂寥たり。この時一人の官人。衣冠整々として立給ふ。これ則太子なり。更に生るが如く。威儀儼然たり。高祖これに對ひて。所秘の妙事を談じ給へば。太子微妙の御慶を以て應酬給ひ。堯爾として歡べるが如し。當下東方明んとするに。太子裾を曳て入り給ふ。高祖法味を獻じ去給ふとぞ（法味とは法華經讀誦なり）夫より雄山八幡宮に詣給ひ。木幡山を過て琵琶湖の濱に出給ふ。瀬多橋を渡るに及び。四方を瞻望嘆息して宣く。甚しきかな眞言の國家に災ひせる事。この所はこれ古戰場なり。承久の亂起つて。鎌倉の軍勢攻登るとも。朝廷官軍を以て宇治勢多に支ふその時高野仁和比叡園城の宿老。救命を稟て十五壇を搦へ。賊軍を調伏す。然るに却て官軍破れ。一天の君として遠島に放たれ。輔弼の公卿辱を被ふる。それ君の臣を制すること。鷹の雀を擡よりも易し。况やまた賊軍をや然るに賊軍は僧に課せず。曾て咒詛の設なし。朝廷この法華經を。蔑如するの僧に委ね。邪義を以て修するが故。忽地に破れを執て。賊軍倍々大利を得。王法衰へて天下覇に走れり。嗚呼眞言を滅せすんば。爭黜止まず。念佛を滅せざれば。社稷饒ならず。清淨の神土を以て。修羅界となし餓鬼界となし。また阿鼻獄となしゆること歎かしきの極みなり。これ偏に弘法慈覺智證。法然榮西が魔風なり。この災を除き國恩を報せん者。我にあらざしてそれ誰や。と大に奮發悲歎し給ふ。

因にいふ天王寺は。攝津國東生郡に在り。傳にいはいはく。用明天皇二年八耳皇子。官軍を率て守屋大連と戦ひ官軍利あらず。太子櫻の木を斬て。四天王の像を刻み。髮中に安し誓ていはく。官兵勝ことを得ば。當に護世四天王寺を建べし。とかくて大連亡びたり。故に彼が資産を以て寺に納れ。王造岸上に於て。四天王の像を安す。推古天皇元年。難波の荒陵に移す。因て荒陵寺といひ。また田敬寺といふ。寶塔大殿は極樂の東門に對す（元亨釋書）云々とみゆ。されば俗に佛法最初の寺といへり。然れども像法にして。末法萬年の妙經にあらざる。

承久の亂は後鳥羽上皇。常に關東の我意を憎み給ふ。かくて上皇能野に御幸し給ふ。信州の仁科盛遠の子。年十歳容貌類なし。上皇大に愛て。盛遠を西面に伺候せしむ。關東のとを聞て盛遠を咎めろの領地を沒收す。上皇北條義時に詔して。ろのこころを宥めらる。義時更に勅命を用ゐず。盛遠關東の聽を得ず安に院參することを責む。こゝに於てまづ其事は止ぬ。こゝに上皇攝州の長江。倉橋兩庄を以て。妓婦龜菊に與へらる。關東より置く所の地頭。大に龜菊を侮りけり。龜菊怒りて上皇に訴ふ。上皇また義時に詔し。地頭を改易せんことを命ず。義時拒みてろれ地頭職は。故右幕府の功に因て賜はる所。今させる罪科あらぬを。妄に變易なりがたしと。ろの命に應せざれば上皇大に逆鱗あつて。鎌倉を滅さんと院宣を以て五畿

七道の軍兵を徴す。三浦義村是を聞。駭きて義時に告ぐ。義時二位禪尼にまうし。在る所の軍勢を集む。かくて評議一決し。時房泰時は東海道。武田信光小笠原長清。小山朝長結城朝光は東山道。式部丞朝時結城朝廣。佐々木信實は北陸道。うの勢合して十九万餘騎。旋風の如く攻登り。宇治勢多を破り上洛して。官軍に撃勝。終に上皇を隱岐國。天皇順德院を佐渡國。土御門院を土佐國。上皇の子雅成を但馬國。頼仁親王を備前國に遷し持明院守貞の子。茂仁を立て位に即かしむ。是を後嵯峨院と稱す。これより嚮臣として。君に寇する者。蘇我馬子。崇俊帝を弑するの他。更に先蹤あることなし。入鹿が威權君を凌ぐも。敢てその君を陥れず。清盛暴戻にして上を凌ぐ。然れども索箕尊の意なし。この北條氏の時に至り。陪臣として至尊を恣にする。うれより後に至りては。益甚しきに至る。高祖の長大息し給ふ所。實に以て所謂あり

これより道を托て勢州に至り。天照太神の廟を拜す。高祖間の山に宿するこ一百日。沐浴盥洗して殿に上り。發誓弘經し告ていはく云々。梓長ければ是を畧するの旨趣はむかし世尊。靈山に法を説き。正像末の三時を示す。今や末法萬年の時に當る。然るに弘法慈覺の徒。加ふるに榮西法然。みな私の見を以て。世尊の五法を蔑にす。運長不肖の身たりといへども。大誓願を發して。法華の正法立んと欲すこの神は世尊に先つこと百萬餘歲。既に佛國を稟給ふ。今こ

の正法の行者に力シ毀して。弘通なさしめ給へど。一心に祈念なして。竟に百日に滿ずる曉。寶殿の扉自から開け。皇太神寶殿の中。獅子の座に座し給ひ。全身散せず正に禪定に入り給ふが如し。善哉々々法華經の爲に。よく來れりと救し給ふ。その傍に一菩薩あり。忽地微妙の聲を發し。十方諸來の菩薩も今に散せず。世尊快く法華經を説給ふ。汝佛敎を重ずるか故こゝに來る。守護の菩薩力を魔界に假して。己に穢れたる白法を除却す。本門の大白法。正しく宣示顯説の時なり。夫勉よやと告給ふ。高祖肅肅として詞なく。靈時頭を低給ふに。寶殿故の如く鎖せり。これ四月廿八日とぞ。高祖それより常明寺に退き。胸中豁如として神恩を謝し。深く秘して人に語らずこの時妙見菩薩出現あり光明顯奕最妙最勝にして。威容儼然たり。高祖眼を閉て衆を持し給ふ。人みなこれを祖るとを得たり。後にその地を妙見町と呼ぶはこれその緣故なりけり

按するに本文の事實。往昔も相似たるをあり。元亨釋書にいはく。聖武帝東大寺を創めんとし給ふ。然るに我國家の法。歷代神に奉ずるを。佛寺を建んこといかがと思し。則僧行基をして。佛舍利一粒を伊勢國。皇太神宮に獻せしむ。行基かの舍利を持し。内宮南門の大杉の下に廬し。七日を期して持念なし。上の旨を告奉るに。七日にあたる夜自から。神殿開けて大聲に唱へ給ふ。寶相真如の日輪は。生死の長夜を照却し。本有常住の月輪は。煩惱の迷雲を

樂破す。我今遭がたき大願に逢ふ。渡に船を得たるが如く。また得がたき寶珠を受く。暗に炬を得たるが如し。師それ舍利を持して。飯高の郷に藏め埋み。以て邦家に頼せよ。と云。これよりまた橋諸兄公を勅使として。梵宇草創の事を告しめ給ふ（このこと先年刊行なりし松亭漫筆にも載たるが今本文の因に據て再びこゝに引用せり）蓋この一事靈神の示現。忽ならざるごとくいへど。佛祖統紀の他是を載せず。紀年録には勢州に到り。神宮を拜すとのみ見え。妙見示現のことは載せたり

第五 川越にて父の舊友を訪ひ故郷安房へ歸り給ふ事

かくて高祖は勢州をたち出給ひ。故郷安房へ赴かんとして。杖を武藏に曳給ふ。こゝに同國川越には。父重忠の舊友あり（姓氏闕）這回道路の序をもて。訪て往ばやと思ひ給ひ。道を枉げて往給ふ。その夫婦たち出て。父母の起居を具に問ひ。且遠來を慰めて。室内に駐め養應すこと。いと懇切なるによりて。暫くこゝに滯留なし。日々法華を誦して豫め。夫婦の人に説示す。こゝに駿州富士郡にも。また父の舊友あり。とこの夫婦が話に聞。これをも訊はんと思ひ給ふに。夫婦もまた切に勸む。因てこゝをたち出給ひ。日ならず彼處に往給へば。この夫婦も高祖の訊問を。歡ふを限りなく。詳に小湊の事など聞。頓て傍に茅屋を補理。駐むると切なれ

ば。高祖もまた厚情を感じ。暫くこゝに居給ふに。時寒天に及ふをもて。こゝに年を暮し給ふ。明れば建長三年辛亥。高祖三十にならせ給ふ。斯て新年七日の齋をなし。その翌日海邊に到り。壇を設て八大龍王を勸請し。香華を備へ持念して。後五百歳。廣宣流布を祈り給ふ。この日海上風除にして。波濤興らず暮におよぶ。高祖室内に歸り給ふに。人定の時に至り。海上波間に光りを發す。高祖出てこれを看給ひ。八大龍王祈願を容て。この波上に現するなり。と大に喜び念誦し給ふ

附ていふ後に中老僧日實上人。この地に一字の寺を造り八大龍王萬年守護山妙法蓮華虛空海會寺と號く。今略して龍王山妙海寺と呼ぶは是なり

偕も日往て暮春となれり。たゞ假初にこゝに來て。思ひの外に月日を過せり。這回は是非飯らんと夫婦に別れを告給ふ。夫婦大に悲み歎き。涙を流して止むれども。かくて有るべき御身ならねば。夫婦を諭してこゝを去り。再川越に歸り給ひ。件のことを語り給ふに川越の夫婦も大に歡び。師が父母素三寶を敬ふ。今以て然るや否。われく既に年高くして。翌をも知らぬ身のうへなれば。かゝる名僧に値偶すること願ふてもなき幸ひなり。まづ暫く足を止めて。法を説聞し給へかし。若また此處に住んとなら。近隣の信者に語らひ一字の寺をも造立すべし。とその懇なる他に超たり。されば高祖も志の。厚きを感じて去がたく。こゝに教化して月を

逾つ。既に四月二十八日となれり。去年今日勢州の。宗廟にして聖容を拜す。我に於て重き日なり。と嚴に別會を修して。神徳を謝したまふ。この時に至りこの夫婦に法號を授られ。夫を蓮信婦を妙養といふ

附ていふこの夫婦。一菴を造りて行ひ澄す。後に寺となして蓮信山。妙養寺と號たり

夫より七月中旬に至り。高祖は故郷慕はしく。思ひ給ふによりこの夫婦に暇を告て去んとし給ふ。夫婦大に悲み歎き涙を含み別るゝに。忍びざるの情を彰す。高祖懇に諭し給ひ。この後鎌倉の往復には必來りて面會せん。と既に別れて小湊に着給ひ。まづ父母の家にゆき給ふ。父母これを見て雀躍なし。喜ぶこと限りなし。その餘の親族も俱に歡び。高祖の前後に居ならびて。遊學の容など問ひ。その苦修を感心す。父母高祖に對ひていはく。早く山に登りて師に見えよ。父もまた同道せん。と則高祖父に屬て。清澄寺に到り給へば。師の道善法印は諸佛房に在けるが。遊長來れりと聞て大に歡び。急ぎ請じて對面あり。久しく音信の絶たるを。且怨み且はまた。無事にて飯れるを深く歡び。物語に時を移す。高祖は師の房の間に從ひ。遊學の次第を語り。適眞言のことに涉れば。他の緯を語り給ふ。これ師の志に戻らんとを。竊に恐れ給ふ故なり。師の法印も遊長を。深く愛するによりて宗教を論せず。こゝに同門なる法師們。それゝに立出て。一別以來の情を演べ遊學せることを讀む。この時離僧(沙門の稚きものなり

統記に出づ)稚見までも。無事の歸國を歡びけり。道善法印も學業の。關給へるを喜ぶものから。わが眞言宗を破するの意。言外に聞ふるを。餘の法師們は心も著ぬど。法印が去ぬる年。無量義經の文によりて。師に問たる事もあり。彼是を思ひ合し。猶歎然の思ひあり(歎然はうらむ。しりぞく。と訓ず)高祖その氣色を推し。竊に父に歸宅を勸む。父も頷て暇を告。立出んとして高祖に對ひ。近き以來よといひて去ぬ。かくて高祖一兩日を経て。父母の家に至れば。父母は禮を厚うして。敬ふと他日に殊なり。高祖怪みて問給ふに。汝は貌は吾子なれども。法の爲には教主なり。爭崇敬せざらんや。此頃道善師との物語を。傍にて聞居たるが偈が道徳師の房に。勝れたると稍遠し。師は偈をして清澄寺の。法を嗣えめんとする意あれど。偈は碌々としてその法を。嗣んとを欲せざる。こゝに於て法印も。歎然として恨むる色あり。我俗眼なりといへども。是のみは僻目ならじ。と現にや子を視ると親に如ず。貫名次郎重忠は。素貴族の遠裔なれど。今は邊鄙の漁父となりて。道學だになき凡俗ながら。因縁によりて本化の菩薩が再誕の父となり給ふ。その徳豈凡ならんや。こゝに於て道善師資が。物語を聞て高祖の大志を自然識るに至る。また尊きとならずや。當下高祖は欣然として。父母の傍へ膝を進め。既に貧道が胸中を。かく察し給ふうへは。今更に何をか裏まん。往昔己が願により。許を得て薙髮染衣の。姿となりて候うへは。いかて久遠大覺世尊の教に悖りて私の。宗跡に泥むべきと

一たび志願を發してよりは先師の宗門の蘊奥を曉り。夫より諸宗の寺々に於て。その旨とする所を涉獵するにみな世尊の本意に差ひ。放逸邪見の教法なり。因て今より勇猛力を竭し一切の衆生を志て。未法萬年の法華經に。皈せまめんと存ずるなり。然れども世間一般みな。邪に流れたれば。舉めてこれを唱ふるにいたらば。三類の法敵四方に發りて大小の難多かるべし。然ながら因縁あつて。既に釋門の徒となるから。夫を恐れて争かは。その邪義に陥らん。志かれば貧道が一身は。法華經に抛たんとす。この議を許し玉はれど。聞て重忠大に歡喜し。實に大丈夫の志。偉なるかな。偉なるかな。その誕生の瑞今こゝに思ひ當れり。始めありまた終ある者歟。必人に語るとなかれ。小敵も悔らず大敵も畏れず。權實二教の大軍に臨んで。身命を惜むとなかれ。それ勉めよやと示しける。高祖これを聞て踊躍歡喜し。退きてこれを謝し。辭して山へ歸り玉ひ。一日師の房に見え。貧道いまだ學業足りとせず。今屢時暇賜れ。猶諸國の靈地を馳て。苦行せばやと存ずるなり。とそこのいふ所弛なれば。法印もまたその心を。變ずべからざる事を知つて。止めんとするに詞なく。たゞその別れを惜まるゝ。夫より高祖は同門の法師們にも暇を告て。清澄寺をたち出玉ふ

按ずるに同門の法師。十三人あるが中に。淨顯房は後に高祖に皈し。諱を日中と賜ひ淨圓房も同老く皈して。諱を日存と賜ひけり

第六 高祖鎌倉に到り比企能本を示す事

かくて高祖は師に辭し別れ。また父母に暇を乞ひ。再會を祝して。故郷を去り南都北嶺は嚮に過りぬ。鎌倉は將軍の居所。天下兵馬の權を柄り。諸民輻輳の都會なり。されば三類の法敵も多し。吾正法を弘めんと。こゝに倍す所あらじ。とるれより鎌倉に越む玉ふ。この時將軍は藤原頼嗣公。執權は北條相摸守時頼なり。この人總明叡智にして。よく將軍を輔佐し玉ふにより。一天四海無異に皈し。万民鼓腹の樂をなす。所謂唐堯虞舜の世も。これには過すと思ふなるに。去ぬる。寶治元年夏六月。故右幕府の御時よりさしも忠節を盡したる三浦介義澄が孫。若狹守泰村。その弟朝村光村。あられざる謀叛を起し。鎌倉法華堂故右幕府が影前に於てその一族。二百七十餘人自殺す。これ天下の大變なり。高祖は嚮にこの事を聞。これ法華經を誘ふの罪なり。猶禪家眞言の徒。稍に蔓るものならば。國家滅せんと必せり。と心中大に歡きたまひ。然るべき紹介を得て。副元帥を諫めばや。夫に就ても彼地に居らずは。萬事序惡かるべし。と則彼處に越玉ひ。比企大學三郎能本は。その頃博達の間あり。まづ此人に謁し儒經をも學ばんと。頼て能本が館に行玉ふ。能本一たび高祖の天機。凡僧にあらざるを察て。藏むる所の書籍聖賢の謨曲。諸子百家の書類は物かは。本朝異國の歴史および。官庫兔園の冊に至るまで。惜む

となくこれを假す。高祖は愆にこれ等の書を。悉く熟覽し。曾て京傳の訓釋を受給ふに。顯悟聰敏及びなければ。能本いよくこれを感。親み睦むと骨肉兄弟のごとし。かくてその年も暮れ建長四年壬子となる高祖御歳三十一なり。こゝに前將軍頼綱公。去ぬる年歸落ありしが。この頃謀叛と企給ひ。關東を滅さんと。密々計議あるよし聞え。執權時頼大に驚き。一族重時と相議り。將軍頼綱の爵位を廢し。鎌倉の主を替んと欲し。武藏量頼和泉前司行方を京都に遣し。後嵯峨上皇第一の御子一品中務卿宗尊親王を。鎌倉將軍となさんと請ふ。上皇即許容あり。因て路次の行装を整ひ。當年三月下旬向ある。その容殊に善美を盡す。上皇密に粟田口に出てこれを獻覽ましますとぞ。四月朔日鎌倉に著して。時頼の館に入り。同五日勅使下向ありて。征大夷將軍に任せられ。前將軍頼綱は。歸洛なし給ひけり。靜謐の世とはいひながら。かゝる事のありけるも。全く泰平といふべきや。何となう人心も。穩やかならざる時節にあり。藤兼平公を攝政となす。(建長四年十月)これも關東の計らひにて。時頼の意中に出づ。抑攝政關白は從來近衛家と九條家と。たゞ二流に限れるを。その權を奪はん爲。仁治三年良實をもて。關白の職に任す。これ則二條の祖なり。寛元四年實經をもて。また關白に任せらる。これ則一條の祖なり。今また兼平を攝政となす。これ則鷹司の祖なり。是より五家門相分れて。攝家の威權漸く衰ふ。みな時頼の計らひとぞ。

評にいはいはくこの事は。本朝通紀及び國史略にも載て。北條氏の奸謀となす。時頼さしも聰明にして。この後職を辭し薙髮あり。最明寺道崇と號し。諸國の民風を察ん爲に。斗僧行脚の僧に寔し。所々を遍歴して刺史の治否を探り。貪吏苛酷の虐政を窺ふ。このと東鑑にみえずといへども。往々人口に膾炙せり。かゝる仁慈の心を存し。謙遜辭讓の道をも知りながら。陪臣として貴長を弄する。かならず以あるとならん。斯て高祖は能本に就き。外典の奧義に亘り。推究めずといふとなし。能本深くその奇才。いよいよ凡ならざるを知つて。一日佛教の理を問けり。高祖本迹の大旨權實の。起盡をもて對給ふに。能本半信半疑にして。その趣を肯はず。夫より屢問答して。いかにも佛の説く處吾儒の無極大極を。説くに至てはその義相合ふ。その味ひ深いかな。と稍その心を傾くる。高祖また示していはく。佛説清淨法行經に。月光菩薩彼に顔回と稱し。光淨菩薩彼に仲尼と稱し。迦葉菩薩彼に老子と稱す我三聖を遣して。彼震丹を化と載たり。この義天臺の釋にいはいはく。禮義前に開けて大小乘經。然して後に信ずべし。震丹既に然るうへは。十方亦復斯のごとし。荆谿もまたいはく。佛法の流化は實に茲に頼る。禮樂前に馳て。眞道後に啓といへり。宜なる哉稍これに合するとあり。足下よく思惟せよ。と説示されて默識するに。能本心中稍く開け。大に信受するに至り。實に公が所説の如くは。儒は人界の一天地。佛は十天地の教へを説て。十天地

の禮を垂る。因果應報これに因て立つ。現に理數昭々たるかな。人界の無極は天上の森羅。天上の無極は三乗の森羅。三乗の無極は佛界の森羅。佛界の無極は迹門の森羅。迹門の無極は本門の森羅なり。たゞ佛と佛とのみ。乃能究盡し給ふ。深いかな奇なるかな。と肇めて悟の意を聞く高祖これを聞て歡びたまひ。印可し給ふといひ傳ふ

按ずるにこの事諸書に見えず。今佛祖統紀に據て記す。且年歴の異同あり。伊勢の宗廟を拜し給ふ事は紀年録に建長五年とし（統紀には同二年庚戌）。夫より清燈寺に歸り。肇めて法華を唱へ給ふ。縑素を會して正法を説き他法を誘る。邑主景信大に怒り。法印道善と謀て高祖を逐ふ。淨顯義淨の兩法師。高祖を扶けて花房の。青蓮房に宿らしむといふは。統紀に建長五年とせり。故に次の卷にこのことを詳かにす

日蓮上人一代圖會卷之一終

日蓮上人一代圖會卷之二

第七 肇て妙法を唱へ給ふ且日蓮と更め給ふ事

再說高祖は比企能本を歸服なさしめ。誓く鎌倉に在しけるが。下總土橋の東漸寺に。一切經藏の在りと聞給ひ。今まで二回この經を。閲し給ふといふといへども。これは是唐の僧。鑑真律師の將來なれば。異同あるも志るべからず。これを看んと思ひたち。能本に別れを告て。東漸寺に到り給ひ。かの經藏に入給ひ。勉めてこれを讀給ふに。その年も暮て建長五年癸丑となる。高祖御歳三十二なり。さて暮春の頃讀畢り。それよりまた古郷なる。安房に歸りて父母に見え。直に清澄寺に上り給ひ。師友に謁して無事を祝し靈時其處に駐り給ふ。一時熱思惟し給ふに。今年は佛滅度より。二千二百一歳にあたり。抑一の數たるや。天は一を得て以て清く。地は一を得て以て寧く。王侯は一を得て以て。天下の貞となせり。况や我大覺世尊。一大事の因縁を以て。世に出現し給ふにて。その理は一道清淨。その教へは唯一佛乘なり。嗚呼一の言たる偉なるかな。それ 太祖天照皇大神宮は。久遠覺皇世尊にして。本地垂迹その揆一なり。憶ふに去ぬる庚戌。夏四月廿八日。伊勢に詣て宗廟を。拜し奉つる時に及び。云云の示現

を禁ふる。かゝればこれを良辰とすべし。はやその日も近づきぬ。と清澄寺の諸佛房にて。別に道場を構へられ。清淨潔白にして一七日。この所に籠り給ひ。一念不動に祈願し給ふ。その満ずる日におよび。本地の妙境恍惚として。法界無礙十方通同せることを覺え。南無妙法蓮華經の七字。赫奕たる光明を放ち。中央に現じたり。その左右には釋迦世尊。多寶如來侍りつ。また迦釋如來の協士には。上行等の四菩薩あり。この眷屬には文珠師利。彌勒等末坐に居り。迹化他方の諸菩薩は。噲へば王侯貴人の前に。萬民踴躍して恭く。殿上を望むごとく。梵天帝釋四大天王。三十番神夜叉羅刹は。衛護して伍隊となすこと。實に神力品の説相儼然と。虚空中に現はれたり。程なく東方白み渡り。旭日輝き昇るとき。光明自然七字の勢あり。高祖奇異の思ひをなし。立て數回禮拜し給ひ。合掌して大音聲に。南無妙法蓮華經と唱へ給ふ。これ此宗門にて題目を。唱ふるの權輿なり。かくて十編ばかり唱へ給ひ。安祥として坐に就つ。直に筆を採てかの七字の。勢を盡し給ふ。これ四月廿八日とぞ(世本に三月二十八日とするは傳聞の誤なり)かくて其日室内を出給ひ。我多年の勤行に因て。無上菩提の因を得たり。豫め衆に示さん。時刻を移さず衆會あらば。満足たらんと觸給ふに。豫て道徳は人みな知りぬ。究めて尊きとならん。と一山の沙門はいふに及ばず。聞傳へたる俗輩の。吾もくと集會來る。中にも地頭東條左金吾。平景信も詣來つ。俗輩の上坐に在り。今や遲しと耳を聳て。所説い

かにと肘うち張る。當下高祖は四方を顧み。大衆の列位珍重々々。某甲多年の妙行に因り。微妙の大法を示さんとて。各を招きたり。その大法は虚空會上。七寶塔中別頭付屬事の。一念三千如來の秘密せる。南無妙法蓮華經なり。この妙法は大日如來。阿彌陀藥師等新成の世尊は。いまだ其説を聞ざるが故。たゞ賢者の住地に處り。况や文珠彌勒觀音。藥王等の迹化の菩薩は。この法を識ざるが故。たゞに凡夫に接するなり。抑後の五百歳。一切衆生を度せんが爲め世尊の大慈大悲を以て。この妙經を留め給ふ。迹化の菩薩は付囑に堪ず。故に本化の薩埵を召す。本化の薩埵地より涌出し。弘經せんとを誓ふ。因て世尊神力を現じ。これを付囑し給ふなり。多寶如來及び十方分身の。諸佛これを説明し給ふ。今末法の世に當り。華嚴方等般若等は。權經といひて大毒藥なり。唯この妙法蓮華經。末法萬年の良藥なり。この使ひは。上行菩薩。則ち本化の號を唱ふ。經に云く遣使還告。と嗟時なるかな世に數あり。世尊世に在の日。この妙法を聞。今二千二百餘年を過て。またこの法を聞とあり。末法の我等一切衆生も。この法を受持するときは元品の無明を斷て。忽地に聖位に入らん。釋尊の本因。妙の萬善。本果妙の萬徳まで。悉く妙法に具足せり。我等至信に受持するときは。自然讓與し給ふ。四大聲聞領解していはく。無量の珍寶求めざるに。自から得るとは是なり。嗟拙なきかな天台の末學。一念三千の重寶を護しながら。華嚴真言等に奪はれて。竟には彼が奴となれり。淨土宗の邪僻なる。他土

の教主を崇みて。わが主と師と親とを捨る。その罪叛逆に同じきものなり。世尊の誓願阿彌陀佛に。勝れること遠し。舍利弗當に知るべし。我本誓願を立て。一切衆をして我ごとく。等うまて異なること。なからしめんと欲するの金言(舍利弗に告給ふ釋迦の言なり)それは思ふべきに。人それを知らずまて。誤て阿鼻の業をなす。故に念佛は無間地獄の業なるを曉るべし。律宗は小乘にて。三惡道の業人なり。謾に大乘の地を汚して。我法喜禪悅食を盜む。因て國賊といはんも可なり。禪家に至つては。世尊不説の邪を狐鳴まて。眞に淨き獅子吼を蔑如す。實に天魔の所爲といはん。佛未然に誡めていはく。我滅度の後佛經を用ゐず。謾に己れが説を傳へ。もて眞乘となすものは。姿は沙門に似て袈裟を着すといへども。實に天魔波旬の徒なり。眞言は釋迦大日の。二尊を立て顯密を競ふ。それ世界に二佛なし。これ天に二ツの日なく。國に二の王なきが如し。若國に二王あらば。その國亡びんこと必せり。且己れが盜賊を忘れ。天台を指て大賊と呼ぶ。まかれども人これを知らず。悉皆法華經を毀謗して。一切の佛種を斷なり。佛これを誡めていはく。他人の罪報汝今復聞。其人命終まて。阿鼻獄に入ると。こゝに於て吾いはく。念佛無間禪天魔。眞言亡國律國賊もの。邪見放逸なること。今世尊の金言を引て。定かに證明するが如しと。憚る所なく説給ふ

附ていふ天魔波旬のと。元亨釋書を按ずるに。皇太神宮の條下にいはく云云。於時神宮在

天上一下見海底。有大日如來印文。神宮怪之下。鉢搜印文。其鉢滴如露。迸散於是。魔王波旬遙見。曰。此滴露成地來世必興佛法。我欲壞此乃自天而降。神宮逆波旬一語。曰。此地我之有也。我思三寶不敢崇敬。願大天莫慮也。波旬便還依茲神宮內。歸佛乘。外拒釋衆。蓋信于波旬也。云々とみえてこれ大魔王。佛法を波滅せんと欲するなり。

こゝに無用の辯なれど。因に據てこれを録し。童蒙に示すのみ

諸もこゝに集會たる。當山の縑素未曾有の。説を聞て大に駭き。渠はかならず狂氣せしなり。争ふとも詮なからん。と速に退き散る。地頭平景信は。從來淨土門を深く信じ。念佛三昧の徒なりしが。これを聞より大に怒り。渠譬へ發狂せりとも。かゝる惡言をそのまゝに聞棄んこと我宗の。祖師に對して不孝なり。直に渠が首を斬て。法華經毀謗の罪によつて。阿鼻獄に墮るが速きか。念佛を破す惡言により。己が首の地に墮る。孰か早きを思ひ知らさん。憎き賣僧と刀の欄に手を掛しが。俟雲時。その惡口は憎けれど。渠既に三表を着す。これを斬んは了得なり。院主道善に譚らひて。衣を脱せ俗躰となし。斬んにはとあもひつゝ。直ちに道善が室に到り。如此々々のことをいふ。道善聞てこれもまた。いと不審はあもひながら。少年より深く愛せる。蓮長なれば只管に。これを陪禮て速に。山を逐んといふに決しぬ。斯て高祖は景信が。怒りに觸れてこゝを逐はれ。直に呻吟給へども。更に是を憂とせず。それ眞の佛子は法の爲め

に軀を捨つ。我素より身命を。法華經に委ねたれば。三類の敵至らんこと。豫て身の覺悟なり。何ぞその敵を恐れて。口を箝むことをなすべけん。今この寺を逐るゝ事。遠離放塔寺の經文か。と自若として立給ふ。こゝに淨顯房義淨房は。高祖が舊識たるにより。こゝに來つて諫めていはく。志操の堅實なる刀杖の。難をも争恐れ給はん。然れども身を全うしてこそ。後年の榮もあれ。景信師の陪禮を容て。返きぬれど心中の。憤怒いまだ解やらず。路を遮り寇せん。と企つるも計られず。我々堅く子を護せんとそれより密に間道を取り。同國西條華房の郷。青蓮房に匿しけり。高祖はより鎌倉に赴かん。とまづ父母の家に適き。如此々々のよしを告。別離の情を陳給ふ。父母聞て別れを惜み。吾々稍に年老て。再會の期も計り難し。抑子が志操を觀するに。嚮にもいふ如く吾子ながら。實は大法の王子なり。吾々もまた宗を改め。今より法華經に隨皈せん。と高祖聞て歎び給ひ。久遠世尊本化菩薩を。勸請し奉り。妙經を擎げ持て。父母の頂に加へ給ひ。受持の文を唱ふること三遍。父母香を焚てこれを謝禮し。喜ばしきかな幸なるかな。今吾子の大徳に因て。更に成佛の種を得たり。子は我師なり我は弟子なり。且日と蓮との瑞にて子を産み。この微妙の大法を受ること。實に不可思議の佛縁なれば。法號を立て父は妙日。母は妙蓮と呼んぞある。高祖師躍觀喜し給ひ。美なるかな父母の佳名。むかし靈山會上にして。世尊本化の徳を頌し。日月の光明の。能諸の幽冥を。除くが如しと宣へり。彌勒

もまた本化の徳。蓮華の水に在が如く。地より涌出るといふ。親の法號測らずも。暗にこの經意に合ひぬ。己また法華經を信じ。尊無過上の行を修すは。涯りなき父母の之恩。されば父母の法號を取り。今より日蓮とまうすべし。と夫より辭して故郷を出給へば。父母も祝して送られけり

按ずるに是より嚮。かの華房の青蓮房に在す。この郷の地頭も念佛者なり。故に一字の彌陀堂を造營し。高祖をして堂供養の。導師たらんことを望む。これ外には崇敬を加へ。内には害心を抱くなり。高祖はこれを知し召ども。一點ばかりも辭する色なく。既にかの堂に到り給ひ。彌陀はこれ安養の化主。釋尊は此土の化主なり。豈無縁の彌陀に死して。有縁の釋迦を捨るや。故に殿堂を造立し。彌陀を安置すといふといへども。かならず阿鼻獄に墮べし。こゝに於て檀越怒り。將に害を加へんとす。滴救ふ者ありて。腹れ給ふことを得たり(註) 齋讚には多力の人供奉するによりて恙なしといふ青蓮房に潜み在す。この時節に當り大力の人。多く供奉するはおぼつかなし。文勢をもてかくいふか)とこの事紀年録および註書讚にみえたり。佛祖統記且流布の本には載せず。また高祖の父母法華經に皈し。法號のこと且高祖。これより日蓮と更め給ふこと。佛祖統記の外所見なし。現にも他本脱漏なるべし 又いふ一本にいはいはく。高祖彌陀堂にて難を避け。是より上總國笠森の。觀音堂に到り一宿し

給ひて。妙經讀誦あり。且歌一首を詠じ給ふ「憂にふる涙の雨にぬれしとて。今日笠森を身にきぬるかな」かくて同國藻原の領主。兼綱ならびに高橋五郎時光の兩人。觀音の夢想を被り。翌朝彼處に至りて高祖を見る。示現を感じて馬に騎せ奉り。歸宅して草庵を修む。一七日の説法を請ふ。今藻原の妙光寺これなりといふ（藻原縁起）

第八 他宗の非を擧てこれを破る工藤以下檀越となる事

高祖はそれより鎌倉に著給ひ。名越の松葉谷に草庵を結び。暫くこゝに住し給ふ。于時華嚴宗の明慧といふもの。推邪輪三卷を造り。専ら法然が念佛集を折く。その筆力勇猛なり。法然を指して法滅の張本。佛法の怨敵。また狂亂大賊となす。高祖これを閱し給ひ。奇なるかな今の世に。またかゝる人も有けり。然れどもこの作者も。本門の大乗を知らず。されば五十歩百歩にて。尺も短き所あり。吾將に一針を弄し。その病根を刺すべしと筆を採て作書し給ふ。これを守護國家論といふ

按ずるに紀年録に。守護國家論を著し給ふは。正元元 戊 未。高祖三十八歳の時とせり。且華嚴天台の學僧。おのゝ書を著して撰擇集を駁すとありて。明慧の作と定かにいはずかくて鶴岡に經藏あり。異書多く積めりと聞。高祖往て閱し給ひ。數月にして歸り給ふ。偕も世

間を觀ずるに。上代のごとは且く舍き。中古大同弘仁の二上皇（大同は平城天皇弘仁は嵯峨天皇）空海が邪法を容て。王道衰微の端を啓き。保元上皇（白河帝）に至つて天下亂る。夫より衆人王道を棄て。直に霸道に走りたり。今鎌倉に元帥を置き。征夷大將軍の權を柄ども。その實は副元帥。北條氏の政道なり。これ白法隱没して。黒法の現するなり。佛法王法と等こそかはれ。その衰へゆく所以は一なり。如來遙にこれを察し。この時を識して後五百歲闍淨堅固白法隱没。と説給ひて上行菩薩。出現の時に當れり。今鎌倉は天下の都會。法敵もまた強し。既に光明寺に然阿あり。極樂寺には良觀あり。建長寺に道隆あり。大佛寺に隆觀あつて。各像法の權教を張る。これを責伏せずは。如來本門の妙經顯はれず。去來これより彼徒を摧かん。と忍辱精進の鎧を着開權顯實の駿馬に乗り。正直捨權の螺を吹て。三類の城郭を襲ふ。と遣は統記の文勢にて。碎きていはは華嚴阿含。方等般若は權教にて。像法の時こそ合へ。今末法の世に及んで。妙法の外一切衆生を。濟度する經文なし。然るに各碩學の。聞えありといひながら。此所得曉らず。或ひは宗祖の糟粕を嘗て。地獄に墮在するを識らず。愚なるかな諸寺の沙門。ただその身の愚のみならず。天下貴賤の人をして。悉く地獄に導く。その罪淺々ならんやと罵り。南無妙法蓮華經の七字を。高聲に唱へ給ふ。然れども衆寡敵せず。たゞ一種の狂僧と謗り。敢て願るものなし。高祖思惟し給ふやう。現にも三類の法敵強く。寡をもて衆を挫きがたし。勤

持品二十行の偈。今こゝに昭々たり。これを降さんこと容易からず。若し國の大變を現じ。も
 て謗法を脅かさん。と便咒を持して守護神を召す。守護神影のごとく響のごとく。高祖の前
 に現じ給ふ。高祖これにうち對ひ。それ如來の物を化するや。必ず瑞相あつて現ず。吾忝
 なくも佛敎を受け。未曾有の法を説く。宜く瑞現あるべきなり。大集經に三災あり。藥師經に
 七難あり。離合その數を異にすれども。所謂人衆疾疫難。他國侵逼難。自界叛逆難。星宿變怪難。
 日月薄蝕難。非風雨難。過時不雨難なり。これを世に七難といふ。次第にこれが大變を現じ。
 法華誹謗の徒をして宜く。恐怖せしむべし。これ我弘化の大瑞相一念三千の法門なりと。示し
 給へば守護神は。憤て命を聞く。夫より高祖はますます勇猛に。大音聲を以て四方に告るに。念
 佛は無間地獄の業。禪は天魔波旬の徒。眞言は國を亡し。また身を喪ふの邪法なり。律宗は國
 邑の賊。嗚呼無智の豎子この語を信じ。早く念佛を捨邪禪を除き。印契を禁じ戒律を止めよ。
 我はこれ如來の使ひ。無上甚深の妙法を説く。この妙法の功力における。久遠如來の護持する
 所。三世諸佛の守護する所多寶如來の證明する所。上行菩薩の傳來する所。本地與藏の妙法蓮華
 經。一たびこれを唱ふるときは。成佛の種子を得べく。一たびこれを信ずるときは。元品無明
 を斷ずべし。今この大法を用ゐずして。後悔すな後悔すな。と頻りに説給ふから。聞人不測に
 耳を側つ。こゝに工藤左近吉隆。四條金吾頼基。進士太郎善春。印東氏これを聞。大法值偶す

る所やありけん。その説を尊くおもひ。來りて聲て檀越となる
 按ずるに紀年録に。四條頼基進士善春。工藤吉隆來りて。檀越となりし事は。康元元丙辰に
 て。高祖三十五歳の時とす。この時武州の人荏原義宗。右衛門大夫宗仲も。共に檀越となる
 といへり。是本文と年歴相違す
 またいふ紀年録に是より響。彌陀開堂より鎌倉に趣かんとて。平郡南無谷の泉澤氏に宿し給
 ひ。順風を得て舟相州米濱に至る。巖窟の中に座し。經を誦し給ふ。去て鎌倉に入給ふに。
 炎暑甚だしうして渴す。楹に就て唱題し給へば。清泉忽ち涌いでたり云云。統紀の説と年歴
 差へり。また舟米濱に着るとき。俚人高祖を負てゆく。路榮螺ありてその俚人の足に傷く。高
 祖これを咒し給ひ。即ち愈ることを得たり。これより後今に至るまでこの濱の榮螺角なしと
 いへり(この條地本に所見なし)

かくてこの年天台の僧。成辨法師こゝに來り。高祖の徒弟たらんを請ふ。高祖許して住め給ふ。
 その年甫めて十八とぞ。偕その年も暮て建長六甲寅となりければ。高祖御年三十三。閏正月吉
 旦を擇び。成辨法印入室得法して。剃度の式を設つ。衣を更へ名を改め。是より辨阿闍梨日
 昭といふ

按ずるに紀年録に。台家の高僧成辨受戒とあり。いかにも此人碩徳ありて。世間高祖を狂僧

と誘ふ。然るを二人信を起し。こゝに來りて徒弟となると。凡人に去て克せんや。實に大器
 景余が辯を俟ず。まかれども年甫めて十八。高僧と稱すは過たるなるべし
 さて其年四月廿八日。豫め二七日を下し。嚴密に壇を設け。伊勢宗廟及び比叡にして。初見の
 三十番神を。勸請して禮を竭し。題を唱し咒を持して奠釋時を移しけるに。恍惚の間にして。
 宗廟及び三十番神列位儼然と拜まれ給ふ。高祖辨開梨に墨を磨せ。別付の首題大書きて供せら
 る。後にこの首題を宗廟に納む。石に彫て間の山淨明王院に置と云云。この頃池上右衛門太夫宗
 仲。荏原左衛門義宗。四條三郎左衛門賴基進士太郎善春等。時々來りて教化を稟る。一時高祖
 下總に往給ひ。歸らんとして同じ國。飾鹿浦に便船を索む。時に富木五郎胤繼は。若宮の邑主
 なり。鎌倉の直宿にあたり。こゝより船に乗りけるが折ふし高祖便船なく。この浦を呻吟給ふ。
 胤繼遙にこれを見て。船中殊に閑暇なり。かの僧を呼入れて。言敵になさんと思ひ。從者を志
 て高祖を招く。高祖大に歡び給ひて。船中に到り給ふ。既に繼を解におよび。五郎胤繼高祖に
 對ひ。御房は何の宗ぞと問ふ。高祖對へて貧道は。いまだ宗門を定めずといふ。胤繼聞て點頭
 つゝ。日來鎌倉に日蓮といふ。奇僧出て諸宗を折伏し。たゞ法華の題を唱ふ。子もこれを知れ
 りやと問ふ。高祖對へて知れりと宣ふ胤繼然らばその説奈何と。問とき高祖は從容として。衣
 の袖を搔合せ。それ佛法の本意は。王法を扶て國家を守護し。風雨順次諸難を穰ひて。一切衆

生を救ふにあり。然るに今の世高祖と呼る者も。成覺世尊の意を知らず。妄にその家々の宗
 祖に泥みて。時機相應の教へに反す。故に却て國家を亂し。衆生をして暗に迷はしむ。こゝに
 於てかの日蓮。深くこれを歎息し。正法を説てその邪見を。翻さんとするといへども。數年流
 弊の鏽を磨に至らず。還て佛敵の汚名を被り。且狂僧と嘲らる。その以如何にとなれば念佛無
 間等。四箇の邪法を誦ればなり。その絆は箇様々々。と辯舌水の流るゝ如く。理を盡して説き
 給へば。五郎胤繼聞終り。忽地に坐を避て。それ御房は日蓮師ならむ。吾悉く隨喜せり。と
 崇敬すれば即ち我なり。子は誰とかすると問。五郎欽みて在下は。八幡若宮の邑に住す。富木
 胤繼といふものなり。量らざる値偶によりて。この大法を承はる。他日彼處を過り給はば。必
 す訊尋を願ふといふ。當下船は順風を得て。鎌倉に着ければこゝにて。袂を別ちけるが。この
 時炎熱蒸すが如く。喉乾きて渴に臨めど。更に飲へきの清泉なし。高祖樹にたちよりて。暫く
 題目を唱へ誦經し給へば。清泉遽に涌出たり。これ天の賜なり。と手に掬びて喫し給ふ。こ
 の泉今に竭ず。世人呼で日蓮水といふ。かくて松葉谷に歸り給へば日昭たち出てこれを迎へ。
 まづ其無事を悦ひ聞ゆ。一時高祖日昭に對ひ。われ爾を得てしより。鳥の翅あるが如く。彪の
 爪を生するか如し。三類の敵強しといへどもこれを壓しにせんと必せりと。日昭聞てこれを度
 む借高祖に問奉るは。わが師偉徳の感する所か屢異人を見るとありこれ何の謂なるぞ。高祖答

へてこれぞ是。法華經の威烈なり法華經所住の處には。諸天晝夜これを衛護る。子に非ずんば見るとを得じ。他聞かば怪まん欽みて他に洩しそ。既に去ぬる正月朔日。日蝕の時日輪の中に。生身の愛染明王。現じ給ふを親く拜せり。また十五日より十七日まで月中に不動明王天照皇宮坐を並べて。儼然たるを親しく拜せり。これ法華經の行者の他。何ぞこのとあらんや。と日昭聞て大に感じ。願はくはその相形を圖し給へ。襲什して拜せんと請ふ高祖筆を染給ひ生身愛染明王拜見。正月一日日蝕之時生身不動明王拜見自二十五日一(傍に咒文を加ふ)大日如來より日蓮に至つて。嫡々相承二十三代。建長六年六月二十三日。日蓮新佛に授くと云々(新佛とは辨闍梨日昭を斥すなり)日昭辱なくこれを戴く。その年の冬十月に至り。印東治郎右衛門有國夫婦來り。宗を改めて法華に皈す。且其男吉祥麻呂を奉りて。弟子となす。この年。甫めて十歳にて。辨闍梨が外姪なり。高祖深く鍾愛を加ふ。この人後に日朗上人といふ按ずるに紀年録に。下總平賀源有國。その男吉祥麻呂とあり。かくてその前夜雷鳴て堂の前に墮ると夢給ふ。翌日吉祥麻呂來るにより。高祖一見して宣はく。我を起さんものは汝歟他年大に法鼓をならさん。と好し給ふよしを載たり統紀には夢のとなし。進退周旋乞として。巨人の如しとのみ見えたり

第九 鎌倉天變地妖并高祖岩本實相寺に入給ふ事

建長七年乙卯。高祖三十四にならせ給ふ倍豪氣壯健にして。諸宗を折伏すること雷の如し。念佛はこれ無間の業禪徳は則ちこれ魔界眞言は國家を喪ひ律宗は盜賊たり日蓮は慈悲廣大。また如來の使なり。早く彌の彌陀佛を捨はやく彌の戒律を捨よ。と日々毒鼓天衢に徹す。こゝに於て極樂寺の良觀光明寺の然阿淨光明寺の行敏等。その他碩學の智識と呼れし。僧等一同に耳を欲て。聞て驚愕し見て歎哭し。十字街頭逆聲盈溢す。今この妖僧を失はすんは後必ず大害あらん。と齒を噬み眼を睜きて。終に殺戮を加へんとす高祖は温良恭寛として遊行更に怖るゝ色なく。實に獅子王の如くなり本地高遠なるにあらざは。一日も立難かるべし其年も暮て康元元丙辰には高祖御歳。三十五にならせ給ふ(建長八十月五日改元)意氣ますく勇猛なり諸民相競ひ相呼ぶ中に。半これに和する者あり。また是に傾くものあり。また信する者降る者あり妻は信じて夫に捨られ。子は唱へて父に捨られ或ひは主に疑はれ兄に背き。府内大に騷擾す。この時に當つて工藤吉隆荏原義宗池上宗仲四條賴基進士太郎善春。いよく法華の是なるを知つて。念佛を捨妙題を持し。本化戴髮の弟子と稱す(戴髮の弟子とは剃髮せずして佛門にいるなり)奮つて身命を願ず。外護の力を振ひけり。この時高祖熊王を得て。これを奴僕となし給ふ。

この年二月廿九日電 膠 志く洪水あり。六月七日また大雨鶴岡の社鳴動す。是唯事にあらざりけり。と諸人恐怖を懐く所に。十月八日に至つて大元帥。賴嗣十八歳にて薨じ給ふ。按ずるに賴嗣薨逝。佛祖統紀に斯の如く載たり。然れども賴嗣は。去ぬる建長四年職を辭し。歸洛なし給ひて宗尊新王。當時鎌倉の將軍たり。まかれれば前の大元帥にて。今は鎌倉に下らず。恐らくは謬ならん。

その翌正嘉元丁巳。高祖御歳三十六(康元二三月十四日改元)天變地妖ますく己ず。二月廿三日大地震動し。日を経ても猶止ず。夏に至りて雨ふらず。諸國一圓に旱魃せり。これ經にいふ過時風雨難なり。五月十八日子の時に。大地震あつて民屋を壞す。陰陽師阿部晴茂をまて。占はしむるに凶を告ぐ。八月朔日もまた大地震。二十三日もまた地震し。坤軸も摧けんす。神社佛閣も丕に破壊し。山嶽は崩れ大地裂て。その色青き火炎涌出す。九月四日もまた地震し。夫より數十日小動止ず。かく天地の變に遭て。稻穀更に登らざれば。國中一同飢饉まて(稻穀の登らざるを飢といひ菜蔬の熟せざるを饑といふ)四民食物を失ひ飢饉に逼る。これ偏に日蓮法師が。毒鼓を鳴し邪を奮ふ。天の誠なりとして。これを憎み刀杖を企。或ひは鳩殺せんと計り。或は將軍執權の。後宮夫人の女性に訴へ。これを黜けん謀るといへども。定見なきが故にそれも協はず。また奈何とも詮方なし。高祖は是等の天災地妖も。たゞ傍法の誠めなり。早く邪

義を退けずは。これに勝たる大變あらん。と公に説給ひ。自若として更に動せず。于茲甲斐源氏新羅三郎。義光の後胤にて。波木井六郎實長は。性來聰敏にして學を好み。且その志し佛乘にあり。荏原義宗の縁者たりしが。當時鎌倉に直宿せり。こゝに於て荏原ども。數回會合して世事を譚り。尋で佛法の談に及ぶ。荏原義宗のいへるやう。抑佛法の實といふは。唯一乘の法華經のみ。己れ近頃これを曉れり。法華は即ち天台なれど。今の天台は謬を傳へ。偏に佛を汚すものにて。佛の眞實は本化なり。といふに實長不審まて。その本化とは何方に在や。義宗對へて遠きにあらず。松葉谷に坐し給ふ。これ肉身の居士にて。上行菩薩佛識に酬ひ。こゝに出現ましますなり。猶委ましく知らんと要せは。工藤池上等に問べし。忽地疑ひを散ずべし。こゝに於て波木井實長。一日池上工藤に會て。義宗が言をかたる。工藤左近池上大夫。开は義宗が言の如し。我々隨喜渴仰せり。然れども今の時勢。勸持品色讀の行。殊に強ければ我々も。ただ密に時を竣のみ。足下も爾意得給へ。と因て實長微服して。松原谷に往て高祖に見え。屢その説法を聞。之に感悟するとあり。直に己が禪宗を捨て。本化に歸し高祖を師とす。後年身延山の大檀越たり。かくて正嘉二年 戊午。高祖三十七になり給ふ。二月十四日のとどかや。父妙日居士頓に卒しぬ。と房州より告來る。高祖その訃を聞て天に仰ぎ。地に伏して絶倒し給ふ。日昭および在あふ人々。扶け起して介抱す。漿を絶と三日におよぶ。曾て故郷へ往んと宣ふ。

門人等諫ていふやう。今弘法半に及ばず。この地を棄て往給はし。法敵等その隙を伺ひ。この
 菴も保々ぬらず。且路次のほども覺束なし。願くは止まり給へ。と切にいふを點頭給ひ。頓て
 辨蘭梨日昭を召。それ孝は百行の基なり佛も説て誠めとす。われ今父の喪に遭て。これを忽に
 すべからず。因て汝を補處位に充。とさて衆人を顧み給ひ。今より後日昭を見ると。我を見る
 が如くせよ。然あらば這處に難あらし。と示されてみな領掌す。高祖これ、房州に到り。喪
 を修すると一百日。加るに母を慰め志を竭し給ふ。曾て修喪の暇あるとき、一代大意抄一篇を
 撰し。一は先考の冥福に薦め。一は門下の新發意に授くとぞ。かくて鎌倉へ飯り給ふに。南無
 谷の郷なる泉澤權頭が許に宿す。かくて船に乗んとするに。逆浪高く纜を解がたし。この時
 高祖高きに登り。咒を持し給ひけるに不測なるかな。風遠に治りて。海上また平穩なり。船
 八段び俚人等。其威徳を感じつゝ。權頭およびその子三人。歸伏して宗を更む。こゝに持咒法
 華塚を樹。今猶存在せりといふ

按ずる紀年録に。南無谷のと澤泉氏のと。年歴及び事實これと合す。但し順風を得て。船
 相州米漥に至ると見えて。逆浪行を妨ぐるのをいはず。またたゞ巖窟に入て誦經とのみあ
 り。また法華塚のと泉澤氏及び子三人。妙法に皈したるとも見えず。今佛祖統記に従ふ
 さて其年も暮れ。正元元己未（正嘉三三月廿六日改元）高祖三十八にならせ給ふ。然るに疫

疾いまだ止ず。餓て死するもの道路に充り。こゝに十四五の小尼あり。出て人の戸を瞰ふ。諸
 人騒き怪みて。これを逐へば忽ち隠れ。また出て人を瞰ふ。古今未曾有の珍事なれば。貴賤恐
 怖せざるはなし

按ずるに本朝通紀後編卷之八にいはいはく。正元元年春疫癘飢饉すその細書に。天下大飢饉餓
 李滿街時京中有十四五小尼一取食死人一經月不知行方と見えたり

尋で盜賊火災發り。これを官に訴ふもの。綿々として踵を列ぬ。八月頃に至りては。米穀ま
 すく拂底して。牛馬巷に斃れ。骸骨路を塞ぐに至れり。又疫癘行なはれて。百姓死する者半
 に過ぐ。これかの人衆疾疫難なり。また九月二十八日は。戌刻に當つて熒惑星。南斗を犯すの
 みならず。大流星長四丈餘。乾より巽に飛ぶ。その聲宛も雷のごとし。是星宿變怪難なり
 凶にいふ熒惑星は火曜なり。和名和左波比保之といふ。登壇必究にいはいはく。熒惑は方伯の象
 より常に十月を以て大微宮に入る。制を受けて出て列宿を行き。無道を司る出入常無し云云。
 夏至の夜半に箕斗の交に中す。六月の昏に牛女の交に出とみゆ。また流星の和名與波比保之。
 漢書の音義に迹を絶て去るを飛星といひ。光の迹相連なるを流星といふ。また一名奔星とい
 ふ。史記の劉向が傳にいはいはく。聲ある者を天狗星といひ。聲なき者を狂夫といふ。五雜俎に
 はく云云。その墮るの地は兵を主る云云。また流星を見る以て不吉とす。亦古の遺禁な

りとみえたり。日本紀舒明天皇九年。二月十一日流星ありその歳蝦夷の兵あり云云と見えて多くは凶變の象とせり。今童蒙の爲めに略書す。しに於て鎌倉の貴族。大に恐れてこれを慎み。諸宗の僧等壇を設け。經を誦して災ひを禳ふ。高祖はこれを知らざる真似して。駿州岩本の實相寺にゆき。その大藏に入給ふ。抑岩本の大藏は。嚮に智證大師入唐のとき。藏經二本を將來して。三井岩本に納めたり。三井は治承中兵燹の時。伽藍と俱に焼亡し。唯岩本の藏のみなり。蓋し高祖の入藏は。這回ともに五回にして。強修行の爲のみならぬ。天變地妖は謗法の。罪なるをもて時の國主を。諫めん爲に斯ありしとぞこゝに實相寺の學頭に。智海法師といふありけり。高祖が佳名は豫て聞ぬ。這回來臨を僥倖に。正觀の講を請けるに。高祖更に辭み給はず。則ち講筵を開かれければ。山中の衆徒ここに集會。心耳を澄して聽聞す。當下高祖強毒の説。未法本化別付囑の微意。念佛無間等の四箇の公言。憚かる處なく説給へば。衆徒等大に驚くもあり。または惡口を憎むもあり。またその才の美なるを讃て。その説を感ずるもあり。各意中異なる中に。學頭智海は殊さらに。大歡喜を發しつゝ。謹でこれを信受し。既に宗をも更めて。高祖の徒弟たらんを思ふ。まかれどもまた聊憚る所なきにあらぬば。まづ小沙彌伯耆をして。巾瓶に侍せしめけり。これ白蓮阿闍梨日興なり。時に歳十四となん。その翌文應元庚申六齋日及び彼岸の日に。殺生一切禁斷せし

ひ。這は副元帥北條時頼深く佛乘に歸すにより。これを諸國に令するなり。その令の詞にいはいく。それ禽獸魚鼈の類ひ。命を重んずると山岳に踰て。身は人倫に同じきを。漫に殺生なさんこと。罪業これより重きはなし。故に佛教の誡め惟重く。聖人の格式炳焉たり。然るに因て件の日々。江海に魚網を禁じ。山野に狩獵を停むるものなり。若違犯の輩あらば。御家人は交名を注し。凡下の輩は罪科に處すべし。諸國の守護ならびに地頭。このことを意得べし。但し神社の祭に至りては。制の限にあらざると云云。このこと東鑑にも見えたり。高祖この年三十九。大藏の考證も既に畢り。伯耆を伴ひて鎌倉に歸り給ふ。有國の男吉祥麻呂。歳十六になりければ。難染得度あるべしとて。その式を行はれ。諱を日朗字を大國とす。沙彌伯耆もこの時に。衣を更へ剃度なし。諱を日興白蓮と字す。かくて高祖は名越なる。巖窟の中に在して立正安國論を撰し給ふ。今この處寺となして。妙法山安國寺といふ

第十 立正安國論を呈す并高祖面前時頼を諫給ふ事

嗣說高祖は安國論を撰し畢り。まづこれをして大學三郎能本に就て出さん。と別に突難退治書を撰す。這は専ら淨土を折くの書なり。この二本を懷にして。熊本が第にゆき。貧道沙門の身たりといへども。率土の濱みな王臣なり。然るに近會天變地妖。屢行なはれて止時あらず。こ

れ天地の變といへど。法華謗法の罪によれり。故にこの書を元帥に奉り。國家の災妖を穰はんとす。足下まづ熟讀なし。願くは副元帥を。諫め給へど出し給ふ。能本これをおし戴き。披きてこれを點檢するに。究めてよの理顯然たれど。猶心中疑惑を抱き。聞て宗致を問ふ。こゝに於て高祖また。十法界明因果抄。唱法華題目鈔を造り。他日これを見せ給ふに。能本忽地に悟入して。則ち立て九拜し。この時儒を捨て佛に入り。戴髮の弟子と稱す。高祖本門戒を授け給ひ。又これを推て日學と呼ぶ。日學老母あり。その年八十高祖を拜し。落飾して妙本と呼ぶ。日學大に喜びつゝ。傍に小築を構へ。法華堂と號て高祖に供ず。蓋し先考光祿能員法號長興且はその姉。若狭の局が冥福に。薦といへる意なり。高祖も歡びこの堂は。我願悉地の兆なり。今日の檀越は。父を長興母は妙本。豈偶然ならざらんや。長く末法万年の法雲を興して。一閣浮提妙法の根本。廣宣流布の濫觴なり。因て長興山妙本寺。と號んといかにと宣ふ。能本の日學大に喜ぶ。然れども世に憚れば。秘して顯に人に語らず。さてこの立正安國論。文義實に質直にて。精妙奇中の奇なりといへども。在下今は官途にあり。且儒臣たるをもて。己れより勸めがたし。古人も善を見て揚げざるは。君子にあらざるとあり。在下竊に思ふには。師自身これを持し。當時寺社職なる宿屋入道光則に就て出し給はんに。誰か異論をまうすべき。中々に他人をもて出し給はんに。勝るべし。と聞て高祖は領き給ひ則ち宿屋入道が。館に到りて出し

給ふ。入道光則承諾し。速かに副元帥。時頼朝臣に達すべしと。異議もなくいひければ。高祖は辭して歸り給ふ。抑立正安國論は治國平天下の要用なり。今印行して世に行なはる。その大略は金光明經大集經藥師經の。七難の文を引き。今現にこの難起るは。將に謗法の罪報なり。また正法を謗り退れば。諸天善神餘方に向ひ。その境忽ち魔界とならん。若國王有て我法の。滅するを見て擁護せざれば。その國三ツの不祥あるべし。一には飢饉して穀貴し。二には兵革三には疫病交發つて國寧からずと。仁王經にもこの旨を説く。蓋しその文小異あるのみ。當時佛關費を連ね。經藏は軒を並べ。僧は竹葦のごとしといへども。その僧詔曲にして人倫を欺誑す。人臣これを識らず邪正を辨せず。就中近代の法然。捨閉關拋の教を立て法華經を無用のものとす。これその罪の甚だしき。斯の如くの宗門等。天下に蔓り人これを信ずこゝに於て善神退散。惡魔こゝに入換りて種々の妖をなすものなり故に國家の平安を欲せば。淨土眞言禪律を斷。一乘の法華に皈し給へ。然る時は災難消除天下泰平なるべきなり。と問答に象りて深理を竭し。伸給ふと信切なり。時頼これを熟親て。心中何とか思はれけん。その後沙汰もあらざりしが。日を経て高祖を館に召す。高祖徐々どゆき給へば。時頼たち出て面會す。時頼まづ安國論の。大旨いかにと問けるに高祖袖を搔合して。國家將に興らんとすれば必ずしも禪禪あり。國家將に亡びんとすれば。必ずしも妖孽あり。それ念佛は無間の業。禪宗は天魔の徒。眞言は

亡國の法。律宗は國の賊なり。然るにこの諸宗類に行はれ。君臣上下これに與して。その殃た
 とるを知らず。これ國家亡びんとすれば。妖孽あるの文に稱ふ。今この諸宗を穢ひ除き。吾法
 華に歸し給へ。开を用る給はずして。月日を経るに至りなば。自界叛逆他國侵逼。尋て起らん
 と必せり。今日蓮我を立て。他宗を憎み偏執をもてかく申に候はず。たゞ如來の金言をもて。賊
 心に告奉る。よとの諫め至切にて旁に人なきが如し。時頼聞終り。その身禪に歸するをもて。
 心中十二分の悲あれど。論ふべき力もあらずこゝに於て凜然と。障子を開き入にけり。現に副
 元帥が威勢絶倫。其處に居給ふ人々等烈火の上に魂をおく心地せられつゝ。或ひは寒心戰慄す
 れど。高祖は猶自若として。畏れ給ふ氣色もなく。我諫めの容られざるを。心に歎息して餘々
 と。館を退き給ふ時願て聲を揚。他日大元蒙古賊。襲來する時に至らば。閣下(執權といふ)今
 の度に似ざらん。他國侵逼難は蒙古賊なり。嗚呼殆ひかな殆ひかな。と此所を去り給ふ。是を
 大諫三事の一とす

按ずるに紀年録にいはいく。元應元庚申。高祖御年三十九疫病いまだやまず。二月高祖災を。
 穢ふ嚮を記し給ふ。四月法界因果を著し給ふ(これ本文にいふ安國論と共に大學三郎に與へ
 給へる法界明因果鈔なるべし)五月駿州南條兵衛行事を問ふ。よつて唱道鈔をあらはし給ふ。
 廿六日書成てこれを賜ふとみゆ。這是本文にこのことなし。但大學三郎に與ふる書。因果鈔

の他に。唱法華題目鈔あり。右の唱題鈔はこの略なるべし。然る時に南條兵衛と。大學三郎
 の兩人に。與へられしものなるべし

第十一 賊徒松葉谷夜討并高祖富木常忍が第に到り給ふ事

高祖立正安國論を撰し。副元帥時頼に呈せられて。その後。一回面謁ありけれど。夫より何
 の沙汰なきのみか。面謁のとき念佛等を。悉く破し給へば。その坐に在あふ人々も。たゞ耳を
 驚かし。執權の怒りを恐れて。深く慎み心を。寒すばかりにありけるが。退きて後そのとを。
 種々にいひ罵り。佛法深理の程はまらねど。當時執權の禪に歸依して。その法を信じ給ふに天
 魔波旬の徒なりと陋む。實に狂氣の所爲たるべし。然れども世間に。奇を好むが人の常にて。
 渠に與する者もあるべし。かくて次第に蔓らば。佛法争諍の街とならん。嗟苦々しと爪彈す。
 殊に北條氏重時は深くもこれを憎むものから。また奈何とも詮方なければ。頻りに高祖を毀謗
 なし。瞋恚の炎胸に焼を。その家臣等推量り。絆われかと思ふ折から。諸宗もまた傳へ聞。
 父祖の讎にも彌増て。その痛心骨に透り。直にやは閤べき。殺してその根を断んと企つ。志か
 れども後難の。恐れなきにあらざれば。執權の連枝といひ。志かも當時重んぜらるゝ。重時の
 臣に便りて。このと内々譚らんに。渠等も太く怨むが故。そのとは心易かれ。かの狂僧を害し

たりとも。争後難のあるべきぞ。後々のことは在下等。よきに計らんとまうしけり。さらば少しの恐れもなし。と同志の族を語らふに。吾もくんと與する者。數百人に及びけり。斯ては京童部が。戯れに造りたる。狗の小屋めさし松葉谷の。草菴を踏碎くこと。寧を返すより易かりと。勇み進んで押よする。頃しも八月二十七日。まだ子の刻の程なれば。月さへ出ず暗き夜に。かの草菴の前後左右を。森々と押とり捲き。垣を壊し戸を破る。菴中に在ける人々。這は何事と駈出見れば。炬火數多燃し連ね。或ひは弓箭を持兵杖を携へ。彌がうへに寄來るにぞ。偕三類の法敵ども。寇をなすに疑ひなし。その義ならば物みせん。と折節今宵は進士善春。こゝに宿してありければ。腰刀を引抜て。多勢が中に躍り入り。縦横に斬てまはれば。迹に續きて能登房も。こゝを先途と防ぎけるが。この亂妨不意に起り。殊に敵は大勢なり切れども突ども絆ともせず。押重りて攻入るほとにこの兩人も防ぎ難ね。數多所深痕を負て必ならずも引退くその間に法敵ども。草菴に火を放つ折しも風の烈しくて。炎十方に散亂し。黒烟天を焦しければ各とる物も取敢ず。這々に遁れ出る。高祖も徐々と此處を出たまひ。その傍に山王宮あり。其處に石窟のあるを僥倖まづそれに入給ふ。法敵等草菴を焼き高祖の遁れ給ふを察し。これを普く索めけれど。終にかの石窟を知らず。逸早くも何方へか。遁給ひしと探し案倦て。夜のほのくくと明る頃に。この所をひき取りけり高祖は石窟に隠れ給ひ。心靜に妙法を誦經して在しけ

るに。夜は既に明たれどこの騒ぎに人々は。みな散々に逃失て。朝餉を進らすものもなく。奈何にと訪らふ人もなし。斯る折から山中の猿群來りて躡跡なし。果を捧げたり。高祖歡びてこれを受。その飢を凌ぎ給ふ。猿は山王の使令なりされば法華の持者を扶くる。かの神の御計らひなり。むかし敷山に在し時神慧を得ると少なからず。今また事に蒞で化を扶く。謝せずんばあるべからず。と暫く念誦咒願し給ふ後この地に一精舎を建。神徳に酬はる。猿白山法性寺これなり。斯て高祖こゝを出給ひ。下總の方に杖を曳て。富木五郎が館に往給ふ五郎大に歡びて崇敬すると他日に倍す。順て宅の傍に。一草菴を造てこゝに置參らせ。朝暮師弟の禮を竭す。高祖これを感じ給ひ。手自一尊四菩薩の。像を彫て此處に安置し。法華堂と號られ。一百日の講筵を開き給ふ。今の中山法華經寺これなり五郎は則中山第二世日常上人と稱しけりこの時に當つて曾谷教信。太田乘明。秋元太郎。宗を改めて戒を受く。高祖また五郎のため。一尊四菩薩及び大黒神を。手自刻みて與へ給ふ。また鬼形の鬼子母神を刻み。この所に安置せり(今中山祈禱本尊となすもの是なり)また寶塔品の説相大小二幅。大黒天の像を畫く。畫もまた妙を得給ひけり。今中山の藏物たり

按ずるに佛祖統紀二十四に曰く。進士善春松葉谷に止宿して。法敵を防ぐ。若此人在ざりせば。殆危かなといひ。能登房疵を被る高祖岩窟に匿る。善春堅護す。既にして三類退去。

善春が勇猛人見て神と爲。今に迄るまで進士の家榮ふと見えたり。しかれば當下瘡を請しは。能登房一人ならん。この能登房のこと。いまだその傳を考へずと紀年録にみゆ。曾谷教信は戒を請て日禮といふ。その子典宗は山城入道と號す。父の志を繼て。力を高祖に竭すと云云。太田乘明は左衛門といふ。源三位頼政の裔なり。頼政怪鳥を射たる賞によりて。丹州五箇の莊。太田城を賜ふ。子孫この故に太田を氏とす云云。富木五郎が妻は乘明の姉なり。俱に高祖に歸依し。その男太郎を以て高祖に投ず。帥阿闍梨日高と呼ぶ。乘明老後夫婦居して。暈肉を嘗ず躬に袈裟を着し。俗名を以て道號となす。高祖是を美して。毎に乘明上人と稱し給ふ。弘安六癸未四月十六日逝す。歳七十六と云云。秋元太郎兵衛は下總白井村に住す。法華堂にして高祖に謁し。念佛を棄て檀越となる。從來富木の通家なり。今白井の秋本寺是なり。蓋元と本と和訓通するをもて中古誤て本の字とすといふ。

第十二 大祝兼益神道傳授并高祖伊東へ貶謫の事

其翌改元あつて弘長元辛酉となる。高祖四十にならせ給ひ。熟思惟し給ふやう。三類の敵強しといふ。佛識實に奇なるかな。我具に勸持品。二十行の偈を色讀せんと欲す。誠には天照皇太神宮。久成世尊の垂迹となす。再び宗廟を拜してこれを謝せん。と乃辨闍梨を召ていは

く。他日三類蜂起せば。また雲時の暇も得じ。今伊勢に詣んと欲ふ。汝よく迹を讀れ。と辨闍梨謹み領承す。依て高祖杖を曳き。勢州に著て淨明寺に到り。三七日修法し給ふに。神は本土に在て。宮中空虛なり。

按るに神は本土に在て。宮中空虛なりといへる。甚深無量の佛説あらん。不幸にしていまだ聽ず。たゞ俗身をもてこれをいはし。それ伊勢は本朝の宗廟。倭姫命神託を稟て。敷浪よする伊勢國に。鎮坐ありしより世のあらん限り。動かざるの神居なるを。本土とは何方にか。蓋佛説に久成世尊の垂迹といふ時は。則本地は久成世尊にして。その本土は淨土なり。さればこの時天照太神淨土へ往給ひしにや。識者の辨を希ふ。

高祖大息して歎じ給ひ。嗟何れの日か廣宣流布の時を得て諸俱に。一道清淨の眉を開き。神の本懷を満足せん。遺願王戀ざれば。言を食じと大書の題目。度みて神德に供せられ。則こゝを去給ふ。當下また妙見大士。出現せるとあり。

按ずるにこの事諸書に見えず。今佛祖統紀に據て記す。但世間流布の本に。始めに伊勢宗廟のとより。東大寺造立に依て。行基僧正の事を記し。且元亨釋書にいふ所の。神託を記して。云云然るにいつの頃よりか。ぬぎはうりいつはり。神は沙門をあはせずとて。傍爾をさし川をへたて、近付ず。されどもこゝは。日本の宗廟。又はわたらへ荒木田一流の神道あれ

ばにや。聖人こゝに分入給ひ。間の山淨明寺を宿坊とし。往來結縁のため石をきざみ。題目をきゑしおき給ふ。聖人宗旨建立のとき。安房國東條郷。天照大神の御厨にて。本化の法門をはじめられ。今又伊勢に分入り。題目をきゑし置れける。御心入尋ねべし。御消息にはく建長五年四月廿八日。安房國長狭郡の内東條の郷。今は郡也。天照大神の御厨なり。右大將家の立給へる。日本第二の御厨。今は日本第一也。此郡の内清澄寺。諸佛房の持佛堂の。南面にして午の時に。此法門中始て。今に廿七年云云。予ことし淨明寺の。石塔拜みに勢州へ下りし。長一尺あまり廣さ五寸。經の字下そげうせたり。住持かたらく。日蓮聖人此寺に百日逗留ありて。太神宮へ日參あり。其時みづからきざみ給ふと申傳へたりとぞ云云。と見えてその事實いかにも辯じがたし。たゞ建長五年四月廿八日。清澄寺にして築めて法華の。題目を唱へ給ひしと。統紀の説にあへり。この嚮伊勢へ往給ふときも。石を刻み給ふと見え。住持かたらく百日逗留。太神宮へ日參ありとは。建長二年のとをいふなるべし。將こゝに大書の題目。度みて神徳に供ずとある。是右にいふ石に刻めるにや。但彼處には往來結縁の爲といひて。神徳に供ずるといはず。思ふに何れか誤謬あらん

こゝに武州恩田の御厨は。大神宮の神供なり。その祝を益行といふ。日昭この人に因あり。高祖還回吉田に往き。本朝天地人傳來の。神教を問んがため。かの益行が狀を請ひ。持て吉田に

到り給ふ。吉田大祝兼益は。この狀を見て異議に及ばず。出で高祖に對面し。願て書を出して讀しむるに。高祖讀給ひて忽地に。その書の旨を解し給ふ。兼益聞て大に駭き。嚮に神道を學びしが。譬憐悧の漢たりとも。年を経て學ばされば。その見こゝに至りがたし。予は究て凡人ならず。とまた書を出して授けたり。高祖讀給ひてこれを解すと。兼益に超たれば。兼益いよいよ驚嘆して。神道の口訣家の秘書。盡く傳へたり。高祖悉く領掌あり。計らざる神教の深妙。宜なるかな王臣一種。國土更に動ずるとなきは。今この傳によりてこれを知る。况やまた大乘の有縁なる。世尊これを記し給ふやと。願て別れを告こゝを去んとす當下兼益一書を造り。辨闡梨日昭に贈るその書にいはく弘長元年二月九日。法華行者日蓮法師入來。依三神領武州恩田御厨代官益行口入。去年以來連連通達畢。此人立三妙經時節現當法門。作三書籍。名ニ安國論一顯學無雙之人。神代降臨三十二神名號之事。懇望之間。舊冬注遺之。件神號字訓讀條。爲ニ傳授。今日來臨。此事神道行法之秘號也。於凡人者。輒不相傳之儀也。然此人極ニ一代藏經之才覺。頗異人之間不涉ニ思惟。令授ニ與件祕訓等一畢(以上)と認めて贈られけり。高祖歡びたまふとぞ

按ずるにこの一條紀年録と大に異なり。かの書には弘長元二月高祖武州恩田に至り給ふ。吉田の大祝兼益來りて。祝益行の家にあり高祖これに就て神道の奧秘を問たまふ兼益いはく。

吾道他門の傳をゆるさず。志かれども師の不凡なる。吾穩す所なし。高祖遂に鎌倉に歸り給ふ。その頭書に。恩田は武州都筑郡吉田は京の東にあり。兼益姓は藤原卜部氏大織冠の裔なり。兼益曰等は。兼益記に見えたり（番神問答に載す）と見えたり。世間流布の本にも本文にいへる。兼益より日昭へ贈る書等見えて。高祖花洛の吉田へ到り給ふ由に見えれば。記年録の説恐らくは非ならん哉。統紀をもて案ずるに。この時再び伊勢に詣豫て益行が紹介の書を齎し。上京して吉田に到り給ふ。その事實協ふに似たり

高祖鎌倉に歸り給へば。辨闇梨日昭元の如く。松葉谷に菴を構へ。その歸菴を俟たまふ。因て高祖こゝに入り響の難にも懲ざる如く。猶妙法を唱へ他宗を破し。毒鼓轟々逆風颯々たり。故にこれに敵對もの。却て勇猛を感じ。説に飯伏して降るもの若干なり。四條願基池上宗仲。工藤左近等志を變ず躬を奮て供給せり。こゝに極樂寺の良觀房。これを憎むこと甚ましく。實は先頃黨を結び。この菴を燒討せしも。この僧が密計なりしに。早くも高祖は遁れ給ひ。無事平穩に坐ませば。執念くもこれを嫉み。己が檀越なる北條氏重時に就て。密に謀を容るといへども。重時その頃府朝に在て。その任重き人なれば萬機の理亂掌にあり良觀が説を容るといへども。時を跋ていまだ果さず。その子長時は執權たる。時頼に輔佐として。副帥の職に加はり。頗る威權他に超たり。良觀これを僥倖として。頻りに讒を構へければ。父を謀りて高祖を召

し。同五月十二日。豆州伊東に貶竄す。既にして船を藏ふ日昭日朗日興の輩。こゝに來りて別れを惜み。官吏に對ひ諸共に。配所へ往んを願へど。本朝の律における。流人に從者を許さず。この義協ひがたしとあり。こゝに於てかの三個は。高祖の袂に携りッ。涕泣して別を惜む。高祖も渠等が實意を感じて。衣の袖を絞られしが。良あつて宜ふやう。志はさるとながら。吾今罪ならずして罪に處せられ。遠く放たれること是非に及ばず。いふも詮なきことにはあれと。北條家は時政を祖とし。その孫泰時に至つて法を定む。然も貞永の式目は。天下國家の律令として。後世みなこれを襲ふ。然るにその律に背き。松葉谷を夜討して。法を犯せる者は宥め。この如來の御使ひ。法華經の行者をして。遠島に放たしむるは。實に天魔の所爲にして。未來罪業覺束なし。今汝等に別るゝと。忍びずといふといへども。むかしも然る例あり。三河入道寂照が。唐山へ往んとせしとき。その母別れを惜みけるに。寂照これを慰めて。山海遠く隔つとも。同し天地の間なり。月西山に入を見て。我子唐山に在と思されよ。日の東方に出るを見ては。我母日本に在すと思ふべしといひたりけん。今わが師弟のうへにあり。と諭し給ふその間に。はや船に乗れ時流れぬ。と追立の官人等。情もしらず。遽し立る。高祖從容として船に乗給へば。水主楫取帆を捲て大洋へ泛み出る。三個の人は渚に轉び。蹉をして戀悲しむ。その餘工藤池王以下。老若男女汀にたち。みな落涙合掌し。帆影見ゆるまで見送つ。家路

を斥て歸りけり。夫より辯閑梨日昭は。松葉谷の菴に歸り。師の在し日にかはらず。肅々儼然として志を動かさず。妙法の勤め懇懇なり。

第十三 朝高妙法に歸す并高祖日輪中の二菩薩開眼の事

かくて風濤穩に。日ならずして伊豆國。小目浦に着給ひ(後人こゝに寺を造り蓮著寺と號す)また河名の津に至ること、にその津の船守に。彌三郎といふ者あり。かゝる邊土に人となり元來陋しき業をなして世を渡る身にしあれば。智識の教化も受しことなく。所謂木訥なりけれど。夫婦ともに志はまた珍らかなる者にして。豫て聞く日蓮大士。こゝへ左遷を心に憐み日毎に食を調へて敬ひ冊きたりければ高祖もまたこれを謝し。返まり給ふこと三十餘日。本化の正法を化度し給ふに一文不知の賤しき身にも。心に信を起しぬれば自然通曉して。この大法を得たるが如し。かくて六月十七日。伊東八郎左衛門朝高は。こゝの莊司にてありける故僅に小さき廬を補理これに高祖を徙しけれ。その僕をして警衛せしむ。曾てこの國に在る謗法の族遙に鎌倉に在てすら。これを聞て憎むなるに。今眼前視るに及びて。いよゝ高祖を惡みつゝ是を罵しること法に過たり。然るに伊東朝高は。この頃重き病を稟て。心地ほとゝ死んとす醫藥は元より其處の驗者。此處の高僧とこの近郷に。聞えたる人に託して祈禳更に怠らねど一點ばかり

も驗を得ず今ははや露の命も旦夕に逼りたり當下綾部正清は。伊東の親族にてあり。深く歎きてこの病ひ一朝のことにあらず去月こゝへ謫せられし日蓮法師は傳へき法華經の行者とかや彼僧觀る所あつて念佛を無間といひ禪を天魔眞言亡國律宗を國賊と罵るから終にその徒の憎みを得てこゝへ謫されたりといへど。法華は如來の誓願にして。法中の法とや聞く。然ればこれを修する者。極めてその驗あらん。往て祈禳を請んといふ。朝高も念佛者にて。常には快しと思はねど。かゝる病苦に責られては。更に左右の念あらず。その妻子はこれを聞。只管に請はどに。正清高祖の室に到り。如此々々のことを告願ふは貴僧の功力をもて。この病患を癒し給へ。と懇に請にけり。高祖これを聞給ひ。いと安きことながら。畢竟渠が病痼に苦しむ。これ謗法の罪責なり。吾救ふことを得じ。と更に肯ひ給はねば。正清猶も詞を盡し。その病ひ平快せば。忽地宗を改めて。戴髮の弟子となさん。こゝをもて愛憐を垂れ。救ひ給はれと乞にけり。高祖然らばと諾し給ひ。往て是を見給ふに。果して十羅刹女の責なりかくて高祖枕方に在り。且く念誦し給ふに。苦惱邊に忘れし如く。食を與ふるに味ひを得首を擡るに甚輕し。日ならずして常に復す。これに依て朝高はいふに及ばず妻子從類これもまた夢かとはかり驚くまでに。悦びの眉を開きけり。曾て朝高高祖に對ひ。恭敬禮拜していへるやう。在下師に因て忽蘇活し。師に頼てこの微妙の。大法を受ること。實に生前の僥倖なり。今師を見ること爺嬢の如し。

億劫供養するとも報じがたし。と便一邑を裂て高祖に寄附し。即受戒唱題せり。曾ていはく前の年。我海中に光りを観る。網を下して試るに。立像の釋迦佛を得たり。その頃彌陀を念ずるをもて。更に尊信の心なく。その儘に捨おきぬ。今法華に歸しぬれば。尊像は主師なり親なり。忽にすべからず。然れども復思ふに。我に在ては唯一家のみ。師に在らば天下を利せん。如何に夫これを護持し給はんや。と高祖これを聞給ひ。奇なるかな奇なるかな。生死の海底は無明の闇窟。また謗法の地に就て。尊體を現し給ふ。實に廣宣流布の瑞なり。我謗法者の誣言に罹り。こゝに貶謫せられずば。奚ぞ尊像を拜すべき。子がこれを感得せるも。妙法の値遇淺からず。と頻りに感嘆せられける。朝高かの像を出し恭く奉る。高祖これを拜し給ふに。語るが如く告るが如く。これに待するに生るが如し。夫より生涯往く所。暫くも躬を離し給はず。世に隨身佛といふは是なり。かくて朝高佛像の。出現せる地に就て。一字の梵刹を營つ。海上山佛現寺と號す。こゝに禪宗普門といふあり。常に日天子を拜しけるが。一朝日輪の中に。二菩薩の出現せるを觀。歡喜して自身畫き。年來匣に秘おさしに。今年時至つてこれを持來し。高祖にその點眼を乞けるに。高祖拒み給ふとなく。點眼して授け給ふ。普門大に歡びて。恭敬禮拜なしにけり。これより嚮この二菩薩を摸し。誰にか點眼を請んと思ふに。異僧忽焉としてこゝに現はれ。關東の流人日蓮に。この點眼を請べし。といふかと思へば姿は消ぬ。普門心中

に怪しと思ひて。年月を過けるに。果して高祖この所へ。貶謫のよしを聞及び。往昔のことを思ひ出し。偕こそ點眼を請にけれ。またこの因あればにや。禪家の普門將にこれ。謗法の徒といへども。高祖辭み給ふとなく。點眼して與へらる。普門歡びのあまり文を作りて。一紙に書し。長く法末の徒に示す。その言にいはいはく

一輪三尊之像者余奉侍金鳥尊天之朝。日輪光明中。本地尊影現。是則日月一體陰陽一致之根元也。故取筆謹書寫之。一異僧來曰。日輪開眼關東流人釋子日蓮云云。今茲弘長元年辛酉六月六日。伊豆國伊東配流下開眼之秘寶藏納永家門之寶物也。

南禪寺沙門

普門

弘長元年辛酉七月八日

この紀事今彼家に藏すといふ

是より後かの普門。深く高祖の徳を信じて。慰問審切なりければ。高祖もこれを感じ給ひ。小木像を刻みてこれに與へ。我素より定處なし。或ひは東に在り西に在り。然るを常に訪んと。勤行の妨なれば。この木像を附與すべし。若我を思ふときはこの像を看よとなり。普門忝く拜謝なし。一生これを奉せしとぞ。この像今江戸淺草長園寺に藏すといふ。普門は南禪寺の

開山にして。大明國師といふ是なり。
 按るに普門は無聞と號す。初め東福寺にあり。宋に入後宇田天皇。弘安三年に歸朝す。正應年
 中龜山上皇。龍山の離宮にあり。この宮妖怪多し。南部の叡尊を召て。禊はしむれども退か
 ず。因て普門を召す。普門こゝに居して妖魅を退く。上皇これより心を宗門に傾け。南禪寺の
 開山とすといふ。大明國師と號し。また佛心禪と號す

日蓮上人一代圖會卷之二終

日蓮上人一代圖會卷之三

第十四 伊東貶謫赦免並老母の死を復し給ふ事

經にいはく。若この法華經を毀謗する者あれば。その人命終つて阿鼻獄に入と宜なるかな北條
 氏重時。然る尊き以をばしらねど。極樂寺の良觀が。頻りに讒訴するのみならず。高祖もま
 た耳なれぬ。妙法を説てその餘の宗を。或ひは天魔といひ國賊といふ。これ邪の僧ならん。と
 いと輒くも思ひとり。其子長時と俱に謀りて。竟に高祖を伊東に流す。されば妙法誹謗の罪。
 忽地その身に報い來つて。先頃より狂疾を發し。醫藥祈禳手を盡せども。更にその應驗なく。
 稍に重りゆきて弘長元辛酉十一月三日。終に空しくなりけり尋でその子長時も。假に副元
 帥の任たりしが。渾身不仁して起居安からず。しかれどもその祟ぞと思ふものはなかりけり
 明れば弘長二壬戌。高祖四十一にならせたまひ。四恩抄一篇を作り。房州西條天津の城主。
 工藤左近丞に賜ひけり。この人從來高祖に侍して。不惜身命の檀越なれば。伊東配流のその
 間。志を竭されける。その報恩とぞ聞えたる。また其年も暮て弘長三癸亥高祖御歳四十二にな
 らせ給ふ。假初にも三年の伶俚。物わびしく在しけるを。彼船守の彌三郎(紀年錄に氏を上原とせ

り。また伊東氏朝高が。いと懇切に冊きつゝ。他事なきさまに郷人も。自然うの化を受けて。誘れる人も翻り。皈依するもの多かりけり。こゝに鎌倉副元帥時頼。うの子を馬頭時宗父子。屢怪しき夢を見て。心に快からざれば。陰陽帥を召て卜するに。みな凶なりといふのみか。親族の間和せず。またうの麾下も穩ならず。時頼さしも聰明なれば。日夜これを慮るに。重時父子の計ひをもて。三年以前日蓮を。伊東へ配流なしけるが。次の年重時は。狂疾を發して卒し。長時も起居不仁なり。思ふにこれ唯事ならじ。加之天下の變化。かの立正安國論に。悉く符合せり。日蓮過あるに似たれど。渠もまた有徳の沙門。これを蹴くると不可ならんか。と一時時宗に議してこれを赦す。日乗この命を稟け。赦牒を齎して伊東に赴き。如此々のよしを告る。伊東氏彌三郎等。雀躍してこれを歡ぶ。これより嚮この謫所へ。折々異人の來るとあり。高祖は是を見給へども。餘人の眼には見ることなし。因て高祖は豫じめ。赦免のよしを知りたまふ。かくて人々に暇を告げて。かの地を發足したまひつゝ。五月十二日鎌倉の。松葉谷に歸りたまふ。日昭日朗日興等出迎かへてこれを歡ぶ。また日朗の弟子教澄は。去年叡山より來たりしにより。このとき聲めて高祖を拜す。かくて戴髮の門人等も。みな衆會て歡びを演べ。以來は他宗の折伏を。緩たまへといふもあり。また時機を護りたまへと。諫むるもありけり。高祖は更に用ゐたまはず。儼然として故のごとし。教機時國鈔といふを作りて門人に示め

さる。曾つてうの年八月十日。大風石を抜き連日強雨。同廿四日に至たつて。洪水天に滔

れり

本朝通紀を按するに。弘長三年秋八月。天下大に風ふく云云。うの細書に。民屋悉頽破。拔樹破穀。由比濱著岸之船。數十艘研損漂沒。鎮西乃貢運送船。六十餘艘悉沒海。と見ねたり

これたゞごとにあらざるの天變。人々恐怖なす處に。同十一月二十二日故副元帥北條氏時頼。最明寺入道覺了房道崇卒し給ふ。行年三十七とぞ聞けし

按するに北條時頼。康元元年十一月。世を遁るゝの志あり。子二人有て長を時輔といひ。次を正壽といふ。時輔素より盜行にして。父の心に契はず。正壽は六歳にして政に預らず。故に重時の子長時を以て。假の執權となし。山内に退隱して。最明寺道崇と號す。但落飾の後政を行ふこと七年と云云。時頼卒去の翌年。文永元秋八日。北條長時も卒しけり。因て正壽執權となる。北條時宗これなり于時十四歳とぞなん

かくて弘長四年二月十八日。元を文永に改めらる(甲子)高祖御歳四十三。うの年三月比叡山と三井寺に事あつて確執におよび。叡山の佛殿僧宇。一時に灰燼となりければ。是を佛法の破滅ならん。とみな人眉を顰めけり。然るに七月五日に至り。大彗星見はれたり。うの光芒の長

きこと。一天に横はり。何丈とも測りしられず。和漢にこの星の現ずること歴史百家の書にも載て。絶て珍らしきことにはあらねどその。長さ三五尺あるひは一丈二丈に至れば。限りなきことと思ふに。這回は閩國に遮りて。その果を知ることなし。古今未曾有の怪異なり。と咸人恐怖せざるはなし。高祖これを看給ひて。這は吾安國論にいふ。自界叛逆難の驗なり。後には想ひあるべし。と傍の人に示し給ふ。この頃宗教一冊を選す。特に法華と真言の優劣を説給へり。其年七月孟蘭盆を修し。先考（亡父の事）の塚を吊ひ。且慈母を省んため。故郷安房の小湊に到り給ふ。老母これを視て深く歎び。種々の物語に。二三日を過しけるが。一日老母急病發り。醫師よ鍼よともものするうちに。終に空しくなられたり。高祖大に駭き給ひ胸塞つて人事をさへ。覚えぬばかりに歎かれしが。須臾ありて形を正し。吾招魂の法を修して。今一回母を見ん。と頓に淨室を構へつゝ。こゝに入りし出ざること三日又傍に松の樹あり。その根に跨りて咒を持し給ひ。水を手に掬んで絶入りたる。母の口に灑ぎ玉へば。下測なるかな氣息絶て。はや三日に及べる母の。忽地に蘇生。大かたは常に復しぬ。高祖これを看て歎び給へば。母も俱に歎び聞う。集會ける兄弟親族。奴婢を始め遠近の郷人。親しくこれを視るからに。その奇特を感ぜぬものなく。實に高祖の神通力。生佛なりと稱へけり

按するに紀年祿。高祖。すなはち壇を松樹の下に設け。祈念し給ふは。吾道もし弘まるべく

んば。慈母それ蘇せんことを。と神咒を持し水を加へ。口を灑ぎ給ふに。忽よみがへり給はふこれより誓を保つこと四年。もつて權迹の奇特とす云々。また註書讀にも云々。元祖不堪悲哀。發願曰。所弘法華經。可三流。二布。日本國。三者。生。活。母。命。折。華。掬。水。莊。嚴。道。場。誦。法。華。經。書。藥。王。品。要。文。以。淨。水。含。口。中。吐。氣。而。蘇。延。命。四。年。見。聞。嗟。異。應。死。之。業。行。轉。之。此。之。謂。也。云云と見えて。大同小異あれと。統紀には法華經流布を誓ひ給ふこと見えす

その頃房總の間。疫疾大に流行して。天死するもの半におよぶ。村民患ふること大方ならず。醫禱手を盡せども驗なし。高祖の神通を聞および。來つて援を乞けるに。高祖これを肯給ひ。自身一艇の舟に乗り。白布に題目を書し。海に泛めてこれを曳しむ。疫神怖れて逃去りけん。病者頓に恢復す。その布村民珍襲す。産婦是を懐けば。速に子を産し。小兒にこれを冠らしむれば。疱瘡立所に癒るとぞ。こゝに同國清澄寺の舊友。高祖こゝに在と聞。時々來りて法義を問ふ。高祖法華真言の。勝劣を記して與へ給ふ。また華房の郷蓮華寺に。新に堂を營み阿彌陀を安置す。寺主高祖を誘ひて。開堂を託しける。高祖彼堂内に至り。念佛無間の公言を説く。聽く人大ひに憤み。怒り。更に教へに従ふものなし。故に高祖念佛無間書一篇を作りて與へ給ふ

按するに是より嚮。建長四年華房の。青蓮房に在せしとき。邑主何某も念佛者にて。彌陀堂を營み高祖をして。開堂の導師となす。高祖これを破し給へば。邑主怒りて事あらんとす。人あつてこれを救ふ云々のこと。紀年錄註書讀には載て。佛祖統記に見えず。今年に至つて此の如く説く。年序大に差ひたり。但し同郷にして。相似たること。再びありしにはあらざるべし。

第十五 小松原の御難並南條に與へ給ふ御書の事

こゝに安房東條の邑主平景信これを聞。大に忿怒の相を現じ。日蓮法師は當代の佛敵なり。恨らくはその昔。清澄寺にして斬ることを。とこれより頻に害心を發し。高祖の起居を窺ひける。頃しも十一月十一日。高祖かくとも知り給はず。十人可の從者を將て小松原に遊び給ふ。景信聞て大に歡びかの惡僧を討んこと。今日に期したり。と多く人數を驅立て。弓箭兵杖をとり持せ。その歸路を俟かけて。前後左右を取圍み。矢を放つ事雨の如く。太刀拔連て切て蒐るは。雷光の晃めぐごとし。喩へ勇武の人たりとも。かく不意を撃れては。支まがたく狼狽すべし。況や緇徒の武勇なく。身に寸鐵も帶されば。奈何ともすべきやうなく。衣の袖を首に懸して。樹立の間にたち隠れ。暫時は避るものながら。敵は稍に近づきて。奮ひ撃つこと甚急なり。

り。こゝに於て法子。競忍。心剛なるものなれば。先に立て争ひけれど。竟に協はず討れけり。乘觀房また迹に續きて。防ぎけれども是もまた疵を受けて引退く。景信得たりと進み近づき。刀を奮つて撃ほどに。高祖の眉間三寸ばかり。切傷られ給ひけり。この時景信が持たる太刀。兩段に折たりけり。因て景信も心中に。恐れを生じ猶豫をりから。天津の城主工藤左近。この事を聞て大に驚き。從卒を將て馳來り。敵を隔防ぎ戦ふ。景信更に精兵を加へ。大に挑み戦かふほどに。工藤吉隆これを見て。所詮争ひがたきを曉り。從者に命じて高祖を守護し。天津の館に入れ參らす。景信ますます勇威に募り。追撃といと急なれば。工藤吉隆踏止まつて。大に突戦またりしかど。衆寡元より忤あはず。吉隆敗れてこゝに死たり。されば景信が從卒等も。大く戦ひ勞れしうへ。疲負も數多なりければ是までにして引返せり。高祖は危急に逼り給ふを。吉隆が援を得て。無事に退き給ふものから。吉隆既に戦死しぬれば。慟哭し給ふと限りなく。妙隆院日玉上人と證し。僧儀を以て祭り給ふ。然れどかの法敵等。一旦は退くとも。再び襲はんと必定なり。こゝに在さんは危ふしとて。それより市坂の岩窟に隠れ。その創を療し給ふ。當下右の臂を折給ひ。進退心に任せ給はず。數日此處に在しけり。その郷人に忠吾忠内とて。同胞のものありけるが。兼て妙法に皈依するから。この事を聞て馳來りしが。はや絆果て市坂の石窟に坐しければ。甲斐々々水汲み。高祖の疵を洗ひまゐらせ。夫よりこゝ

に屬副て信實に事へけり。今華房郷蓮華寺の側に。高祖の洗創井と稱ふるあり。不測なるは早天に滅せず。穢れし者來りて汲ば。水變じて泥となるぞ。稚兒この井に侍まて。隈に汲しめずとなん。こゝに景信は高祖を逐て。いさゝか鬱念は晴すに似たれど。工藤吉隆が妨にて。捕逃老しを遺恨にもひ。再び人歩を驅催ほして。高祖の在所を探さんとせしにその夜暴に發熱まて。人事を覺えず種々の。譫語を吐て苦しむさま。親族等大に駭き。醫師を招き豫てより。信ずる彌陀の像を安置し。僧等來りて異口同音に。念佛を唱へ三部經など。練かへし讀誦なし。平快を祈るといへども。艱みはますます強くなり。果には嗟苦しくとて。牀にもたまらず踊あがり。在あふ物を取て抛出し。狂人のごとくなれば。看病の族も案倦果てたゞ一間に閉籠ちき。その隨意々々狂はせけるが。聲の限り叫び苦しむ。第二日目の曉に。狂ひ死にぞ做しにける。實に妙法を毀謗の罪。十羅刹女の責を受け。死しては阿鼻へ墮獄す。と説れたりしもこの時に。賊なりとぞ思はれける。かゝりにければ法敵の。魁首滅びて其餘の者も。威勢ひを擯かれければ。誰妨ぐる者もなく。高祖は靜に創を療し。程經て平快まし〜けり

紀年録を按るに。この年（文永元）大學三郎の妻。已に宗化に歸す云々。高祖曾て大學三郎に洙泗の道を問給ふ。大學三郎もまた佛法を叩く。つひに一信士となり。妻因て歸依すとみゆ。然かれども高祖始て。大學三郎に謁し。經典の旨を聞給ふは。建長三辛亥にて。高祖三十

になり給ふ時なり。其後安國論撰集のとき。大學三郎に見せ給ふと。この書一二の卷に亘る。紀年録と大に差へり。また清澄寺の法印道善。法門におよびその化に歸すと。また信實の子祝髮して。日向と號ると。みなこの年の事とせり。佛祖統紀にはこの年にあらず。猶次々に編輯すたゝこゝに異同をいふのみ又云同書の頭書に。忠吾忠内は兄弟なり。姓は北浦氏。房州東條濱荻の人。邑に祠ありて北原といふ。その和訓近きを憚り。姓を瀧口と更む。忠吾の裔別れて兩家となる。一は七郎左衛門。一は八郎左衛門。みな村の莊屋たり。一に北浦忠太と唱ふるは。天津に在て富家なりとぞ。忠内の裔は勘左衛門といふとみゆ

本文鏡忍は出自詳ならず。或ひは傳ふ奥州の住。白川八郎の子なりとぞ

爰に南條兵衛七郎といふものあり。南條新左衛門頼員の弟にして。駿州富士郡に住す。その妻は松野六郎左衛門の女にて。上野氏の通家なり。豫て高祖の化を慕ひ。日興に懇て戴髮の弟子となりしが。この時に當つて病ひ甚篤し。高祖是を聞給ひ。同十二月十三日。疾ひを問ひ書を賜ひけり。偕その御書の趣きは。日本國は純法華經の機なり。迹家宗を開てより。こゝに既に四百餘年。比丘比丘尼優婆塞優婆夷の四衆。悉く法華經に依らざるとなきものなり。善人惡人智あるも智なきも。皆五十展轉の。功德を受けずといふとなし一句一偈もこれを持すれば。無縁も尙得道す。况や有縁に於てをや。譬ば崑崙山に石なく。蓬萊山に毒なきが如し。まかるに

近代念佛の。世に盛なる甚しきかな。善導法然が學地なり。日蓮十七八歳の時。悉く涉獵せり。今の時に當つて説の如く。法華經を持する者はたい。日蓮一人のみ。然るに時人を待ず。老少更に定まるとなし。足下若先せば。必らず梵天帝釋四大天王。閻羅大王に告よ我はこれ日本第一。法華經の行者なる。日蓮房が弟子なりと。梵天帝釋閻羅王も。これを聞ば争か庇はん。按るにこの條世間流布の本には諸經の要文をひらき。いと長く綴りてその末に。文永元年十二月十三日日蓮。南條兵衛七郎殿とあり。御消息のことなれば然もありなん。これ御書の眞寫にもやあらん。然れども緯長くしてこゝに盡しがたければ。今佛祖統紀に就てたいその眼目を擧るのみ。紀年祿にはこの事曾て見え。尤かの書に派たることいと多し

第十六 天災地妖並高祖の母堂卒去の事

文永二年乙丑には。高祖御歳四十四にならせ給ふ。この年正月朔日日蝕あり。これ彼經にいふ。日月薄蝕難の至れるなり。と二月十三日筑前國宮崎八幡宮炎焼せり。又十二日彗星現はる。是等は近世うち續く。天地の變にて人みな駭く。高祖も大に痛差し給ふとなん。撰者竊に按ずるに。日月の薄蝕は。繩度分數あつて十數年の前にも預め測るべし。その故奈何となれば。日の天は高く月の天は低く。常にその行道を異にし。毎朔に至り。日月經緯を

同じうして相値とき。月下に在て日の光りを隔て掩ふ。故に日光りを失す。相離るときは元に復す。これ日蝕といふ。蟲の草木の葉を食ふが如し。因て蝕の字を用うるとぞ。また月蝕は月の望にあり。日月相對して一線の如く。日地下に在て地球日光を障り隔て。これを照すこと能はず。故に月その光を失す。漸地影の外に出れば。則日能くこれを照す。因て元に復すなり。故に日食は朔日二日に限り。月食は十四十五十六日に限りその他の日にあることなし。みな曆算に因て未來の蝕分を考へ知るに。分釐も差ふことなし。猶陽曆陰曆帶蝕等の義あれど。緯長ければこゝに省く。五雜俎卷の一にいはいはく三代之時日食皆不預占。孔子答曾子。諸侯見天子入門不得終禮者太廟火日食是也。不知古人不能知耶。抑知之而不以告耶。而預占。日食又不知起於何時也。但不預占。則必有陰雲不見者。故春秋於二日食不恒書。非不食也。またいはく使二日食不預占。令一人主卒。然遇之猶有戒懼之心。今則時刻抄分已預。定之矣。不獨人主玩之。即天下亦共玩之矣。予觀官府之救護者。既蝕而後。往一拜而退。杯酌相命。俟其復一也。復一拜而訖事。夫百官若此。何以責人主之畏天哉。と見えれば。唐土三代の時日月の蝕を察せず。夫より遙に春秋の頃に及びても。今の如くにはあらざりけらし。然れども曆算の術。天下に行はれてより。万民未來にこれを知る。况

や本朝鎌倉の時代に於てをや。卒然としてこれに遇ものにあらず。然るをこゝに載て夏霜冬雷。風霜のとき天變と等しくいふは余に於て更に解さず。因て録して后来の識者を俟つ。この年高祖春を祝して。老母に見え給ふに大に喜ぶ。こゝに日玉上人（工藤吉隆）の父。民部少輔行光は。年老て子を喪ひ。悲歎更に止時なけれど。渠大法の爲にその身を捨るまた喜ばしと慰めて。先祖從來の香華院あり。高祖を請じてこれに住しめ。常に説法を聽くことを樂む。然るにこゝは他宗なり。故にその住持宗義を詰る。この時法孫日澄をして。この僧に對話せしむ。住持竟に口澁り。敵すること能はざれば。衣を更宗を改む。今の日澄寺これなり。再説日玉在世の日。その妻女姪みけり。日玉死に臨みて言すやう。若胎中の兒男子ならば。成長の後巾瓶に侍せしめん。と果して男子を産ければ。約の如く高祖に奉る。刑部阿闍利日隆これなり。後年日隆父吉隆が。亡命の地に就て。一字の梵刹を建立し。曾て鏡忍房その時に。忠死せる功をもて。この寺の開山祖となし。父日玉を第二祖とし。日隆自から第三代となる。今の小松原山鏡忍寺これなり今茲小林民部少輔實信の子十三歳比叡山高乘院にて。出家得度し。天機伶俐の若僧なりしが。實信は高祖の父。妙日居士と親しくして。豫て高祖が事を知れば。今年招きて高祖に投ず。佐渡阿闍梨日向これなり。附ていふ紀年録を按ずるに。文永元年の條に。男金の實信の子祝髮す。日向これなりとのみ

見えて。小松原御難の前條にあり。まかれは統紀と一年を差へり尤比叡山高乘院にて。出家得度のこともいはず。但細書に弘安元年。大士講筵を身延山に開く。日向聞て筆受す。三年の夏成る。後にこれを日向記といふとみゆ。またいふ日向の父實信は。姓は藤原にて男金氏なり。藤三郎と稱す。永仁丙申九月三日死す。法號妙信と云々。母は左間氏法號妙向。子孫今に榮茂すと見えて。小林の稱なり。いまだ孰か是なるかを知らず。かくて十一月十四日。高祖花房の郷青蓮房にして。師の道善法印に見ゆ。高祖懇懃に禮を竭す。法印もまた高祖の徳。天下に秀たるをもて屢これを恭敬せり。この時高祖師に對ひ。貧道最初師の教戒により。竟に出家の道を得たり。曾て諸宗を涉躋し。開祖の意を探りその道を究む。まかるに各依怙ありて。如來の本願を我執に掩はれ。一家の私言を立てるに至る。貧道深くこれを愛へ。苦修して妙經の貴きを知る。因て念佛無間等。他を譏るに似たりといへども。實は如來の公言にて。わが謂にあらず。當來の佛種何かこれに加へんや。願くはこれを聞給へ。と丹心に云されければ。了得道善も多年の碩徳忽地に大悟なし。席を避てその化を受る。師弟遠に所を易たり。こゝに上總夷隅郡。奥津村に住しける。佐久間兵庫亮重吉も。先頃高祖の化に皈しけるが。這回一字の法華堂を造り。恭まき高祖を請ず。請に應じて彼處に往給ひ。既に小

日の法延を開く。後精廬となりて廣榮山。妙覺寺といふこれなり。日家日保薙染得度す。附ていふ薙は髪を剃こと。染は法衣を著することなり。重貞の弟某を日家といひ。その子某を日保といふとぞ。本文道善法印高祖の化に歸することも。紀年録に文永元十月とせり。法印道善來り訪ふて。譚なる法門に及ぶ。高祖諭すに宗敎を以てすれども。法印いまだ是を信ずること能はず。後漸くその化に皈すとみえて。また一年を差ふ。文永二年乙丑には。高祖下總の鼻輪に往給ひ。眞言寺に宿し給ふ。寺主法を聽て感伏し。宗を更ふ日正これなり。夫より常州筑波を過て。野州那須に至り給ひ。微恙き疾ありて温泉に浴し給ふ。こゝを去ること二里餘にして。一塊の巨石あり。その高さ五尺ばかり。經題を書て將來に貽し給ふ。その歸路藤原にて。庄屋次郎助といふもの檀越となる。高祖命じて星氏に改む。これ日によりて光りを生ずるの義に象るとぞ。別れに隱みて次郎助いはく。吾既に年老たり。死さばその葬をいかいすべき。と高祖則紙を以て。四幡を造り本化の四大士を書し。汝もし終に臨まば。是を以て道師とせよ。と偕それより宇都宮に至り。君島某が許に坐まし。その祖母歸依して妙金と法號す。城主下野守景綱の姉も。また歸化して妙正と呼ぶ。夫より下總澳津の人。佐久間重貞法華堂云々。と這は本文におなし。下總鼻輪の敎化より。景綱の姉の事まで。五箇條は紀年録に見えて。統紀にはこのこと見えず。

その翌文永三丙寅。高祖四十五にならせ給ひ。民部少輔行光が妻。唱題の功德を問うせしかば。法華題目書を製し給ひ。これを彼妻に與へ給ふ。二月朔日一天曇り。大に泥の雨を雨す。車馬旅行の者大に苦しむ。

因にいふ流布の本には。聖人慈念のあまり。一向に念佛を信仰する女人を御敎化あそばし。法華題目の功德をえらび給ふ。御書を法華題目抄と名付云々。と見えて行光が妻のことをいはず。但題目抄の本文。問答にして事長し。故にこゝに省きたり。また泥を雨すの條に云々。垂仁天皇十五年に。星雨の如く降り。聖武の御宇天平十三年六月に。日夜京中に飯をふらし。同十四年奥州に紅の雪降り。光仁天皇寶龜七年九月廿日。瓦石雨の如く降る。同八年雨石ふり井の水濁ると見えたり。また唐土の歴史に攷るに。唐の懿宗咸通八年七月。下邳に沸湯を雨して鳥雀を殺す。宋の慶曆三年十二月。天雄軍に紅の雪降る。既に化して盡く血なり。また端平三年七月血を雨す。また本文より甚しきは。元の至元二十四年。土を雨すと七晝夜。深さ七八尺に至り。牛畜没死するもの多し。これ則泥の雨にて。古今未曾有の變異なり。ここに用なきことながらたいおもひ出づるに任せて。童蒙に示めすのみ。この餘枚舉に違あらず。

こゝに高祖の母堂老衰に及び。近年多病になり給ふに。今年は別て衰へ給ひ。老病に迫り給へ

ば。高祖は大に嘆き給ひ。晨昏の看病いふもさらなり。晝夜眠らず枕を離れず。藥湯はまつ嘗て。然して後に進め給ふ。故に他の教化弘宗。この時暫く廢せらる。人咸その孝謹を崇び稱す。嗚呼聖者の仁孝なる。後昆これに則るべし。斯てその年も暮れ。文永四年丁卯には。高祖御歳四十六にならせ給ふ。母堂の老病益迫りて。露命旦夕の間にあり。高祖丹誠を抽でられ。咒持威神の力に依て。一日を支ふるのみ。筑後房佐渡房大乘房。交その役を執ること。また骨肉の如くなり。衣食及び慰問贈答。藥餌万端の雜費に於ては。工藤行光佐久間重吉。小林實信等これを議し。高祖に知らしめず緯を辨ず。故に三月の下旬に至つて。聊病の怠り給へど。また六月の末におよび。再發して故の如し。高祖一心に咒を持し給へば。母堂もまた唱題怠らず。その臨終を俟給ふ。既にして八月十五日。眠るが如く卒し給ふ。高祖の歎き營るに物なし。自身葬斂して墳を築き。慎で喪を修し給ふ。後この地に妙蓮寺を造る

按るに紀年録に八月十五日母堂逝す。高祖訃を聞。哀毀殊に甚しといへり。其前條上總澳津。佐久間重貞の請に應じ。高祖往て數日說法云々と見え。其後何方へ越給ふといふことなし。さればいまだ其處に在する歟。訃は字書に。告喪也。又至也と註せり。然るに高祖傍を離れず。教化を廢して臆病給ひ。臨終のとき猶傍に在り。奚ぞ人の訃を得給ふべき。紀年録の説のごとき。不審最甚し。且この年十二月五日。下總星名五郎に書を復し給ふ。また總州笠

森にゆき。觀音堂に宿し給ふ。その隣村墨田邑なる。高橋五郎時光といふもの。夢に觀音の示現を蒙り。夜明て笠森にゆき高祖に謁し。藻原の邑主齋藤兼綱一字を搦へ。高祖を請待し。檀越となるとあり。既にこの書或説を以て。嚮にこの事を出したり藻原縁起も大同小異あり。年歴もまた差へり。いまだ孰か是なるを知らず

這に高祖大孝を全うし。鎌倉へ歸り給はんとて。安房を發足ありて下總にかへり。中山を過りて富木五郎が館に往給ふ。五郎大に喜びつゝ。奉侍僮畧あることなし。時今臘月にて寒に迫る。春を俟て發し給へ。と丹心に駐むるほどに。高祖もその志を感じ。富木の家に越年し給ふ。五郎常忍が息。天台宗の僧伊豫房といふは。實は橘樹氏伊豫守定時の長男なり。這回宗を改めて高祖に飯し。伊豫阿闍梨日頂と號し。當國真間山の主なりけり

第十七 高祖鎌倉に歸り給ふ並蒙古書簡を贈る事

文永五年戊辰高祖四十七にならせ給ひ。猶富木常忍が第に在して。その近郷を教化し給ひ。春もくれて夏になりぬ。常忍妙經の講を請ひ夏中百日法筵あり。この時同國葛飾の一郡。多くこの化に浴しけり。齋藤遠江守兼綱も。宗を改めて受戒せり（兼綱前にみゆ各異同あり）古河の日胤首題房日唱。この時に薙染得度す

按するに日胤は千葉氏にて。其傳記詳ならず。後下總古河に歸り。梵宇を造立して法興山妙光寺と號す。紀年錄に日胤等得度は。共に文永四年とす。この時同國野呂の邑主。會谷直秀歸依すとみゆ

高祖猶こゝに駐まり。既に八月に至りければ。母の小祥忌を修し給ふ。日明日向もこれを務む。富木常忍も涙を含み。追慕の情を彰はしけり。かくて高祖鎌倉に飯り給へば。日昭日興これを迎へ。拜跪して勞を慰し。且迭の無事を歡ぶ。高祖辨閑梨に對ひ給ひ。汝を看ざるに既に五年。この大事を懷て心旌を動さず。我孝行を全うし。諸子安逸なるは實に憫が力なり。と日昭首を低てこれを謝す。偕もこの年閏正月十八日。朝鮮國禮邦侍郎潘阜等。大蒙古國の書を持して。對馬の國に渡來。夫より宰府に至らしめ。直に鎌倉に達しけり。その書にいはいはく大蒙古國皇帝 奉書日本國王 朕惟自古小國之君。境土相接。尚務講信修睦。況我祖宗。受天明命。奄有區夏。遐方異域。畏懷德者。不可悉數。朕即位之初。以高麗無辜之民。久瘁鋒鏑。即令罷兵。還其疆域。反其旄倪。高麗君臣感戴。來朝。義雖君臣。歡若父子。計王君臣亦已知之。高麗朕之東藩也。日本密遣高麗。開國以來。亦時通中國。至於朕躬。而無一乘之使。以通和好。尚恐王國知之。未審。故特遣使持書。布告朕志。冀自今以往。通問結好。以相親睦。且聖人以四海。

高麗王も書を副たり。その文にいはいはく高麗國王植右啓。季秋向闌。伏惟大王殿下起居萬福。瞻企瞻企。我國臣事蒙古大朝。稟正朔。有年千茲矣。皇帝仁明。以天下為一家。視遠如邇。日月所照。咸仰其德化。今欲通好。千貴國。而詔寡人云。海東諸國。日本與高麗。為近隣。典章政治。有足嘉者。也。漢唐下或遣使中國。故遣書以往。勿以風濤險阻。為上辭。其旨嚴切。茲不獲已。遣下朝散大夫尚書禮部侍郎潘阜等。奉皇帝書。前去。且貴國之通好中國。無代無之。況今皇帝之欲通內貴國者。非利其貢。獻。但以無外之名。高麗於天下。一耳。若得貴國之報。則必厚待之。其實與否。既通而後當可知矣。其遣一介之使。以往觀之。如何也。唯貴國商酌焉。至元四年九月日啓。とあり北條時宗その書を披閱し。夫より直に京師に獻ず。帝嘗原宰相長成をして。既に返簡を書しめけるに。時宗以下彼國の。文辭甚しき不禮を怒り。再奏して返簡を罷め。そのまゝ使節を逐駁せり。高祖はこれを風聞給ひ。佛識毫末の差ひなし。されば未然に安國論。撰集のとさこれを知り。他國浸逼難と載しはこれなり。殊にこの年五月八日。兩日の並び出る。咸これ國家謗法の責なり。大將軍以下これを察せず。今將に更めずんば。國家の大害目前なり。これを知つて云ざるは。忠告の道にあらず。と宿屋入道光則に。一簡を贈らるゝ。光則これを披き見るに。

久しく謁せざるのを謝し。偕去ぬる正嘉丁巳八月廿三日の地震。日蓮是を經に校ふるに。念佛者闡禪者。之が由をなしこれが災をなす。蚤くこれを掃除せざれば國土また清淨ならず。天の贖る所地の責る所。靛べからざるもの也。若わが諫を容されば。他國侵逼難の至らんと疑ひなし。と文應庚申一策の。勘文を足下に託し。故副元帥(時頼の)閣下に呈せり。既にして今年に及び竊に聞く蒙古の賊。吾日本に書を通ず。と奇なるかな經文に符合す今この賊を退くべき者。唯日蓮一人のみ。大玄に似たりといへども。君のため國の爲。神の爲佛の爲。これを言ずんばあるべからず。宜く蚤くこれを奏すべしとあり。光則熟覽すといへども。何思ひけん其儘にして。更に返簡もわらざりけり。高祖は獨嘆し給ひ。嗟時歎業歎斯の如く。惑へるものは曉し難しと。長大息をなし給ふ

第十八 高祖十一箇所へ書を贈り給ふ並諸宗騷擾の事

かくて高祖はこの儘に。止なんかとも思しけれと。率土の濱みな王臣なり。我釋氏の徒なりといへども。この土に産れて國恩を受け。且父母の國の危ふきを知つて。言ざるは義にわらず。然らばまづ思ふ旨を。夫々の人に告ん。その序をもて我執に慕り。邪見なる法師們が眠の夢を覺させん。とそれより閑室に入給ひ十一所へ御書を賜ふ。まづ副元帥北條時宗に獻し給ふ書に

いはく。天台の門人日蓮。副元帥の閣下に啓す。竊に承る蒙古國。書を投じて寇を告る。とこれその昔經に校へ。立正安國論にいふ所なり。日蓮いまだ萌さるるに知りこの事を言すといへども。建長寺壽福寺極樂寺多寶寺。淨光明寺大佛殿等。その邪なる宗を信じ。これを國家の福田となし。また迷津の船筏となす惑へることの甚しき。今これを禁ぜずんば。この災ひ休べからず。それ諫むる臣あれば。その國正しく社稷安し。争ふ子家にあれば。その家安く不義に陥らず。天下の安危は政道に據り。佛法の邪正は經文に則る。矧本朝神明の國。神は非禮を稟給はず。天神地神共にこれ。一乗の神明にして。法華經を以て衣食となし。正直を以て通力となす。經にも諸佛の世を救ふは。大神通に住し衆生を悅しめんが爲に。無量の神力を現し給ふ。と今の天下公道の。實經を捨て私立の邪計を尊信す。天何を瞋ざらん。地何を責ざらん。日蓮は法華經の使なり。且諫忠の臣なるを。用わずして後臍を噬ん。貧道日蓮た諸宗を聚會し。理非を糺明せんを願ふ。治國の大事この擧にあり。閣下宜しく早く圖るべし。恐懼不宣と認めらる(この書おの)漢文なれどそのまゝに寫し出さば兒童の解しがたからんを恐れ國字に和けてその意を説く以下准之また宿屋光則に與ふる書は。西戎蒙古賊書を投じて。我日本に迫ると聞く日蓮早くこれを知つて。先年安國論を呈上し。近日また短書を贈る。然るに足下日蓮を。賤しめて登庸ず藥師の二難大集の一災。來らんを遠きにわらず。故に國主の聽を驚か

す。日蓮は如來の使なり。今これを用ゐざるは。天下の政事馬風牛たり。痛かな不宣とあり。また平頼綱に贈る書は。日蓮立正安國論を。嚮に撰して故の副元帥。時頼朝臣の閣下に呈す。既に天下の變化を見るを。鏡の如く影の如し。佛識の記する所。纖毫も差はざる。されとも主君これを用ゐず惜いかな惜いかな。妙法蓮華經は諸佛の至政。衆神の公道なり。日蓮知つて曉せども却て流刑に遭ふ。十和が璞も磨ざれば。いまた眞の玉にあらす。器中の明珠も輪王に弗されば誰かこれを能せんや。希がふ所は諸宗を聚會し。これが邪正を糺さんとを列位それ早くこれを圖れ不宣（頼綱は平左衛門尉。時宗 貞時の内管領後醍醐謀叛を起し殿中において誅せらる）また北條彌源太に與ふる書は蒙古賊の來ると。それ何の天災ぞや。人その由を知らずして。唯以て怪とす。日蓮預てこれを知れり。其故は淨土眞言。禪律の 儕 變りて。佛神肝要の法味を隠す。こゝに於て天照太神。八幡大菩薩もその穢汚を惡み。本土に退き給ひて封疆空なり。因て國は戎となり。民はみな何となる。足下もまた尋で異國の奴とならん。この惡法を洗滌ぎ。もて國土を清らせんは。日蓮一人の力にあり。故にその書を獻する所。容られざるのみならず。忠告却て讒せられ。一旦貶謫の人となる。然れども只と日の。照明を得て赦免に遭ふ。然るに猶我教に乖り。今この大難逼り來る。足下は副元帥の一族たり。朝に臨みて任輕からず。何ぞこれを顧みざるや。となり。また建長寺の道隆禪師に。贈り給ふ書にいはく。扶桑

の佛法徒に。殿堂を搆へ莊嚴を盛にし。僧は六通の羅漢に似たれど。其蒙昧なる禽獸に齊し。日蓮頓よりこれを呼で。念佛は無間の業。禪宗は天魔の所爲。眞言は亡國の法。律は國の賊なり。と會て立正安國論一部を造りて國主を誡む。然れどもその邪路に惑ひ。如來本誓の正道に復せず。果して他國侵逼難。今足の下に起れり。それ道隆和尚は佛陀の如く。良觀上人は羅漢の如しと人主以て尊崇す。佛陀羅漢奈何なれば。その畜ひを攘はざる。その法力の虛妄なるか。將午睡のまだ醒ざるか。日蓮一たび手に唾せば。これを攘はんと風の前なる。纖埃の如し。然れども國君庸ぬす。嗚呼何ともするとなしとなん。また極樂寺の良觀に與へ給ふ事にいはく。今足下等が居る處二千年以前法華經に説て。阿闍若に納衣にして。空閑に在て眞道を修すと。自ら謂て人を輕賤しめ。たゞ邪法を衒ふ者あり。利養に貪著するが故に。白衣の與に法を説く。釋家これを科となし。譖聖増上慢といふ。今生は國賊にて。來世かならず那落なり。日蓮は日本第一。法華經の行者にして。這回蒙古退治の大將。日蓮を捨てそれ誰や。一切衆生の中に於て。亦爲第一と經にみえたり。上人若先非を知らば。衣を更て日蓮に降れ。如何不宣と責らる。また大佛殿の隆觀には。蒙古襲ひ來らんとす。易蚤く調伏せざるや。蓋法力の微弱なるか。早く幔幢を倒して日蓮に歸せよ。他日敗北して。徒に臍を噬となかるべし。とまた壽福寺に與へ給ふ書にいはく。念佛眞言禪律。天下を欺き誑かすや。他國侵逼難の前兆にして。果して蒙

古賊逼れり。嗟呼衆等現在は邪見。未來は無間疑がふべからず。何ぞこれを顧ざるや。將業感の爲か哀むべし。哀むべしと云々。また淨光明寺行敏に與ふる書には。法華經の大王戒。小乗の毘訶戒。霄壤懸隔せる。何の論かこれあらん。今の律宗はこれを知らず。却て國王大臣に向ひ。只管日蓮を誹謗せり。嗚呼汝等無間の根源。其茲に在ものなり。是以蒙古賊至る。これを他國侵逼難といふ。この菑ひを禳はん事は。爾が及ぶ所にあらず。如何不宣となん。また多寶寺に與ふる書には日蓮が立正安國論は。兼智未萌の聖識なり。果して蒙古賊至れり。設日蓮を惡むの輩も。國土の恩を忘ること。勿せばこれ可なり不宣また長樂寺に與ふる書に。日蓮諸宗を蔑如するにあらず。その謗法を惡むのみ。謗法の餘殃には。他國侵逼難起ることあり。唯日蓮止を得ずして。切にこれを責るとは。國土の恩を報せんが故のみ如何長老の道德をもて。蒙古を退くるとを得べきや否や。と借また高祖門下の諸徒に。示し給ふ書にいはいはく。蒙古賊の逼るに憑て。日蓮日來書を造つて。副元帥および諸宗の寺々。十一所を。脅す。この敵不日に蜂起せば。吾に於て蒙古賊の。強きには尙勝らん。日蓮が弟子檀那。流罪死罪は必定か。かならず妻子を憶ふべからず。また權威を怖るゝな。這回生死の縛を切て。速に佛果を遂べしとぞ。遊ばる。借も諸宗の縋索それく。御書を視て且驚き。且怒ると大方ならず。目を睜り齒を切り。讀て以て穢となすめり。こゝに於て諸寺の官僧。狀を以て廳に訴ふ。廳處雜選いふべから

ず。この時に當つて蝦夷叛き。往昔北條右京權大夫義時が。彼國の鎮護として。安藤五郎を遣しけるが。この人奥の津輕に居れり。然るに今年蝦夷蜂起きて。彼安藤五郎を戮し。夷人大に戰勢を震ふ。倉中種々の風聞ありて。一刻も穩ならず。按ずるにこのと佛祖統紀には。又蝦夷襲來。配軍後役混亂紛如。そのみ見えて他の言なし紀年録には故執權。奥州義時。かつて安藤五郎某を。奥の津輕に居しめ。蝦夷に備ふ。この年蝦夷そむいて五郎を殺す。高祖のためはく蒙古將に來らんとす。東夷もまたそむく。あゝあやうひかなとみゆ。高祖これを聞給ひ日蓮が言苟もせず。事に莅で績多し。よしや富樫那が辨目健連が通も。その信なければ人用あらず。這回他國侵逼難。東西に起ること。神わが化を扶くるや。奇なりくど感給ひ。かの立正安國論。忠は樂天が樂府に超え。鑑は釋迦文の聖識に伴す。末代不思議なるは夫た日蓮。これ併ながら吾見にあらず。偏に如來の識文を。具眼を以て開くにあり。と獨り心に嘆じ給ふ。按ずるに本文健は。恐らくは健の誤寫ならんか。健の字は字書に見えず。健は強き牛なり。又牛の勢を斬をいふとみえまた華嚴經の釋に。健は難なり舉なりとみゆ。

第十九 高祖甲州に杖を曳給ふ並勸持品偈の事

文永六年己巳。高祖御歳四十八。二月廿一日の月。三ツ並び出ければ。これまた稀代の天變かなど人擧て怪しみける。こゝに高祖は十一處へ。御書を做し給へども。更に返答にも及ぶものなく。或ひは使者を罵りて。逐かへすも多ければ。高祖はますく肘を張り。威を逞しうして折伏止ず。逆鼓大に揮ひければ。極樂寺の良觀は。眞正菩薩の上足にして。世の爲に重ぜらるゝこと。また生佛の如くなり。一時良觀衆人を集會。我苟くも國王宰相の。歸依を得て化を敷こと。滞りなきをもて。阿含經の旨に任せ。天下に傳戒して國土一切。酒を禁せんことを願ふに。かの日蓮に妨げられその志しを果し得ず。嗟これ世にいふ寸善尺魔か。日蓮死せざれば眞道興らじ。日蓮はそれ奚爲者ぞや。邪見熾盛にして外道の論を。公然として説き衆に示す。怖るべきの佞僧なり。と高祖これを聞給ひ。甚しきかな良觀が。開抗に沈める事。夫師は針の如く弟子は絲のごとし。針は絲を導き通る。然れば一盲誤れば。衆盲随つて惡道に陥る。嗟歎くべし。これを救はんこと何如せん。と長大息をなし給ふ。この時三位阿闍梨日心來る。年甫めて十一なり。心は後に眞と更むまた日進に作るあり。身延山第三主なり。その父を久本房といふ。曾て甲州の名山勝地。他に勝れたるよしを語る。高祖これを聞給ひ。この程少しの暇

を得て。彼地を遊化し給はん。と即ち久本房を携へて。鎌倉へ出給ふ。時に久本房杖を擔げ。高祖の御俱として甲斐國鶴郡（今鶴留に作る）吉田に赴く。吉田は富士淺間の社地なり。然るにこゝの社司なる人。高祖巡杖と聞て出迎へ。これを請じて法義を問ふ高祖從容として妙法の。奥義を説示し給ひければ。社司遂に心服して。崇敬大かたならざりけり。その子孫鹽屋といふ今も猶その裔存せり。かくてこゝに逗留し給ひ。妙經一部を書寫し畢り。富士の嶽へ登り給ひて。これを山の半腹に納む。これを世俗經が嶽といふ。また大曼茶羅を書し給ひ。鹽屋氏に與へ給ふ。これもまた今猶存せり。夫より小立村といふに至り。大曼茶羅を書し給ふ。この所後に妙法寺を建つ。この曼茶羅は駿州岡宮。光長寺の什物たり

按ずるに紀年録にいはく。小立村を過給ふに。本尊を乞もの二十八人。すなはち書して與へ給ふ。去て勝沼北原田波黒川に遊化し給ひ。更に相州板橋に至り。象鼻の石に憩てさり給ふ。とみえて略記なり。本文往々精きを説くべし

また山梨郡勝沼および。黒川に遊化し給ふ。また四五里を過て田波村に宿す。其處の主の需に依て。大黒の眞影を畫く。墨痕淋漓今猶存せり。また等力の郷北原村に往給ふに。眞言宗にて。金剛山胎藏寺といへるあり。地藏堂ありてその傍に。麗しき巨石あれば。高祖こゝに憩ひ給ふ。近隣の人これを知り。多く來りて謁見す。當下高祖衆に對ひ。我法華經の行者として。遊化の

爲こゝに來る。汝等よく心耳を澄し。今吾説く所を聴け。と念佛無間禪天魔。眞言亡國律國賊と四箇の公言を説給ひ。また立正安國論の。眼目を説給ふ。聽衆かのか首を低れ。口を鉛みてその化に皈し。大に高祖を崇敬す。依てこゝに還まること。七日にして去給ふ

按ずるに後和泉阿闍梨。日法來りて猶弘化す。胎藏寺の現住式部阿闍梨。衣を更へ寺を授く。村民もまたこれに従ふ。北原を改めて。日遺休息村と號け。寺を安國山立正寺と號す

また萩原山に大菩薩の嶽あり。高祖こゝに遊化し給ひ。歸路和州板橋を經る。象鼻の石上に憩ひ。遠く房州の方を臨み。侍估の墳を念じ給ひ。潜然として去り給ふ。この年九年元の使ひ。

趙良弼といへるもの。筑前國今津に來り。再び牒書を捧げたるに。前の不禮を憤りて。公武ともに返簡なし。こゝに於て趙良弼。其地の人塔次郎。彌次郎の二人を奪ひ。船を駛て本國に歸る。元王二人を延て日本の事を問ひ。祿物を與へて國に歸すといふ

按ずるにこの事は本朝通紀に文永八年とせり。佛祖統紀紀年録。共に文永六年とせり。いまだ孰れか是なるをしらず。またこの二人何者といふを載せず。疑ふらくは當所の漁者ならん

か

明れば文永七庚午。高祖四十九にならせ給ふ。この時房總の間また疫癘流行。村民枕を並べ死する者多し。故に彼處より使を立て。高祖に救ひを求めけり。高祖憐み思しけれど。この頃三

類の法敵強く。暫くも草庵を。出給ふと慍はざれば。これを辭して往給はず。一人の佛工に命し。小像を造らしめ。經題を白布に書し。これを像の手に懸て。使に與へて宣ふやう。この像

我に殊なるをなし。奉ずるを生るが如くせよ。と使ひ領掌してかし戴き。馳歸りて嚮の如く。白布を海に浸し。引て岸の頭へ著くに。さしもの病痾一時に快愈し。更に垢を拭ふが如し。村

民大に奇特を感じ。落涙して歡びあへり。高祖はますく毒鼓を鳴すと。轟々として威風烈々。凜然として獨立し給ふ。三類の敵軍齒を切り。眼を睜し。腸を沸し。將に仇せんと欲すれども。

更に近付とを得ず。讒言教訴袖を列ね。踵を繼て至るのみ。極樂寺の良觀淨光明寺の行敏。光明寺の然阿建長寺の道隆。大佛殿の隆觀等。かのく隙を伺ふに隙なし。策を回らすに策短か

し。所謂聖増上諷。と如來の金言こゝにあり。されば法華經第十三に。或有阿練若。納衣。在空閑。自謂行眞道。輕賤人間者。上貪著利養。故與白衣説法。爲三世

所。恭敬。如六通羅漢。是人懷惡心。常念三世俗事。假名阿練若。好出我等過。而作如是言。此諸比丘等。爲貪利養。故説外道論議。自作此經典。誑惑世間人。爲求名聞。故分別説。是經常在二大衆中。欲毀我等。故向國王大臣婆羅門居

士及餘比丘衆。誹謗説我惡。謂是邪見人。説外道論議。と見えてその餘の縮徒はみな道門増上慢なり。經にまたいはく。惡世中比丘邪智。心誦曲。未得謂爲得。我慢心充滿と

ありて俗家の輩この邪人を。通明せりと稱せん。經にまたいはく。有諸無智人惡口罵詈等及加三刀杖者。我等皆當恐とまたいはく。惡口而聲聲。數數見擯。出遠離於塔寺。惡鬼入其身。罵詈辱我。我等敬信佛。當著忍辱。鐵とぞ見えける。

附ていふこの經文勸持品二十行の偈にして。高祖常にこの偈は。天台傳教の讀ざる所。たゞ日蓮獨り讀む。と宣ひしこと記に見えて。法の爲に人に罵詈せられ。また大難小難を受給ふも。みなこの識文あるをもて。如來の金言宜なるかな。と心に感じて憂へ給はず。猶法鼓を鳴し給ふは。この二十行の偈に據なり。こゝをもて此文を掲げ出し。當宗弘通の眼目と云ふ。されは幼婦兒童の爲には。猶解しがたき條もあらん。日澄上人嘆じていはく。是時高祖微せば。この二十行の偈徒に地に墮んと云々

第二十 靈山が崎請雨並行敏官に訴ふる事

文永八年 辛未。蒙古の使ひ趙良弼。筑築に至つて寇書を投ず。絨を解ずして返すといへり。按ずるに蒙古賊この時に。かの塔次郎彌次郎を。誘ふて歸りしか。またこの時其二人に祿物を與へて歸國させしかその傳記 詳ならず。こゝに高祖は五十にならせ給ふ。この年大に旱して。夏日雨なきこと百日に及び。田畑はいふに

及ばず。井の水涸て渴に苦しむ。因て當時武家の信仰。極樂寺の良親は。命を棄て壇を設け。衆僧を會して經を繙き。異口同音に誦經して。請雨の法を修しにけり。高祖これを聞給ひ。良觀が徒周防某。入澤某に宣ふやう。それこの早は妙法を。誹謗するの天罰なり。庸醫は病の根を知らず。妄に療して人を殺す。この頃良觀雨を祈ると。はその身罪を犯して。自身これを倍禮に同じ。天奚爲感應あらん。更に一笑に堪たるなり。子等日蓮が爲に良觀に告よ。年來我と良觀と。法門を争へども。俗僧聖者の深意を曉らす。只管に我意に慕る今この祈雨を幸ひに。法門の雌雄を決せん。七日の中雨滴降らば。我念佛無間の大言を息て。今より二百五十戒を持し。上人の弟子とならん。若また雨ざれば。我慢を止て我に降れ。とよく言し候べし。と宣へばかの兩個は急ぎ良觀が許にゆきて如此々々のよしをいふ。良觀聞て夫こそは。我願ふ所なれ。淨法力を顯はして。日蓮が毒鼓を摧くは。この時なりと大に勇み。有力の僧一百人を。招き集めて修法する。頃は六月十八日。炎暑燃が如く。照る日は頭を破るがごとく。渾身より流る汗は。飛泉を浴たるに殊ならず。されど頃刻も忘るとなく。衆僧は眼を睜り口を開きて。夜ともいはず晝ともいはず經文讀誦の聲絶す。燒すさむ香の煙りは。瓊璣として虚空に棚びき。振鈴の音は耳に響きて。いかなる八大龍王も。感應あらんと見えにけり。然るに空はますます晴て。更に一點の雲も起らず。既に同月廿四日。行滿に至れども。たゞ一滴の雨もなし良觀双

眼に涙を流し。我多年の苦行を以て。丹誠を凝すといへども。今日に至りて驗なきは。嗚呼天なるかな命なるかな。と大に歎するその折から。高祖使を遣して。いかに〜と責給ふ。良觀餘りの遺憾さに。今一七日を乞けるに。高祖是を許し給ふ。かくて其の事諸宗に聞え招かざるに極樂寺へ。聚る僧徒は千口許。みなその力を戮せけり。こゝに於て府内の騷擾。とりくくの噂大方ならず。かくて二七日にいたれども。更に一點ばかりの驗もなし。高祖また使を遣し。御房は口に佛法を談じ。副元帥の信仰を得て。萬犬虚を吼るの喩へ。世に擧て生佛とす。然るにかゝる小事をさへ。猶驗を顯さず。日來高堂に在り褥裯に坐し。何を以て益とせるや。近代の能因和泉式部。おの〜和歌一首をもて。早天に雨を降す。それ能因は破戒の僧。和泉式部は色好みと。右にしるき手弱女なり。それすら驗を顯はすに。生佛それ何の益ぞ。たゞ井に居て天を窺ひ。佛説を衒り法寶を汚す。今年儕が邪行に依て。百性秋を失へり。既に儕慚愧を知らば。衣を改めて我に歸せよと大にこれを責給ふ。良觀および數多の徒弟。更に云べき詞もあらず。聚會し僧等もたゞ寥々。と鼠の穴に走るが如く。稍々に立退けり行敏然阿も來り訪ひ。互に相見て言なし。この時高祖二三輩の。徒弟を將てたち出て給ひ。靈山崎に至り。おの〜懷より小板を出し（小板は今いふ經木の類）咒を持し題目を唱へ。小板へ經文を書て海に泛べ。霎時念誦し給ふ所に。不思議やな四方八隅。碧天忽地黒雲を生じ。雨は車軸を流すがごとく。霹靂天を轟かして。終日終夜止ときなし。こゝに於て乾枯せる。草木は青々として枝葉を動かし。魚鼈は渚に踊躍る。諸民はみな聲を揃へて。更に萬歳を唱へつゝ。歡ぶと大方ならず。實に天より黄金を賜ひ。七珍萬寶を雨すも是には過じとぞおもはれける

按ずるに古今大旱の日。雲霓を望むと。往々古き書にも見えて。實に俚俗の諺にも。金が降るといふことあり。雨後田間雜記の詩に。稻田滴水價千金。また高汝礪が雨後の詩に。時雨兩三日。田家家萬金。有年天子慶。愛國老臣心。また曾幾が六月十四日。雨降りける時の詩に。黄金北斗高。何似六月雨など見えて歡ぶとの極みとするなり。既に高祖この靈驗あり。現在稱して菩薩の號を。賜るとも可なるべし。然るを念佛禪律の徒。深く憎みて權貴を誣ゆ。權貴また察するとなく。無間天魔の徳に黨して。眞の佛子を棄んとす。こゝに於て侵逼難。叛逆難の尋で起る。後の君子このことを。深く鑑すはあるべからず。また唐土雨請の事を按ずるに。諒捕といふ人五官様となれり。大旱に雨を禱る薪を積で自ら焚く。火起つて大雨至れり。戴封といふ人西華にあるとき亦復これに同じといへり臨武の張喜平輿の令たり。雨を祈りて焚れ死す。主簿小吏（共に下役）みな殉ひて焚死す。訖て驟雨至ると見えたり。前の二人は僥倖にして免れ。後の人は燒死して後驗あり。民の爲に早を憂ふや。身を殺して祈りをなす。天もまた至誠を感すこゝを以てこれを視れば能因と和泉式部が。

三十一字の雅言をもて天地を感動せしむると。實に貫之が古今の序に。書たるも誣へからず。神國の徳を仰ぐべし

かくて同年七月八日。行敏より一書を呈す。高祖披き見給ふに公の利濟説法の。耳に熟すると尚し。然れども不審あり。法華以前一切諸經みなこれ出離の法にあらず。悉く妄語なり。とまた大小の戒律は世間を誑惑して惡道に墮せしむとまた念佛は無間の業と。また禪宗は天魔の説これを依行する者は。惡見を増長す。と都て四箇條若實ならば公は佛法の怨敵なり。速に對面を遂げ惡見を破らんと欲すとあり。高祖これに對へたまひ。件々不審の趣きは諾せり。然れども私の問答更に益なからん。公廳に在て對話を遂んと行敏これを視て贈答の二書を併せ。別に訴書を副て廳に献す。その訴書の趣きは。それ八萬四千の教々。出離の教へにあらざるとなく。大小顯密の法々は。解脱の法にあらざるとなし。葛氏一百の方。病ひに依て藥を施す。匠石長短の材における。物に隨ひて器をなす。一を是とし諸を非とする。物の理豈然るべけんや。茲に日蓮といふ僧あり。偏に法華經一部を執て。諸餘の大乗を誹謗なし法華經已前の教經は。妄語にて出離の法なし。念佛は無間の業。禪は天魔波旬の説。大小の戒律は。世間を誑惑するの法と。公然として衆に示す。無智の道俗頑愚の男女。仰で信受し伏て恭敬し。年來の本尊彌陀觀音を。或は水に流し火に投じ。多日薰修の念佛齋戒。唇を反して毀謗す。剩へ惡逆

の餘り。法華の守護として兵器を貯へ。凶徒を室中に集むると。言語同斷の所爲なれば。此と發覺して一旦は。流刑に處せらるゝといへど。其後赦を得るにおよひ。惡行ますます盛なり。此頃良觀命を稟て。請雨經の法を修すとき。日蓮弟子を遣して。嘲弄すると法に過ぎ。この早魘は他にあらず。禪律念佛等謗法の。科に出るものなれば。今建長寺壽福寺極樂寺。多寶寺大佛殿長樂寺。淨光明寺を燒拂ひ。禪律念佛僧の首を刎て。由井か濱に梟るときは。甘雨一時に降來つて。國家安穩ならんと云す。且また日蓮その徒弟等。堂社巡拜の地に至り。惡口罵詈言語に絶す。傳へていふ摩訶提婆が。眞言を五縁に亂れ。この惡逆には及ばざるか。守屋が佛法を滅せしも。比丘の首を刎るに至らず。今日蓮が造惡は。古今に更に比類なし。末代争か等倫あらん。唯一人の惡見のみならず。更に萬人の迷路を開きて。正路を蔑如し天下を亂す。茲に因て行敏等大に歎き今月八日。書を致して疑問をなすに。日蓮答へて願ふ所なり。然ながら私に。論議せんと無益なり。公廳にあつて理を究めん。と返簡則ちこれに副ふ。願くは佛法興隆。また衆生利益のため。日蓮が惡義停止あらば。これに超たる幸慶なし。行敏敬白とぞ認めたる。また極樂寺の良觀も。これに等しき書を呈し。その餘壽福寺多寶寺及び。禪律念佛の者數千人。訴ふるこの晩きを悔み。公庭群をなすのみならず。或ひは奥向の女中に就き。日蓮毎に惡口して。最明寺殿(時頼)極樂寺殿(重時)今地獄に墮在すとまうす。渠が惡を誠めすば。

いかなる珍事か起らん。と内外の訴訟屢にて。府内騷擾に及びけり

第二十二 高祖廳所に出給ふ並行敏が訴書返答の事

かくて八月三日に至り。官より高祖を召す。高祖從容として至り給へば。平頼綱を始とし。その餘の列位席を正し。高祖を中央に呼出し。それ神儒佛の三道は。天下人民の教へにして。忠孝禮節仁義を説聞せ。邪曲をして正路に歸せしめ。騷擾を鎮め國家和平。諸民安全の法なるに。今汝沙門の身として。佛寺を焼き僧等を梟首し。世を亂さんと企つると。以ての外なる奇怪なり。吾々佛經の深理はしらねば。本朝往古より佛寺を建立し。禪律の諸宗法を立て。數千年國家を鎮護し。緯あるときは渠に命じて。朝敵を伏し王法を光す。然るを汝彼宗々は天魔國賊無間の業とし一切を破するをもて。彼徒牙を噛み眼を怒らして。汝が屍を啖はんとす。こゝに於て府内騷擾し。屢公聽を驚かす。それ悉皆何の所謂ぞ。こゝに淨光明寺の行敏。また極樂寺の良觀等これを愛へて一書を呈す。汝熟覽して答ふべき條あらばこれに答へよ。若否ざれば罪に當ん。と則ち彼書を見せらる。高祖これをおし披熟と辯して。このと貧道が常々より。言す處に差ひなし。さらば逸々その義を解し。公私の疑ひを散すべし。とそれより硯を乞筆を採て。八萬四千の教々は。みな出離の法なるを。一を是とし諸を非とする。豈その理然るべけん

やと有よりして。行敏が詰問に。悉く答へ給ふ。就中日蓮偏に。法華一部を執て諸の。大乘を誘るといふ條に。答へ給ふは無量義經に四十餘年未顯眞實と。法華經にはく要當に。眞實を説當し。と其他の證文猶多くして。未顯眞實は妄語の謂なり。故に出離成佛の教へ。法華一部に限るといふ。これ日蓮が私語にあらず釋尊の金言にして。諸佛菩薩の傍例あり。また念佛無間とは。何にと詰る條に答へて。大覺世尊曰く。但觀經念佛等の。經を説て法華經を説ざるは。三惡道を脱せず。と何に況や末世の人。一生念佛の一行に留まり。又他を進ざる者は。無間地獄を墮すと必せり然れば善導法然の徒。法華經の名字を擧て。勝劣難易を論するや。十即十生百即百生。千中無一等と謂るもの。喩へば臣子として王親の。命に乖ふが如くなれば。無間の大火を招かざらんや。また禪宗は天魔の説。といへる條を詰るに答へて。かの宗教外別傳といふ。釋尊の遺誡に。我經の外に正法ある者。これ天魔の説なりとこれ則ち教外別傳。いかで此科を脱かれん。また大小の戒律は。世間誑惑の基といふと。凡そ小乘戒は其むかし。佛在世の時だにも。猶これを破りたり。且月氏(天竺のこと)に三寺あり。一向小乘一向大乘。大小兼行なり。一向小と一向大とは。水と火の如く道路を隔つ。日本國もまた爾なり。聖武孝謙二上皇。建立の三所の戒壇は小乘なり。後傳教これを破し。六宗の碩徳等。退狀を捧げたり。その狀朽すして今猶存す。目を開いてこれを見よ。當世の良觀等。當時の科を免れず。こゝを以て云す

なり。また年來の本尊を。水火に投ずる云々のこと。日蓮に於てこの事なし。また凶器を貯ふる事は。諸の證あるうへ。妙樂のいはく法華經を。守護の爲に。弓箭兵杖を置くは涅槃の定法。例せば國王守護の爲に。刀杖を集むる如し。良觀然阿道阿の輩。日蓮を害せん。とその言に伏せず佛説の。公言を依に廢し。専ら我執を立てるに至るは。手から佛像を水火に抛。子として親を撃が如し。嗟恐るべし驚くべし。とその答書を出し給ふ。列位これを視て怒るあり。また只管に感ずるありて。或ひはこれを逐へといひ。また流せといひ斬れといふ。または有道の士。卒忽にすべからず。と衆議紛々として更に決せず。かくて同き二十日高祖自身。頼綱が第に到り。對面を乞給ふ。頼綱出て對面すれば。高祖まづ禮を施し。書は言を盡さずといふ。日外行敏等への答書を以て。その事を演たれど。また來つて公に告ぐ。蚤く禪念佛者を黜すんば。天下それ殆ひかな。自界叛逆他國侵逼。相逐て相起らん。我物に狂へるならず。日蓮これを諫むること。尙しといへども我を容す。國家亂るゝ時に及び。悔とも甲斐あらんや。天の怒り殊に急なり。故に來つてこれを告ぐ。と丹心に宣へど。頼綱曾てこれを曉らす。忽地に眼を睜り。聲を荒らげて何をかいふや。治國の政事は佛法を假す。日來爾が毒鼓に因て。府内大に騷擾せり。甚だ以て奇怪なり。先頃その罪をもて伊豆の國。伊東に配流せらるゝ處。執權の慈仁をもて。限りなき大赦に遭ふ。これを歡び思ふべきに。還て逆浪岸を動かす。笑これを顧ざるや。と

云放て入れれば。高祖更に詮方なく。歸らんとして其處に在る。扈從等を顧み給ひ。異いかな頼綱の所爲。國家の大權を柄身にて。國を亡し躬を喪ふ。これを政事といふべきや。我これを知らずと謂て。寥々と歸り給ひ。同二十二日書を造り。頼綱に贈り給ふ文にいはく。それ人の世に在るや誰か來世を思はざらん。佛の出世は専らに。一切衆生を救はん爲めなり。日蓮一たび難髮してより。困學年を積み。己に諸佛の本意を覺り。また出離の大要を得たり。その實は妙法蓮華經一乘の崇重。三國の繁盛儀なり。然るに衆これを知らず。正路に背て邪途に走る。是を以て聖人國を退り。鬼神噴をなす。七難並び起て四海穩ならず。今天下鎌倉に歸し。衆人皆東風を貴む。日蓮生をこの土に得て。豈國恩を思はざらんや。仍て立正安國論を。撰集して故の副元帥。時頼朝臣の閣下に捧ぐ。これ太公が般における。西伯の禮に依り。張良が秦を籌るや。漢王の誠を容る。故に功を立て王業を開く。これ未萌を知る者は。六正の中の聖臣なり。且法華經を弘むるは。諸佛の使者なり。日蓮琢磨の力により。將來を勘へて粗符合す。法を知り國を思ふ。その志しを賞せらるべきに。邪教邪法の輩に隔られ。大忠を懷て微望を達せず。却て不快の顔色を視る。是我不幸のみにあらず。抑一天下の不幸なり。それ竊に惟みるに。泰山に昇らざれば。天の高きを知るとなし。また深谷に没ざれば。地の厚きを知るとなし。因て立正安國論。今また一部を奉つる。熟讀あらば日蓮が。謬らざるは自から曉らん。日蓮素より

身の爲にあらす。佛のため神のため。國のため一切衆生の爲に。寸衷を調するなり。足下蚤くこれを圖れとあり。頼綱これをもて副元帥。時宗および諸士に看せ。その計議を談する折から。讒者は時を得て逆鼓を鳴し。轟々としてこれを誹る。時宗大に嗔を做し。竟に高祖を召捕て。刑に行はんとぞ議せられける

按ずるに紀年録には。本文の大略を載て。時頼重時阿鼻墮在の。既に在世の時にいふ。何ぞ今日のみならんや。と答へ給ふよし見えたり。また世間流布の本には。上件の一言も差ひなし云々。世を安穩に持んと思さば。法師ばらをめし合せて。聞し召れもなく理不盡に。行はれば後悔あるべし。日蓮御勘氣を蒙らば。佛の御使を用ゐぬになり。梵天帝釋日月四天の御咎あつて遠流死罪の後。百日一年三年七年の内に。自界叛逆難とて御一門。どし打始まるべし。其後他國侵逼難とて。四方より殊に西方より。責られさせ給ふべし。その時後悔あるべしと平左衛門尉に申させ給ひて。御歸りあそばしけるとみゆ

日蓮上人一代圖會卷之三終

日蓮上人一代圖會卷之四

第二十二 高祖擒に就給ふ並龍の口御難尋で赦免の事

かくて文永八辛未九月十二日の事になん。既に副元帥の評議決し。日蓮法師は疆りなき天下の罪人なりとして。平の頼綱數百人の。卒を率て名越なる。草菴をうち圍む。高祖此よしを聞給ひ。人馬の音の近づくと等一。立て南の戸を開き。沓備來りけるな。今日蓮臭骨を以て。妙法に沾んこと。砂を黄金に易るが如し。一たびこの法を覺りてより。命を法華經に奉り。名を諸佛の土に流す。何の恐怖かこれあらん。と更に喜べる面持ありて。從容と立給へば。本間某進みより。鎌倉殿の台命により。沙門日蓮を召捕ん爲。吾們こゝに向ひたり。尋常に罷出でよ。と言の下に石を擲つ。跡に續ける伊和瀬某。目を嗔してたちむかふ。當下高祖音を柔げ。安祥として宣ふやう。汝等諦にこれを聽け。それ中庸の文にいはずや。諸を鬼と神とに質して。疑ひなきは天を知るなり。百世以て聖人を俟て。惑はざるは人を知るなり。と這は汝等も知る所。今日蓮は如來の使なり。今國家の危きも。この日蓮が支え持ちて。いまだその敗れに至らず。されば日本の柱なり。柱を摧けば家傾く。かならず自界叛逆難。また他國侵逼難の。至ら

んと近きにあり。他國は大元蒙古國にて。汝等國神に擯けられ。胡賊の奴とならんと。それ掌を指が如し。蚤く法謗の殿を毀ち。蚤く謗者の頭を刎よ。しからざれば國危し。と高聲に告給ふ。これかの大諫三次の二なり。これを聞くより衆卒等ますます怒り大に憎み。今この期に及んでも。猶毒言を吐き上を誹る。物ないはせると立ちかゝり。法華經の第五の卷を揪て高祖が面を撲ちにけり。高祖微笑して第五の卷は。則勸持品にして。その識文にて我を撲。奇なるかな奇なるかな。と聊も動じ給はず。かくて衆卒等引立て。松葉谷を出しつゝ。白日に馬に騎せ。旗を建鉞に閃かし。四街道を巡ること。更に朝敵の如くなり。かくてその路鶴が岡。八幡宮の社前に至る。高祖馬より下り給ひ。彼處に向ひて告給はく。日本第一法華の行者。衆生を扶け法謗を誡めんとして無上微妙の。法門をこゝに説く。什麼八幡大菩薩。靈山の誓約如何々々。と言畢りてまた馬に跨り。往んとし給ふに貴賤道俗。この事を聽よりも。信する族は大に駭き。周章てこゝへ駈來るまたこれを憎むの徒は。今日こそかの惡僧が。多年の罪身を責て。竟に死刑に處せらるゝ。これを見物なさんとす。街の左右群聚せり。于時羣がる諸人を搔分。老媪一人つかく。と高祖が馬の傍に來り。手に一ツの缶を捧げ。恭しく禮していふやう。聖人衆生を度せんが爲身を苦しめて經文を視開き。今弘通なさんとするに。説人路に横はり。罪なくしてこの罪を。稟給ふこそ是非なけれ。這は陋しき物ながら。供養し參らせんと持て參りぬ。苦

しからずは喫し召て。飢を凌がせ給へといふ。高祖老媪が志しを。深く感じて掌に取給ひ。見給ふに胡麻の餅なり。高祖歡びて受給ふ。かくて高祖熊王に命じ由を四條頼基に告ぐ。頼基大に驚きて。兄弟四人跣にて。時刻を移さず馳來る。高祖これを見給ひて。日蓮今宵首を刎らるべし。この數年願ひしはこれなり。この娑婆世界に身を稟るもの。雉となれば鷹に擗まれ。鼠となれば猫に噉はる。或は恩德のため怨讎のため。天命を期せずして。命を喪ひ躬を没するもの。大地の微塵より多けれど。法華經の爲に一度も。身を供するものを聞ず。我生涯貧道にして。國土の爲に恩を謝せず。父母の爲に孝を竭さず然るを頭をもて法華經に。供養する時臻れり。さればこの功德をもて。一は國王父母に回向し。一は弟子壇越に省かんと。悦びなるかなと宣ふを聞。頼基兄弟泣いていはく。我師本土に歸し給は。吾々争か殿れんや。愿ふは侍従を許し給へ(侍従はその主に從ひ侍するの謂なりこゝにては殉死のことゝ見るべし)高祖笑を含みて往給ふ。この時追々傳聞て高祖に別れを告んとて。競ひ來れる者二百餘人羣々として前後を遮る。警固の武士等これを制し。はや龍の口に到り給ふ。太刀取既に刀を抜てたち上らんとせし處に。日朗四邊の人を拂ひ。无二无三に駈入りて。かの太刀取が前に進み。斬らばまづ我を斬れ。と合掌して撞と坐す。傍なる警固の士。這は狼藉なり其處除すや。と敦圍して除んとすれど。日朗いかで去らんや。と會て身を動かさず。衆卒倚て犇めけども。日朗確乎として身を願

みず。雜人大に忿激し。臂を揪へて曳んとして。その一臂を折きたり。兎角する間に秋の夜の。長やかなるも更わたり。既に五更に垂々として。月も山の端に没したり。このとき平沙忽地暗く岸うつ波の音ばかりして悽然たるその折から。時刻遙に後れたり。頓々首を刎へしと。重連が郎等なる。依智直重といへるもの。氷のごとき刃を抜て。高祖の後に衝立あがる。當下遽然として椴島鳴動し。また鶴が岡の方に當つて。怪しの音發すると齊しく。満月のごとき神光東南より飛來る。その光り晝に勝り。織埃もまた見るべし。時に雷電頭上に響き。山海一時に震動し。直重が持たる太刀。段々壞となつて飛び散れば。衆卒大に震ひ竦き。衛りを忘れて遙に逃去る。高祖前後を顧給ひ。いかに君命重きにあらずや。この囚人を一人措て。僉何方へか退きたる。頓々來れと聲を擧て。宣へど答ふるものなし。この時鎌倉なる執權の。時宗が第に於て。怪しきとのありける中にも。一箇の怪星空より落ちて。その光り燦徹す。這は什麼如何にと眼を開き。定かにこれを見るものなし。當下虚空に聲あつて。悲きかな聖者を喪ふ。國の亡ぶる近きに在りと君臣上下の耳に入る。因て副元帥時宗も。大に恐怖し頓に南條七郎をもて。日蓮法師を赦すべき旨。龍の口へ達せらる。執事信濃判官入道。急ぎ一書を認めて。使に持し馬を馳らすこの時龍の口よりも。件の怪異を言上せんと。その使者互に金洗澤の。濱にして行達つ。高祖はこれを脱れ給ふ。かの使者の行達し。土地に一帶の小川あり。これを名けて行達

といふ。この時こゝに集會たる。四條兄弟日朗及び。百千の檀越は。たゞ是夢の如くに覺えて。歡喜雀躍足の踏。手の舞ふとを知らざるまでに。歡びあふ聲波に和して。殷々と響きしとぞ。こゝに於て其餘の見物。かゝる奇特に邪を翻がへし。正に歸するもの計へがたし。衆卒等もこの時に。その奇異なるに呆れ果て。只管高祖を敬ひけり。時これ鶏鳴の頃となん。明れば十三日鎌倉依智の郷。本間が宅に入り給ふこの路にして松樹あり。高祖こゝに立給ひ。袈裟を脱て松に懸け。咒を念じて諸天を禮拜す。後にこの松を呼で。袈裟懸の松と稱す。附ていふ本文に。高祖大難の時にあたり。老嫗來つて胡麻の餅を供す。後世この日に是を製し。高祖の廟前に薦むることは。即ちこの緣故なり。偕も本間重連は。世佐州の地を領し。この時はかの國にあり。依て家人等高祖をして。依智の郷の宅中に措く。その警蹕幾百人。高祖これに對ひ給ひ。我元來身命を。法華經に奉る。この故に死をだも辭せず。然るに今不測にして。一命を全うすると。諸大善神の加護による。然ればこの後一人の。衛吏なくとも縦に。身を遁れ隠るべからず。多人數こゝに警衛して。益とする所更になし。汝等往て休息せよ。と宣へど敢て去らず。吾們直に上人を。衛るのみに候はず。昨夜の奇特を見てしより。各信心膽に銘す。願くは吾們をして。師が有髮の弟子となし。俱に妙法の大功徳を。稟しめ給へといひければ。高祖莞爾とうち笑み給ひ。即ち合掌して衆卒

に題目を授け給ふ。時に衆人音を揃へて。唱題する聲天に彌り。既に夕陽沈々として。月東山に出給へば。殊に明月の佳節なり。銀漢清朗として雲收まり。白玉の如く輝きわたる。高祖庭に徐々と。おり立給ひて月に對し。自我偈を誦すると數十遍。注樂畢りて聲を舉。吁一乘の法華經。己れ連年修するの處。災多きはこれ何ぞや。いかに月天子如何に月天子。と聲に應じて雲漢に。輝きわたる一箇の大星。宿を離れて降ると見えしが。衆星これが前後に隨ひ。この庭の梅樹に下り。その光り粲然として。眼を射ればこゝに集會る。數多の人々眩暈。或ひは足淡れて椽より隕。再び。眼を開きがたし。當下大星忽地化現し。童子となりて高祖に對す。高祖これを見て誰ぞと宣へば。童子對へて我こそは。これ明星天子なり。と夫より高祖と暫くのほど。物語し給へども。傍なる人その意を解さず。言畢て童子昇天し。衆星みな從ひて去りぬ。頃あつて板島鳴動し。天曇り風吹あれて。さしもの明月暗夜の如く。海中潮の激するを聞くのみ。是何等を知らざりしに。板島の神高祖が籠居を。慰問せられし由後に聞ゆ。附ていふ本文の明星天子。降り給ひし梅の樹を。星降の梅と稱して。今も猶彼處に存せり。往々この樹の枝をもて。數珠に造るにその木中。星の象あるをもて。往昔の傳聞偽らざるを。信じてもて崇敬す。かくて平頼綱の下知として。高祖を佐州へ謫すべし。則ち本間重連へ。副元帥の書を賜はる。

その書にいはいく日蓮坊。這回佐州へ貶謫せらる。然れども兩三年。後極めて赦免の期あり。善くこれを守るべし。若不諱のことあらば。その罪足下に歸せんとあり。本間の家人等領掌せり。時にこの書を齎したる使者。家人等に對ひていふやう。奇なるかな彼僧は。貴むべし怖るべし。昨戌の刻虚空に聲あり。殿中騒動し國君憤む。蓋し罪なくして謫せらるゝは。たゞ謗りを宥むるまでなり。然れば休息も意に任せ。宜くこれを扶助すべし。と示して頓て使者は去る。こゝに鎌倉夕々に火あり。また夜々人を殺すものあり。官吏索むれどもいまだ獲ず。謗法の者讒して。いはくこれ日蓮が徒の所業なりと。官吏これを是なりとし。高祖に歸依したる者。二百六十餘人を捕へ。或ひは都下を逐拂ふ。これに因て略穩なり。實は高祖を憎める者の。計りてかくなせしなりとぞ。法子日朗日心及び檀越の十四人まで。宿屋光則奉はり。これを捕へて地牢に下す。今跡かの地に存したり。松葉が谷は官より破却す。こゝに高祖に亞ぐの大功は。辯閣梨日照上人なり。但し日興日向日頂日持は。豫て高祖の教誡を受て。龍の口に赴かず。照閣梨に濱の窮巷に従ひ。塾居閉塞して心を堅うし。節を持し眞を護り。高祖啓運し給ひて。嘉會の時をこゝに俟つ。この時宗に傾く者。一人も離るゝとなく。よく一家を保てるとは。たゞ日照の勳績なり。

撰者按するに本朝通紀文永元年の條に。日蓮再び佐州に竄すと見え。その細書に諸宗を誹謗

し。碩學行徳を惡口し。且將軍家を咒咀すと聞。時宗怒つて有司に命じ。運をして土獄に下し。遂に龍口の邊に於て。將にこれを斬んとす。運これを思へずして。諸佛の因修身命を惜まじ。鶴を救ひ虎を飼ふ。已に法を弘むるが爲。この難に遇とも苦患に足らずと。既にして時宗深く感む。故に俄に一等を宥め。佐州に配すと載たれど。諸書を致るに文永八年なりまた直時宗感むのみならず。館舎大に怪みあり。これを畏れて助けしとも。また諸書に詳なり。通紀の作者恐らくは。怪を語らざる所ならん

再びいふ龍の口にして。刑罰を行ふと。いづれの書の本據となすにや。法華註書は日澄の作なり。かの書を按ずるに武藏の境。深澤といへる湖あり。その廻り四十餘里。一身五頭の大蛇住み。神武の御世より。垂仁の。御宇に至り七百歳。大に國土を惱ませり。景行の御宇に及び。いよくこの毒龍昌る。武烈の御世に湖水を出て。南山の谷津村に在り。多く小兒を噉ひけり。欽明の御世十三年。四月十二日の戌の刻より。二十二日に至るまで。南海大に沸騰し。雲霞蔽ひ暗夜の如く。大地震動日夜止す。しかるに天女雲上に顯れ。二人の童子左右に侍り。其後雲收り霞散じて。こゝに一ツの島を作せり。これ則ち板島にて。天女こゝに降臨し給ふ。辨財天女の應作にして。無熱池龍王第三の娘。閻羅大王の姉。婆蘇大天の妹なり。湖水の惡龍この天女が美質を見て竊に感じ。情緒に堪はず天女に之て。志しの深きをい

ふ。天女大に誡めて。わが本誓は群萌を孚む。汝慈悲の心なく。悉く生命を斷つ。心姿共に異なり。何ぞ配偶に好速ならん。と龍大に愧ていはく。我今より教命に任せ。物の命を取となけん。この偽なき誓を以て。志しを遂しめ給へ。と天女輒諾し給へり。是より龍人を殺さず。還て慈悲の徳を施す。龍また誓を立て。南に向き山となりぬ。龍口山これなりとぞ。かくて。元正の御宇養老七年。越の秦澄こゝに住し。大乘經を誦し。また船に乗り毎日龍口山に詣て法樂す明神(毒龍を祀る所)大師に對して曰く。我菩薩の法施をうけ。既に三熱の苦惱を除き。宿命智を得て舊徳の先を知る。豈惡心を生せんや。若國に叛くものあらば。首を斬て我前に懸よ。これ昔日の凶執にあらず。その累賊を捨て四海のうち。秦平ならんと神の告あり。秦澄これを人に傳ふ是より始まりけるといへり。但津村の毒龍のと。和漢三才圖會にもみゆ。その出所は辨へず

また同書に星降りのと。唐の高僧傳を引て。妄誕ならぬ證となす。宋の元嘉二十八年。臨州の招提寺に。慧紹といへる沙門あり。密に燒身の心あり。人を雇ふて薪を斫り。東山の石室に積む。期日に至り中央に。一の籠を開いて座す。初夜に及び行道し。燭を執て薪を燃さ。藥王本事品を誦す。薪已に洞然たれど。誦聲猶始めの如し。大衆咸く一星あるを見る。大さ斗の如し。煙中に在て天に上る。見る者天宮紹を迎ふと。紹つひに恙なし。捨身の志しを

感ずると。古今これ同じといへり
 元亨釋書を按ずるに。釋慶圓北斗の法を修す。供物を壇上に設くるとて。本より定まれる處は四方に作る。然るを慶圓團欒として。繞れる形に供へたり。召請の印明を行なふとき。北斗の七星壇に降り。各圓に供じける。列に著てぞ居たりけるなど見ゆ。實も奇しきながら。己れ親しく視ざるを以て。古傳を誣るとなかるべし

第二十三 高祖佐渡に謫せらる角田の巖題目並嚴島女曼荼羅の事

かくてこの月廿一日。書を四條氏頼基に賜ふ。その略にいはいく云云。足下法華經の爲龍の口に於て。我と死を同じうせんとなす。これ自裁してその恩を。主に報うるよりも難し。我今佐州に謫せらるゝとも。月精已に龍の口に現はれ。明星依智の梅樹に降る。など日輪の護なからん。然れば些も畏るゝに足らず。足下想ひをなす事なかれ。とまた十月九日に至り。寶塔樹の口訣を記し。書を併せて地牢中なる。日朗に與へ給ひ。その翌十日愛甲郡依智を發して北に出で給ふ。こゝに富木五郎妙一尼。比企三郎池上太夫等。旅中を訊ひて奴僕を遣はす。今宵武州の久米川に宿し給ふ。その舍主信を起して敬侍す。その翌新倉に至り給ふに。新曾の城主墨田時光その妻この頃産に臨み。日を経れど猶生れず。苦痛ほとく見るに忍びず。時光大に悶へし折

から高祖杖を曳給ふと聞。來つて高祖に救ひを索め。招待せんとなすを請ふ高祖辭して往給はず。路の傍なる社に留まり。暫く祈念し給ふに。立所に驗ありて。安々と平産す。人々奇異の思ひを做せり。十三日兒玉(武州の地)に至り。兒玉時國の家に宿し。十四日下野の粟津に到り。長谷川の宅を過り。日を経て同二十一日。越の寺泊に着給ふ。石川氏(又石河に作る)宇右衛門吉廣出迎へて敬侍せり。こゝに於て富木五郎等が。送りの人夫を歸らしめ。且富木に書を贈り給ふ。その書の略にいはいく云云。この經は如來現在。猶怨嫉多し。況や滅後をや云云。佛教に依て邪見を起す。多聞に憑て爭論を致す云々。或人のいはく日蓮機を知らず。謬て難に値ふ。曰く然らず下和別らる。人これを笑ふといへども。萬世の規となす。日蓮擯出數度流罪二度。これ三世諸佛說法の儀式なり云々。日蓮は即ち不輕菩薩。今の世三類の敵なくんばあらず。驛路事々恙なし。宜く同門諸子に告べし。十月二十二日と見ゆ(本文緯の繁きをもてたゞその要を摘てしるす)是より海上風順悪く。こゝに且く滯留あり。同二十六日船に乗り。既に大洋へ出るの處。また大に風起り。波浪天に漲れば。水主相取力を戮せ。涉らんとすれど潮に推れて。船角田の岸に着く。こゝに石田五郎右衛門。遠藤治部右衛門の兩士來り。高祖を迎へて宿せしむ。曾てこの山に巖あり。高祖其處に往給ひ。後來の證にとて。筆を染て題目を書し給ふ。角田の巖題目といふは。是なり墨の痕深く透り。五百年來滅することなし。後人災ひを攘ふの符

となす。この兩士檀越となり。寺を造りて妙光寺といふ。二十八日風收まれりと。既に船に乗り給ふに。また風伯大に激し。波濤數丈船を搖動かす。船頭大に膽を消し。帆を捲き或ひは碇を卸し。百術すれど船危ふし。當下高祖靜に立て。舩に出給ひ。高聲に自我偈を誦すと。已に數通に及ぶとき。赤衣白衣の二童子現はれ。勉めよやと船子に示す。于時風浪俄に收まる。因て帆を揚げ航る處に。高祖水棹を執て水面に向ひ。題目を大書し給ふ。その長宛も數十丈。字畫龍の象に似たり。これより後この文字消す。鷗と共に浮沈なし人呼で波題目と稱し。今に猶存せると。末代の一奇事にて。海神守護の著なり

附ていふ是より嚮。いまだ角田に坐しけるととき。忽然として童子現はれ。この山の窟中に。七頭の蛇ありて。民人に蓄ひす。願ふは師の法力をもて。これを伏し給はんと請ふ。高祖諾して山に上り。小石を拾ひて石毎に。經の一字を書て投ず。即ちその害止といへり(紀年録)

再說文永八年 辛未十月二十八日。高祖佐渡國真崎浦に著給ふ。この時これを護送の力吏。高祖に餉を薦めて去る。高祖これを稟給ひ。こゝにて餉を食し給ふ。後その所に寺を造り本行寺と名けたり。その時の孟孟。みなこの寺の珍藏とす。かくて高祖はこゝを立出で。何方を當としら波の。漂ふ岸を彼方此方と。剽り給へど今更に。屬き隨ふ者もなく。知らぬ山路に伶俚

ては。誰に絆とふ人もなく。東西だにも辨へかねて。一宿も得ず一飯をも食はず。草に臥し露に濡れて。惘然と立給ふ折から。鶴髮の翁來り。什麼足下は日蓮坊か。痛はしやこの年來。妙經に眼を曝し。世間の醉を醒さんとすれど。三類の敵強く。いまた素懷を達するに至らず。かゝる邊境に竄誦せられ。さこそは愛しとおもふらめ。まづ此方へ來れよ。と手を捉て曳る。隨意々々。高祖は共に往給ふに。いと華麗しき室に伴ひ。珍珠佳肴をもて饗應す。加之これを盛る。孟および金碗の類ひ。みな世間に見馴ぬ物にて。實に仙境に入るかと疑がふ。高祖怪しみて主の翁は。誰とかすると問へど答へず。後に至りこれを見れば。真崎浦の畔に。春日明神の小社あり。後に一株の老樹あり。中空洞にして數人を入るべし。こゝにて明神の款待に遭給ふ。これより後折々に。神使來りて慰問すとぞ。その老樹今猶在り。かくて十一月朔日に至り。塚原といふ所に至る。この地渺茫たる曠野にて。更に宿るべき屋もなく。また人跡を看ると稀なり。宜なるかなこの所は。國中の鳥部野にて。古塚荒墳草に埋み。常に狐兔の栖となり。適事訪ふものとは。峰の懸枝に栖む。鷗鷗の他耳に聞えず。いと物悽き所なれど。こゝに僅の庵あり。檐傾ふき柱摧け。幾年經としらねども。膝を容るの所あれば。高祖はこゝに坐し給ひ。心靜に妙經を誦し。明し暮し給へども。元來食とするものなく。積雪は脛を沒す。僂倅にして油に換へ。念誦更に他念なし。然るに國中の道俗等。高祖のこゝへ來るを聞。大に罵りて佛敵

至りぬ。之を害せこれを殺せ。と露々しく噪きたつこと。將に紛々擾々たり。高祖はこの小菴にあり。旬を経て喰ひ給はず。堅氷四方に垂れて瓔珞に齊しく。寒に坐して一點の火なし。然れども猶憂とせず。かの李陵が囚に就き。蘇武が胡國に棄られしも。これかと思ふ計りなり。一時例の如く心靜に。自我偈を誦して在しけるに。一人の女子忽然と來り。傍に陪して去らず。高祖これを見給ふに。容貌端正にして鄙に住る。賤女とも見えざれば。高祖念誦事畢り。汝何方より來れるぞ。また何者の渾家か子かと問給へば女答へて。我は嚴島女といふ者なり。塔中別付の首題を求めん。と遠く焉に來りしなり。願はくは書して賜へ。と聞て高祖易きことなり。然れどもこの地に紙なし。たゞ一の硯一の筆は。懷に收めて有のみ。女聞て展を脱き。これを以て高祖に供ず。高祖これを紙となし。大書して與へらる。その傍に授與嚴島女の五字を加へらる(按ずるに展は夫人禮を以て賓客に見ゆるの服なり王后の六服にてハレギヌと訓す)女大に歡びて。禮を作して去にけり。これ嚴島明神なり

附ていふ藝州嚴島の社壇に。高祖の首題今猶存せり。その島甚美なるにより。國言イツクシと通ずるをもて。嚴島に作るといへり。島の匝五十里にして。内に七浦ある故に。神を崇めて七浦明神と呼ぶ。後高祖身延山。退藏のとき問訊怠らず。迹を垂て七面大明神と呼ぶ。本地吉祥天女なり

こゝに佐州塚原の後の山に。遠藤左衛門尉爲盛といふあり。姓は藤原にて歌道の達者。建曆上皇の寵臣なり。承久三年辛巳。上皇佐州に巡狩のとき。從ひてこゝに來る。後上皇の崩するに遭ひ。髮を薙て陵に侍す。法の諱を阿佛といふ。その妻もまた剃髮し。千日女と謂ひて諸共に。念佛を修して淨土宗に傾き。頗るかの宗の奥旨を探り。偏に眞の僧の如し。然るに這回この所へ。高祖の來り給ふより。擧てこれを毀辱すれば。己れも素他宗の徒なれど。識鑿ある者なれば。日蓮必ずしも狂人ならず。妄に他門を誹らんや。極めて據る所あらん。密に往てかの沙門が。景勢を候はんと。一時この塚原に來り。高祖の尊容を見奉るに。徳容妙相聞く所に異なり。儲こそと思ひつゝ。直に謁して法義を詢ふ。高祖渠を視給ふに。これまた凡者ならぬを察し。精く妙法の貴きを論す。阿佛夙善の感する所か。速に歸伏なし。念佛を棄て徒屬となる。然れども國中序て。高祖を憎まざる者なく。適庵を過り潜にして。飲食を献るもの。或ひは主人に勘當せられ。所領を放たれ父母に疎まれ兄弟に捨らるゝ故に親附する者なし然るを我のみ親まば。益諸人の嫉妬に罹り。師のおん身にも及ぶべし。と深く思惟して表には。これを破する色を作し。毎夜人定(亥の刻)の時におよび。夫婦潜に饌を整ひ。或ひは懷にし袖に蔽ひ。山中の深雪を踏わけ。高祖に饋り奉つると。甚雨風雪の夜といへども懈ることなかりしかば。高祖大に喜び給ひ。吁阿佛房夫婦。われを愛せる爺の如く娘の如し。圖らざりき我考妣(父母死

しての名を考妣といふ)子か胸中に托してもて。緯の此に及ばんとは。とこの夫婦を貰み給へり

第二十四 佐州塚原問答並重連に亂を告給ふ事

かくてその年も暮れ。文永九年壬申。高祖五十一にならせ給ふ。然るに佐州の關提の輩。いよく高祖を憎むの餘り。日夜相會して新保(塚原の地の名)に推寄せ。直に殺さんに如べからず。と既に多勢丈室に迫り。その容儀を候ふに。高祖はたゞ獨こゝに坐し。雨露を防ぐの準備なければ。蓑笠を身に纏ひ。従容として妙經を。讀誦の音柔に。唱題自若として嚴密威容。卓爾として勇猛なり。故にかの徒瞰といへども。心に恐れて近づき難く。空しく其處を去て歸る。こゝに生噓房印生房。慈道房唯阿等は。各この國の碩學にして。阿黨の者猶多し。因て道俗數百人。渠等が房に聚會なし。殺さんことを議して止す。邑主本間六郎左衛門。これを聞て大に駭き。生噓房以下を誡めていふやう。この僧輕きめ侮るべからず。國君猶度み給へり。況やまた衆等をや。必これを過つべからず。その志を遂んと欲さば。唯論鋒をもてこれを刺せ。嵐輪は立義の中にあらん。と衆咸聞て實に然なり。渠は一人假は數人。隊を頗ち順を立て。退かずしてこれを責ば。渠よしや能辯なりとも。爭敵することを得ん。忽地屈せんこと必せ

り。その時渠が衣を剝ぎ。十分に耻を與へば。匍匐して赦を乞ん。また快からずや。と衆議一決して日を定め。曾て越後また信濃。奥羽の國々へこれを傳へ。參會せんとを促せば。諸宗の髦一時の英。みな微服閑行して。こゝに集會もの幾百人。然るに正月十六日。新保の塚原に聚まること。蟻の如く蜂に似たり。當下邑主本間氏。兄弟もまた此處に出。非常を警め論議を聽く。偕十方より來れる僧侶。或は淨土或は戒律。或は眞言あるひは禪。その家々の書を携え。また拔萃抄録の書。雖僧に負せ奴僕に擔はせ。所狭しと寄り來る。實に前代未聞の奇觀。目を拭ひ耳を欬つ。高祖これを看給ひて。寛裕溫柔少しも動せず。須彌大山の如くなり。諸寺の檀越は後方に在て。豫て鬼に告神に祈り。我和尚をして凱歌を唱へ。名譽を一時に舉しめ給へ。と荷擔助力眼を張り。齒を切りて圍ひ繞る。于時順逆の座定まり。一僧問を舉るに及び。高祖の答釋凝滯なくよしや難問難題なりとも。逐一開きて是非を辯する。たゞ一二語に過ずして。問もの口を嚙むに至る。衆僧順次多端の問を。拆き給ふこと樂語に等く。一利刀を以て熟したる。瓜を裁に異ならず。また是暴風野の艸を。偃が如くなれば。有識の者は還て畏れ。企及ばざるを悟れど。愚痴我慢なる者は。理を非に曲て羸んとすれど。度を失ひ昏瞑して。更にいふ所を去らず。かの蚊虻の雨に鼓かれ。塵埃の風に吹るゝ如く。多日の企畫餅となりて。只管惡口罵詈するのみ。本間重連これを制し。雜式をしてこれを逐しむ。こゝに於て遙々と書を

擔ひ。杖を曳て來れる僧等。寥々として退けば。さのみやはと思ひつる。諸寺の檀越老若男女。みな力なく退きけり。當下高祖聲をあげ。衆僧を呼留め法門の通せざるは。黒業の習果なり。至心懺悔には定業もまた轉ず。衆等それ慚愧を知るや。倘知らずは人面獸心なり。また知らば日蓮に歸せよ奈何々々と呼給ふ。これに由て悲を忘れ。降る者も少なからず。黒心の徒は見濁を増し。いよく妬心骨髓に入る。その時高祖豪氣雄度。實に本地高遠ならずば。この盛儀を見し難し。偕各引退れば。重連もまた長揖して。こゝを去らんとしたる時。高祖暫く待候へ。子速に鎌倉に往け。それ祿を食ものは職を忽にすべからず。我豫て副元帥を。屢諫むれど納られず。法謗の罪こゝに發し。藥師經にいへる如く。自界叛逆難起る。期日遠からず二月なるべし。と聞て重連半信せず。師の教示に候とも。今鎌倉靜謐にて。君に叛くの逆賊なし。爭然ること候はん。と微笑して退きたり。然るに二月十一日。六波羅なる北條時輔。叛逆して亂をなす。執權時宗大に驚き。北條義宗をして是を討しめ。天下大に騷擾せり。因て同月十八日。鎌倉より急を告ぐ本間重連愕然として。直に高祖の前に臻り。合掌禮拜して師は寔に。未萌を知る大神通力。己曩に不明にして。その詞を疑ひつる。今更後悔慚愧に堪ず。既に鎌倉如此々々なり。因つて想ふに蒙古賊の。至らんことも差ひあらじ。また念佛無間等。これまた疑かひあるべからず。と大に畏れて述べければ。高祖莞爾として宣はく。我微なれども持經者なり。如來

の御使なるものを。争かそれを知らざらん。梵天帝釋左右に侍し。日月星辰前後を照し。天照八幡低頭恭敬す。故にいふ日蓮は。日本國の柱にて。復日本國の魂なり。然るを人これを怨む。他國侵逼難もまた遠からじと。夫より書二策を著はしこれを題して開目鈔といふ。本化別頭佛祖統紀にいはく。高祖著書二策。一曰。柱倒則家頽。魂去則人斃。日蓮者日本國柱也。日蓮者日本國魂也。日本國存亡係于日蓮一人。天照八幡雖尊。而比于梵天帝釋。是小神。日蓮不三支持之。日本國須臾不得保持。然人不知之。悲夫。今非可黙止。於是乎書。書成示門弟子。題云。開目鈔。是書也。別頭之心髓。末法之骨目。佐渡已後久稀疎之本懷者也。實本化菩薩所造乎哉。予黨之子。不用香粟卒爾拜之。必感現罰。乎慎諸と見えたり。按ずるに北條時輔が亂。嫡庶の先後より起れり。去ぬる康元元十一月。北條時頼職を辭せんとす。然るに二子ありて長を時輔といひ次を正壽といふ。時輔素より盜行にして。父の心に契はざれば。執政を與ふるの心なし。時に正壽僅かに六歳。この重任を襲ふべからず。因て重時の子長時をして。且く假に執權となし。その身は山内に菟裘す。正壽明年元服して。平時宗と稱しけり。其後文永元年に至り。長時卒するに及び時宗執權たり。かくて時輔は六波羅南方に居れり。豫て己嫡子として。執權にならざるを志み。北條公時教時等と。密に通じ

て時を候ひ。竟に謀叛してその弟。時宗を殺さんとす時宗風してこれを聞。使を京師に遣して北條義宗をして規はしむ。既に隠謀發覺す。因て義宗兵を率ひ。時輔が館を襲ひ。時輔を誅しけり。こゝに於て執權時宗。躬兵を率て在鎌倉なる。公時教時を誅するに及び。この亂一時に平定す。これ豫て高祖の宣ふ。自界叛逆難とて。一門の同士討なり

これ等の奇特あるに及び本間重連大に敬ひ。渾家念佛を棄て高祖に歸し。速に受戒得法す。重連年來寺を築き。立像の阿彌陀を安置す。此寺主を印性房とす。これを這回高祖に供す。高祖彌陀を改點して。釋迦尊となし。寺を開權の道場となせり。是より嚮四月三日。塚原素より卑溼の地なり。本間重連見るに忍びず。雜多郡石田の郷。一谷の里正に令し。一字の草菴を造らしめ。高祖を焉に徙したり。その地の吏に近藤伊豫清久といへるもの。淨土宗にて深く信せり。然るに一たび高祖を拜し。且奇特を聽に及んで。その子小次郎信重を始め。家舉つて宗を改む。信重が母落飾して。名を妙法尼と賜ひけり。信重中興村に在をもて。中興入道と自稱すとなん。かくて高祖重連が。尊信佛を改點するに及でいはく。彌陀は釋迦の化身なり。その本懷は法華經なり。然るをその本懷を捨て。却て邪義の謗法をなす。吁憫の彌陀佛は。無間の路を開くのみ。無間の焔を授くるは。その志にあらざるなり。今日久成の化によつて。彌陀また眉を開かんのみ。とその説を聞き感悟して。宗を改め衣を更へ。高祖に歸するもの鮮なからず。然

れどもかの寺の主。印性房は頑にして。猶これを信することなく。大に怒つて寺を去り。其徒に黨してこれを拒む。また高祖に歸する族は。今日師の教化に憑て。法謗の罪の深きを知れり。今より後衆人矢て。他宗の寺を瞻仰せず。他宗の僧を供養すべからず。若供養瞻仰すれば必無間の業となる。畏るべしといひあへり。爰に一谷は幽邃の地にて。巖石壁立千仞なり。傍に一松樹あり。高祖宣はくそれ松は。萬年獨秀の靈木たり。これに托して法運を祝さんと。淨水を索め給ふに。高山更に水を見ず。高祖これを咒し給へば。松根震ふが如くにして。清泉遽に迸る。高祖これを汲で。盥嗽。咒を持して去り給ひ。是より毎朝唱題讀誦し。以て後五百歳廣宣流布を祈る。その聲高く雲衢に徹す。三類の法敵これを聞て。この狂僧奚ぞ蚤く死せざる。この僧死せざらば國中の佛宇。悉く頽廢し。國中の僧侶飢餓に及ばん。若しこれを鳩殺せんには。然れども猶果さず。かの印性房を始とし。唯阿彌行阿彌律宗の僧。生喻房道觀房。慈道房等魁首として。書を造りこれを持し。鎌倉に到りて訴ふ。鎌倉の奉行是を視て。日蓮は不測の僧なり。汝等侮り犯すべからずたゞ歸順の者をして。深くこれを誡べし。と狀を書してこれに與ふ。因て悦び國に歸りまづ鎌倉の狀を以て。近藤父子を禁錮なす。その餘高祖に歸する者。或ひは捕へ或ひは放ちて國中大に騷擾す。この時本間重連は。嚮に時輔が亂によつて。鎌倉に在けるが。絳畢つて歸國なし。このことを聞て大に駭き。印性以下の僧を諭し。且

その邪僻を誡めて。國中稍穩なり。こゝに近藤信重が弟。僧となりて一位阿闍梨といひ。眞言宗たりけるが。衣を更て高祖に侍す。名を學乘房日靜と賜ふ。曾て件の老松に。高祖盥嗽のとき袈裟を掛給ふ松樹悦べる色あつて。綠暴に色を増す。後この所に寺を造り。松榮山實相寺といひ。この松を呼で袈裟松といふ。またその根なる泉を呼で。靈松泉と名たり。斯て執權時宗は。自界叛逆難のありしをもて。高祖の凡ならざるを信じ。地牢にある門弟子を赦す。然けれど日朗を許さず。日朗深くこれを患へ。悲み嘆きて官に請ひ。一たび師を訊に於ては。再び來つて土牢に處せん。と官憐れみて日朗を赦す。日朗大に喜びて。暴に起行し越に到る。然るに柏崎の港に着しに。風波強きをもてこゝに滯留す。于時天台宗の英傑と聞えし。大圓阿闍梨此處に在て。法華支を講ずと聞。日朗往て聽聞す。大圓日朗なるを知り。延て別頭の説を聞くに。大に感悟することあり。故に日朗と同船し。佐渡に涉りて高祖に謁す。後日朗の門に入り日傳といふはこれなり

按ずるに是より嚮。阿佛房塚原を訊の條。佛祖統紀に載る處日朗官に告て定省し。食せずして高祖に侍す。阿佛房これを見て。深く孝志を感じ人定の時を伺がひ。夫婦饑を饋るといへり。本文と同じからず。這は統紀傳寫の謬り歟當時日朗は地牢にあり。

四條賴基高祖を訊んと。蛙歩を企てこゝに來り。多日拜敬して誠を竭す。こゝに阿佛房率

塔婆を造り。高祖の筆を勞して本尊と崇む。高祖書を造てこれに與へ給ふ。その書にいはいく末法に入ては。賢愚男女の差別なく。南無妙法蓮華經と唱ふれば。其身即ち寶塔にて。その身即多寶如來なり。法華經の外に寶塔なく。法華經の題目。即寶塔。寶塔また法華經にて。阿佛房の一身。地水火風空の五大なり。この五大は則これ。題目の五字なるをや。然れば阿佛房は則寶塔。寶塔即阿佛房也。今日多寶如來を供養するは。即その身を供養する也。これを一身の本覺といふ云々と。阿佛房これを頂き。朝暮變と共にこれを拜す。然るに一谷は塚原より。その路遠きと三倍にて。老脚の苦みあり。因てこの邊に居を徙し。日々高祖を訊ひ奉る。この化によりて人これを慕ひ。移り住もの多かりければ。後終に一村となり。今に至りて阿佛村といふ。こゝに天台の僧最蓮房といふもの。罪あつて佐州に謫せられ。是れより嚮二月朔日。高祖が謫居を訪て謁す。高祖看給ひ凡僧ならじ。と別頭の説を聞せ給ふに。最蓮厚くこれを信じ。台宗を捨て師資の盟約す。因て名を日榮と賜ふ(一にいはいく日淨)かくて四月八日日榮の爲に。假に戒壇を構へ。靈山淨土の主釋迦牟尼佛を和尙となし。七寶塔中寶淨世界の主。多寶如來を證明師となし。本地涌出上行菩薩を教授師となし。嚴に本門の妙戒を説給ふ。日榮受職灌頂し。得戒の式了れり。高祖また懇に示し給ひ。我梵天帝釋に令して。汝が歸を促さん。我まづ赦を得るに及ばし。子もまた早く還らん至信それ勉めよやと教へ給ふ。後果して赦を得。甲州下山に

佳して定省怠らす。その地真言寺後に宗を改めて長榮山本國寺と號せり

第二十五 高祖佐州に在て所々へ名判を遣さる事

同年四月二十日。鎌倉の諸子价を遣して。恭く高祖の起居を問ひ奉る。高祖歡び給ひ書を遣り。この价に與へて返す。その書繹長ければこゝにいはず。其後五月五日幸便を得て。富木常忍に書を贈り給ふ。その書粗問答に作る。その畧にいはず。佛法をいふは唯法華宗なるのみ。眞言宗は天竺になし。開元の始め善無畏三藏。金剛智三藏不空三藏等。天台已證一念三千を竊み。大日經の中に入れて私に宗號を立つ。華嚴宗また天竺にこれなし。唐の則天皇后のとき。澄觀等天台の。十乘觀法を掠め取て。私に宗號を立つ。法相三論の二宗における。素よりこれを論ずるに足らず。禪宗は達磨大師。楞伽經等によつて。私に宗號を立つ。その徒大輦幢を樹て。これを教外別傳と稱す。狐鳴の不經天魔の所爲なり。淨土宗は善導大師等。誤りて觀經及び攝地二論を證として。一向專修の義を立しに。日本の法然また誤つて。これに與し邪教を弘む。これを知るものは日蓮歟。涅槃經にいはず云云。若善比丘壞法の者を見て。置て阿寶駟遣せずんば。當に知るべし是人は。佛法の中の怨なり。章安釋していはず佛法を壞亂すれば。佛法の中の怨にして。無慈詐親は即これ彼が怨なり。彼が爲に惡を除くは。即これ吾親なり云云。

これに由てこれを見れば。日蓮は日本國の父。また親なり。師匠なり。客聞て子が言葉。大に過當ならんと詰る。對へていはく過當ならず。傳教大師いはく天台法華の。諸宗に勝れたることとは。所依の經に據ものなり。故に自から讚め他を毀らず。庶幾有智の君子。經を尋て宗を定めよといへり。その他經深位の菩薩は。法華經の名字即に及ばすと。この時客また詰ていはく。然らば爾は天島ぞ。其化を守護せざるやと。答へていはく日蓮謫せらる。教主釋尊衣を以て。これが身を覆ひ給ひ。刑に臨んでは梵天帝釋。これを衛護して怠らす。日蓮事萬福なり。訝かるとなかれ云云。その狀常忍が許に達す。常忍大に歡喜なす。こゝに富木が小妻信を發し。主に告て佐州に渡り。高祖が謫居を訊らひぬ。高祖これを奇なりとし。婦人の身にて千里の遠き。海山を凌ぎこゝに來る。その志淺からすと。戒を授て日妙尼と名く。この時日朗は官邊にて。淹留することを許さず。故に辭して鎌倉に歸る。辨闍梨日昭は一家を保ち。高祖啓運の時を俟つ。たゞ小奴熊王のみ。常に陪從しその餘は交代すると。後にいふべし。按るに註釋讀にいはず。佐渡公日向伯耆公日興。佐州に下向す。時に念佛者印性房あり。高祖宣ふは。當房久住の弟子は。渠これを知る。汝等二人旅行の姿にして。彼にゆき試むべし。と兩僧諾して彼處に到るに。印性房檀越を集會て。淨土宗談義の時にあたれり。兩僧入て談義聽聞の爲。來れるよしをいふ。印性看て何方の僧ぞや。兩僧答て鎌倉なり。印性また問ふ

鎌倉ならば。日蓮を知りたるや。今竄謫せられて此傍に在り。と兩僧答へて我々は奥州にて。この頃暫時鎌倉に居る。更にこれを知らずといふ。印性重ねて彼僧は。阿陀越世の悲願に迷へる。大罪人にて提婆憍伽利も。屑とせざるものなり。兩僧のいはく此のごとき。惡義ならば頓往て。奚これに阿責せざる。印性答へて責て何かせん。惡義を興すは彼が罪なり。兩僧聞て阿々と笑ひ。まづ日蓮が惡義より。御房は佛法中怨の。過を免るべからず。阿鼻の大苦を招くへし。といふを聞て印性房。さて御房等は日蓮が徒ならん。さらば與に云に足らずと内に入らんとするを呼止め。われ〱この所に來れる故は。御房權實の二敎に迷ひ。邪見熾盛の由を聞。笑止の餘りた〱一句の。法門を示し逆縁を結ばしめんと欲してなり。師これに迷ふが故に。衆人を迷はしむるは。いと不便の至りなり。あはれ今より發心なし。邪を捨正に歸せんとなら。我師聖人の許に來れ。といひ放つて歸りけり。この遺恨により印性房の弟子檀那百餘人。守護所に出て訴訟をなす。依て重ねて問答あり。然るに渠等謗法の過。至極承伏する故に。印性が弟子檀那等。座席を追立ちらると見えて。上の條塚原の。問答より後なることは。重ねてあるを以て察すべし。蓋佛祖統紀及び。其餘の書にこの問答をいはず。日向日興の來れることは。紀年録にも粗いへり

又同書にいふ問答の後一兩日を隔て法談のとき。一人の尼聽衆に雜れり。席を進みて問ひて

いはく。先師法華經三卷に於て。女の字なしと宣ふか。と稍論談せんとす。高祖この尼を熟と見給ひ。これは先日印性房が。問答に詰るを扶けん爲。來りしものと覺ゆるぞ。これを例せば昔時天竺。摩揭陀國の摩查婆外道。王宮の論場において。南印度の罽那末底(唐に翻して德慧といふ)菩薩に對して口を開き得ず。年老て智衰へ。提く對ふことを得ず。と辭してその場を去り。思ひを靜にしてこれを酬ひんとし。六日に當り血を嘔て死す。その終らんとするに及び。その妻を呼で汝高才あり。わが耻を忘ることなかれ。と已にして摩查婆死す。其妻匿して喪を發せず。鮮綺を著して論會に來る。德慧看て吁摩查婆死たり。その妻我と論せんと欲ふのみと。王聽て訝りつゝ。何としてその死を知るや。願くはこれを告よ。と德慧のいはくその妻來るに。而に死喪の色ありて。言に哀怨の聲を合めり。こゝをもてこれを知ると王命じて使を遣はし觀せしむるに果して然り。王かの尼を顧て。佛法は玄妙なり。今宿意を果さんとて來る。速に惡を離へし。經王に飯すべし。と則彼無言にして去る。汝また是に邇しと。宣ふをもて彼尼愧。これまた言なくして去けり。聽衆の中に知る者ありて。印性が梵嫂なりといふ。高祖素より知り給はぬと。時に臨みまか宣ふ。奇事ならざらんやと見えたり

又按るに紀年録に。本文富木氏が小妻の事。鎌倉に孀婦あり。五月兒を携えて來る。これに

日妙の名を賜ふといひ。又鎌倉の信女。その夫に托して高祖を問ふ。高祖これに書を賜ふなぞ見え。また衆僧高祖を黜けんと。書を造りて鎌倉に訴ふ。奉行聞て日蓮は必過すべからず。但渠に親附する者を止めよとある條を。この紀元録にその州主朝直。鎌倉に告て日蓮密に。國家を咒詛すといふ。因て朝直の役人に命じて暫く彼に親むものを禁ず。また歸依の徒を捕へて罰すと見ゆ。抑佐州の守護は本間重連なること。諸書既に顯然たり。朝直をまた州主とす。朝直のこといまだ致へず。且その餘この時の傳記。種々の異説あり。逸々に辯論せんこと。甚繁く看るに煩はしければ。たいその尤けきを参考せり

明れた文永十癸酉。高祖五十二にならせ給ふ。この春法三ノ向をして。房州清澄に到らしめ。年甫の賀を述て師道善房が。起居の安否を問志め給ふ。五月二十八日清澄の。義淨房より書を送る。高祖これを誦し給ひ。且これに示きていはく。壽量品の偈にいはく。一心欲見佛不自惜身命と。日蓮が己心の佛果。既にこの二句に因て成就せり。その故奈何となれば。末法事行の一念三千。三大秘法とは是なり。天台傳教附屬にあらざれば。黙してこれを説ことなし。或ひは一月三星心果清淨といひ。或ひは一は一道清淨。心は諸法なりといふ。今想ふに然らざるなり。日蓮事觀を以てこれをいはい。一とは妙なり心とは法なり。欲とは蓮なり見とは華なり。佛とは經なり。故に妙法蓮華經を。弘宣せんと欲する者は。自から身命を惜まされ自から身命

を惜まざれば。一心に佛を見んと欲す。されば本有無作の三身。佛果一時に顯現して。身土色心俱體俱用。當體蓮華佛なるべし。恐らくは天台傳教に超え。龍樹迦葉に勝るものなりと云云。また其後如說修行書を製して。門人に示し給ふ。その書の略にいはく。生を末法に受け。この經を信ずるときは。三類の敵至らんこと必せり。如來現在すら猶怨嫉多し。况や滅度後の今に於てをや。或人問ふ説の如く修行なせば。現世安穩なるべきを怨嫉の至るは何ぞや。いはく釋尊に九横の大難あり。不輕に杖木瓦石あり。天台に南三北七あり。傳教に六宗七寺あり。殊に今は鬪諍堅固。白法隱没の時にして。惡國惡王惡臣惡民。邪鬼狼に入て七難事に起る。この時に膺つて日蓮佛勅を蒙り。生を是に示し時の不祥に遇といへども。法王の宣旨監ことなし。經文に任せて以て。權實二教の軍を起し。忍辱精進の鎧を着。妙法の劍を提げ。題目の旗を揚げ。未顯眞實の弓を張り。正直捨權の箭を挿み。大白牛車に乗て權門を破却す。八宗九宗の賊卒。或ひは逃或ひは引き。或ひは捕れ。或ひは降る。於戲天下法王の家人となりて。諸乘一佛

然巨鎮し。萬人一同に妙法蓮華經と。唱ふるに至るの日は。かず。不祥を拂ひ長生を得て。不老不死の理顯然せんものを安穩なる者か。或人復問ふ開會の後。諸乘一佛乘にして。優劣あるべからず。と予がいはいく然らざるなり。凡そ佛法修

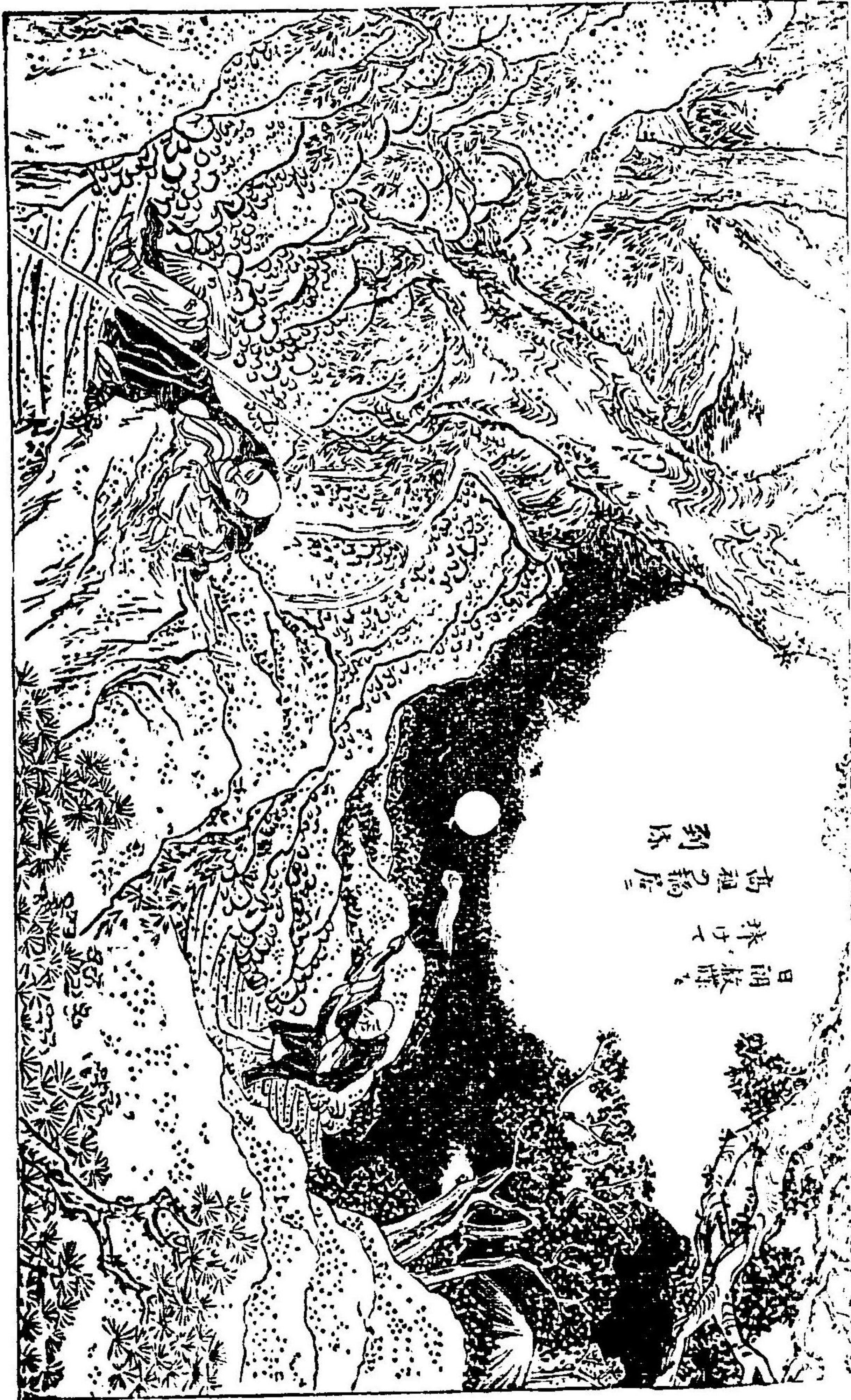
行は佛説に憑て。人師の釋を用うべからず。法華經の序分にいはく。四十餘年未顯眞實。大莊嚴等の八萬の居士。領解していはく。法華已前の諸經は。終に無上菩提となるべからず。正宗にいはく佛の方便説を除き。正直に方便を捨て。乃至餘經の一個を受ず。これ如來の遺誠なり。と然るに今の學者餘經と法華經と。同一の見をなす。如來誠しめていふ此人の罪報。汝今復聽け。ろの人命終り阿鼻獄に入る。それこれを思へとなり。或人また阿鼻獄に入る。答へていはく佛法の行人は。時を知るを要となす。若時を識されば。諸行みな徒ならん。攝受の時と折伏の時とあり。安樂行品は攝受の時なり。今は所謂折伏の時なり。天台のいはく法華折伏破權門理。どろの理良に以あるか。夏は葛を著冬は裘を著。是時に順ふなり。若夏は裘を著。冬葛布を著たらんは。時に差ふて理にあらず。圓靜堅固權實雜亂。この時に當り法華の行者。もし山林に抖擻して。諸宗の謗法を改めずんば。土に七難起り民に七逆あり。清淨の眞士忽地變じて。畜生道となり。又阿鼻獄となるべきなり。是を以て我本師法王。在世八年折伏に従事す。天台三十年傳教二十年。今や日蓮二十年。こゝに従事せざるはなし。我黨の小子或ひはろの操を失なひ。或は其節を失なふ。三類の敵を見ては。猶虎狼を見るが如し。夫如何やや光陰人を待す。露命幾干ぞ泣て以て告ぐ。三類今日富貴に驕るとも。一息斷るゝに及んでは。に阿鼻坑に陥らん。我傳朝昏毀辱に遷るとも。寂光本土に自受法樂せん。

力めて恐るゝことなく。復退くことなかるべし。敵來りて首を鏢とも。息と共に一念不離。而無妙法蓮華經と唱ふべし。南無妙法蓮華經と興に。息絶るときは釋迦多寶。十方の諸佛須臾に飛來り。兩肩に負ひ二聖二天。十羅刹女蓋を捧げ。靈山寶刹に送り給はん。豈疑ひあるべからずとなん。この餘願佛未來記を製し給ふ。その書大概前説に適く。緯長くして看者の。倦んを恐れてこれを省く。尙志ある人は。本書に就て索むべし。かくて七月八日に至り別付事觀十界勸請本尊を圖し給ふ。これ本化大曼荼羅の權輿なり。副書にいはく佛滅度後二千二百二十餘年の間。一閻浮提の内未曾有の。大曼荼羅なりと云云

按るに佛祖統紀に。甲陽の波木井氏實長。伴を差て安否を候ふ。書中懺悔の事を伸る。八月三日高祖答へて。これに書を示し給ふとあるのみ。然るに紀年録に南部氏書を呈す。行者厄に罹るを疑問す。八月三日答書を賜ひ。惑ひを解く。九月十九日書を作りて。日昭の母に與へ。その信力を稱歎し給ふ。また最進に當體義を著はし示し給ふ事。統紀にいふ所と異なり

第二十六 蒙古賊襲來の大略并日朗赦牒を持佐渡へわたる事

明れば文永十一年甲戌高祖五十三にならせ給ふ。時に日興來りて奉侍す。かくて正月十四日。行者難に値ふ緣故を記し。門人們に示したまふ。かくてこの月二十三日。兩の日並び出で。都



此は、
 日蓮上人の
 坐す所也。

鄙の貴賤大に驚き。これ何ほどの天變ぞと。大に怪み安からず。思ひ居たるに二月五日。復明星並び出たり。こゝに於て天文博士に。その吉凶を問せられ。また諸寺諸山の僧に課て。祈禱さらに怠らず。以てあるかな去年文永十年。大元蒙古の使趙良弼。九州へ来るよし。その注進ありければ。時宗筑紫の諸將をして。是を太宰府より追返せり。然れども復來らんこと。遠きにあらじと深く怖る。

按るに本朝通紀。續資治通鑑を引て云く。元趙良弼使日本。到太宰府。而還。具以日本君臣爵號州郡名數風俗土上。而後年元王舉兵。擊本朝數回。以是。想之托牒。使使趙良弼。窺計地形風俗。明矣。宜哉使元使。不也入我州。矣。と見えてこれより密書を贈れる已來。或ひは對馬に來り八角島に來りまた播磨の間に來たれり。又按るに今年また冬十月。元人忻都といふ者を以て。二万五千餘人に將とし。來たつて對馬の國を襲ふ。九州の兵防を戰ふ。元人利あらず敗績して歸るといふ。これより二年を経て建治二年九月。元の使また長州室の津の浦に到り。直に關東に來りけり。時宗等相議して。これを捕へて首を刎。龍の口に鼻すといふ。夫よりまた二年を経て。弘安三年春二月元の使杜世忠鎌倉に到るの處。時宗不禮を憤り。これを殺すよし通紀に見えたり。最元人我邦を襲ひ。九州に寇すること。既に兩三回ならず。終に大軍を率て來り責む。此事諸書にあるのみ。

ならず。彼が史にも載たれど。北條九代紀を始とし。蒙古繪詞傳螢蠅抄或ひは國史略本朝通紀。その餘帝王歴代年表。また俗間年代紀等に。その事蹟往々差ひありて。信偽孰か知るべからず

こゝに鎌倉の執權平の時宗。或夜の夢に赤衣の童子。忽然と現はれて。何ぞ日蓮を赦さると三たび計り告ると覺えて。眠りの夢は覺にけり。其夜また頼綱も。青衣の童子現はれて。爾聖者を侮るとなかれ。とこれまた三回ばかり聞と思ひて。その夢は覺にけり。皆も不測のとなかな。と心摸稜として辨じがたく。翌朝執權の館に參り。時宗に對し如此々々なり。それ聖者とは誰なるらん。更に心に分がたしといふ。時宗聞てわが夢に。赤衣の童子既に示して。日蓮を赦せといへり。思ふに彼僧躬唱ふ。我は如來の使なり。と近曾の自界叛逆難。彼が未然にいひしに當れり。然れば凡僧にあらざる歟。然るを謗人を宥めんとて。久しく邊境に置んこと。佛陀の冥慮に差ふと覺し。若し頼く赦さんには。と心中半恐怖を懷く。頼綱もまた同心せり。然るに高祖を謗る族。この議を聞て歎びず。君は一天下の政道を執り。邪を退け正を進め。國家を無事に守護なすの。任にあたりて日蓮ごとき。賣僧一人を罰するとも。何の妨あるべき歟。殊に睡中の妄想を信じ。猥に是を赦し給は。政道これより崩れなんと。蓋々しくいふ者あれど時宗頼綱これを聽ず。竟に赦免あるべきの旨。有司に達しありければ。まづ土半なる日朗を赦し。

同二月十四日。赦牒を日朗に授けられ。日蓮に達すべしとなり。日朗大に喜びて。その赦牒を襟に懸け。即日鎌倉を出立し。夜を日に繼いで走りけれど。從來その路近からず。星を戴き月に照し險岨もいはず足に任して。往とはすれどこの數日。牢中に憔悴して。心ばかりは勇めども。脚重うして行歩難く。漸くにして三月八日。佐渡の國へ渡りけるが。今は心神大に瘦て。たゞ一足も進みがたく。殊に日暮て東西を分たず。然れども先達てこゝに來りしこともあれば。路次は心に覺えあり。この山の裾を巡り。師の謫居は三里計り。いざや心を勉めて以て。一刻も早く至らん。と其處にありける樹の枝を。拾ひてこれを杖となし。痛める足を漸々曳て。山を登ること數町にして渾身今は困勞なし。傍なる石に據て。雲時勞れを憩けるが。喉を潤すべき水もなく。飢を凌ぐべき飯もあらず。たゞ青苔滑にて。夜陰に及び濕氣に犯され。ほとほとこゝに死向々どす。日朗心に想ふやう。我こゝにて終りを執らば。誰かこの赦牒を師に捧げや。今僅三里にしてその志を果し得ず。豫て聞く法華の行者は。諸天善神加護し給ふと。然るに我この惱に遭ふ。將前世の宿業か。と自から觀念してまた想ふやう。志の貫く所。金石もまた或る。虎と見て石にたつ矢の和歌もあり。まづ試みに呼びて見ばや。と日朗赦牒を得てこゝに來れり。誰かこれを迎へ給へ。と聲を限りに呼はること。漸く十聲ばかりにして。咽勞れ聲啞たり。志かれどもその誠心。諸佛も感應ありけるにや。媚々として絶ざること。縷の如くにて。

既に謫居に達したり。高祖香に聽給ひ。潛然として宣ふやう。今遙に聞ゆるは。正ましく日朗が聲と思し。渠が我に孝あること。實に心府を動かすに堪ぬ。今日我自頭烏を見る。緯あつて來れるならん。疾往て導べせよ。と宣ふに因て伯耆公日興。遠き炬火をふり照し。喘々馳せ出で。坂を下ること一里餘り。然れどもその影を見ず。高祖も尋て出給へど。闇夜にして人ありども志らず。日興試みに聲を揚て。日朗來れりやと呼ぶこと數回。その聲また此方に通じ。聽て日朗大に喜び日朗こゝに在りと對ふ。その聲數遍にして互に通じ。日興漸くこゝに來り。仔細を聞歡喜に堪ず。日朗が手を曳て。辛うじて謫居に到る。かくて日朗襟にかけたる。數牒を出きて奉る。高祖點頭て披き見給ふに

日蓮法師御勘氣事所被免許一候也

文永十一年二月十四日

行 兼
清 長
行 平
光 綱

藤左衛門入道殿

この書當時京都本國寺の什物となれり。外に武藏前司の狀あり。その寫はこゝに略す。その

書も本國寺什物の靈寶たり

高祖これを見給ひて。日朗が艱苦を勞はり。長途の旅行を酬し給ふ。附ていふこの日白頭烏を見給ひしより。近きに赦免あらん事。粗推量り給ふとなり。抑この緣故は。むかし漢土燕の太子。秦に質として在けるとき。始皇太子丹に向ひていはく汝必販すべからず但馬に角を生ひ。烏の頭白く變せば。其時こそ販すべけれど。こゝに於て太子丹。神明佛垂を祈りけるに天これを感應ありて白頭の烏始皇の前に來る。因て燕の太子丹を還すと。この故事によれるなり。故にむかし行基法師。紀伊國音無川の畔にあるとき頭の白き烏を見て「山鳥頭も白くなりけりわが歸るべき時やきぬらん」と詠しこの故事より起れり

かくて高祖は翌九日。これを國中の諸檀越に告給ふ。中興阿佛を始めとし大に喜びて宴を設け。高祖を賀し奉つる。然るに國內闍提の輩僧となく俗となく。これを聞て大に訝かり。およそこの島に貶謫せらるる者。古來より赦を得たる者なし。况や日蓮は佛敵法敵なり。志かるを賑く赦免を蒙ふる天下これを赦すとも。吾們争か赦さん。この境を出すべからず。と内々隱謀を企て高祖に寇せんとしければ。諸天善神の守護により。高祖おん身に恙なく。殊に威權獅子王の如く。泰然たれば闍提等更に手を動し難く。其儘に止にけり。諸高祖はこの月十三日。

檀越に別れを告て。この國をたち出給ふ。各歡びの中に別るゝことの悲みを含みて落涙數行。別離の情に堪ざる中に。最蓮房は殊さら歎き。慕ふ心の切なるを見て。高祖渠が手を執給ひ。心を憐ましむること勿れ。我大梵帝釋に令し。近きに歸船の歡を見ん。但再會を期するのみと十四日網浦に著給ひ。翌日船に乗て大洋を渡り。十六日の朝越後の國。柏崎に著給ふ。附ていふ日朗師が誠心。世に屬ひなきを稱し。かの行歩艱難の所を。後人日朗坂と唱へ。石に據て慰ひしをもて。これを赦免石と名く。今尙彼地に存在せり。こゝに精舎を營みて。日朗山本光寺と號す。紀年録に佐渡記を引ていはく。永祿年中浴の本化宗者。官命に托してこの石を浴の本國寺に移さんとす。州人輿を以て昇き。眞野川に到り船に乗んとす。其石背のごときもの出て重うして載べからず。こゝに於て止まる。邑主是を聞て後山に就て。亭を造りこれを庇ふと云云

祖歸路の教化并若狹の局が靈を鎮め給ふ事

越後國柏崎は。同國北方の海濱にて。往古佐州へ渡海するもの。みな此處より船に乗る。既に承久の亂順徳院佐渡へ遷され給ふ時。この海濱に御幸なし。五十嵐某の家を行在とす。今猶その殿を存し。注連繩を張て人を入れず。何時の頃にや官吏こゝに宿し。何ぞ往古のことを避ん

やとその殿に入りて臥す。深夜に及び長押を破り。別室へ抛られたり。因て人々恐怖すといふ。偕も高祖は焉に著給ひ。泉甘といふ所に憩ふ。後人寺を造りて福泉寺と名く。亦同所下宿に至り。三十番神を勸請し給ふ。また後人寺を造り。これを呼で妙行寺といふかくて府中に宿したまひ。小川ありて石置なり。高祖その石を拾ひとり。一石一字陀羅尼品を書す。日朗日興諸共に。石を拾ひこれを洗ふ。その地妙法の因により。後年多く人集り。般に富を致すとぞ。故にこゝを陀羅尼町とよべり。かゝる處に翁あり。忽然と來り高祖に揖し。曾て日朗日興が負ふ所の襦包を。請ふて自から負ひ導をなし。傍なる寺に入る。高祖師弟これに隨ひ。其の寺に入給ふに。老翁の行方を失ふ。故に庫裡の邊へゆき。これを問ふに知るものなく。寺主大に怪めり。その寺は眞言宗にて。毘沙門天王を崇めたり。古き像にて威靈あり。高祖寺主を延て一たび拜さんと。寶殿に到り給ふに。かの失たる襦包み。毘沙門天王の肩にありて。その足に濕土塗れたり。容貌件の翁に似たれば。偕こそ高祖を慰はしめん。と自から迎へ給ふを識り。見る者奇異の思ひをなす(紀年録には童子とす)この寺主の阿闍梨その始め。高祖の名をきく毎に。甚だ嫉み思ひしが。この奇瑞を見てなかくに。及ぶべからざるを躬悟り。過を悔て高祖を請じ。膳を設け珍味を竭し。これを供養し奉る。この後猶淹留あつて。教化し給はんことを乞けれど。こゝに返るべきにあらざれば。高祖辭してこれに換ふるに。大曼荼羅を圖して

與へ給ふ。日朗日興もまた曼茶羅を圖し。後の證にこれを止む。この寺宗を改めたり。越後高田の府言祥山。日朝寺といふは是なり。かくて後この多聞天の像。國主上杉氏の城内に殿を築て安置なし。崇敬他に異なりしが。羽州米澤に徙るに及び。また其處に日朝寺を建つ。故に高田米澤二字の日朝寺ありとぞ。夫より武州兒玉郡に到る。こゝに武藏の兒玉黨にて。久米信政といふ者あり。豫て高祖の美名を慕ひ。一回相見せんと欲するに。縁なくして年月を過せり。然るに來り給ふと聞。大に喜びて出迎へ。駕を枉給はんことを請ふ。高祖その志を感じ。久米氏が宅に到り。こゝに一宿なし給ひ。懇に佛意を示さる。信政頻りに信を起し。宅を以て寺となす。今の八幡山玉蓮寺これなり。この結縁によりて子孫繁盛し。今も猶連綿たり。高祖こゝを出給ひ新會村に到り給ふに、一人路の傍に拜伏し。涙を流して哀憐を乞ふ。日興立よりてその故を問ふに。僕は彼處の農夫なり。然るに妻女難産に罹り。惱むこと數日にして。ほとほと命絶なんとす。因て醫師はいふに及ばず。有驗の高僧に祈禱を請ひ。百計手を竭すといへども。聊その驗しあらず。兒もまた胎中に在て動痛す。願くは師の功力を以て。これを援ひたまは。生々世々の鵠恩なりと。首を地に著て悲しみ歎く。高祖これを聞給ひ。路傍の株に腰打かけ。曼茶羅を圖して與へ給ふ。農夫歡び頂き捧げ。歸りて妻に頂かしむるに。須臾ありて産安く。後母子ともに安泰なり。見聞の諸人その徳を貴び。後この地に妙顯寺を造り。かの曼

茶羅を以て本尊となし。俗に子安の曼茶羅と稱ふ。是よりこの邑産婦ある毎に。この曼茶羅を祈念するに。曾て一人も過なし。是よりまた一村を過給ふに。こゝにも産婦の惱めるあり。その良人を關氏といふ。高祖に見えて援ひを乞ふ。高祖曼茶羅を與へんとて。紙を求むるに紙あらず。見れば傍に飯匙あり。新にして且淨し。高祖これを取てその裏に曼茶羅を圖し給ひ。與へらるゝに關氏悦び。拜してこれを頂かしむるに。惱亂忽地收まりて。頓に安産することを得たり。誠に希有の奇瑞なれば。その家舉て信伏し。悉く舊宗を捨。みな妙法を唱へけり。この後かの飯匙に。靈應あること屢にて。或ひは時氣の不正に觸て。天行病などある時に。人々集會てこの匙を。首に頂くときはこれを脱かれ。また既にこの病に罹る者も頂きて忽に熱醒め。全快すること不測なれば。衆人尊信せするはなし。然れども時により。汚穢不淨に觸るとあれば。罰もまた著るし。こゝに於て關氏も。怖れをなして佛工に命じ。新に高祖の像を造り。その胸中に藏めつゝ。これを祈るに益靈應あり。かくて關氏後年に及び。江戸谷中に寺を造り。善性寺と號しこの像を崇む。後故あつて同所なる。感應寺に安置せり。然るに元祿年中とかや。臺命に依て同所なる。慈雲山瑞輪寺に移す。今猶こゝに奉持すとなん。かくて三月二十六日高祖鎌倉に著給へば。辨開梨日昭を始めとし。緇素盡く出迎へ。再會を歡ぶにも。各涙ならぬはなし。かくて諸子相謀り。夷堂の地を假て。一字の淨室を構へ。辨開梨を主とし暫くこゝに

在しけり。この地今の妙嚴山本覺寺なり。こゝに比企大學三郎豫て高祖に歸依するをもて。己が。屋敷の地を以て。法場となさんとするに。この地元來地子を出す。因て這回地主に談じ。四至の券を出して布金の場とし。長興山妙本寺を建立し。能本夫婦髪を薙。その側に潛みたり。高祖この供養を受け。四月朔日山の式を調進し。開堂祝釐し獅子奮迅。三昧に入て一吼揚々たり。四衆瞻仰して目暫くも捨す。各歡喜の眉をひらき。齊く法門萬歳を呼ぶ。附ていふ本文大學三郎能本。件の精舎を建るに及び。第宅の地を捨四至の券とて。其地の租税年々に。收むべきを一時に購ひ。永代妨げなからしむなり。爰を以て布金の場といふ。抑も布金の場といふは。むかし天竺舍衛國に精舎を建んとして。須達長者。舍利弗と共に其地を擇ふ。然るにこの國の大王波斯匿王の皇子。祇陀太子遊獵の地は。幽棲にして比あらず。この地に精舎を建んとして。祇陀太子に請けるに。太子恠みてこれを許さず。須達長者種々に。功德の貴きを説ければ。太子も了得に辭みかねて。然らばかの地に布滿る。黄金を以て汝に售ん。とこれその實は長者が富にも。及ばずして止なんと。想ふをもてかくいへり。長者大に悦びて。家に歸り府庫を開き。大象七頭に黄金を負せ。かの祇陀園に來りこれを布き。八十頃に充滿たれば。天に輝き地に映じて。貴かりける景勢なり。太子熱くこれを視て。渠法の爲に黄金を恠ます。我奚爲この地を吝まんや。と忽地大信力を起し。汝無數の黄金を以

て。この園を買んとせる。その功德莫大なり。然るを我奚爲黄金に換んや。謂の言は賦れなり速にこの黄金を以て。精舎をこの地へ建立すべし。と聞て長者首を揮り。君は國の太子なり。假にも戲言すべからず。疾々收め給へといふ。太子是非なく金を收め。林木を以て精舎の料とし。須達舍利弗に與ふとなん。因て布金の場といふ。大學三郎能本が善根。實に須達に亞ぐものなるべし。こゝに於て鎌倉及び。諸國謗法の輩も。その威勢敵しがたく。この時に至り口を嚙み。鳴を止めて閉塞しぬれば。高祖巨鎮自若として。法門大に定まれり。こゝに大學三郎能本。新に法苑を開き高祖を請じ。若狹の局の冥福を修す。昔年比企の傍に池あり。若狹の局こゝに投じて死す。妄念の引く所か。誤まつて蛇身に感じ。時々兩角空に挿み。曇麟日に輝きて現する形を。傍なる人見ることあり。能本屢これを憂へ。高祖の法力を假てその惡念を。翻がへさしめんとなり。高祖大曼茶羅を圖し修法すること肅々たり。この後絶てその形を見ず。當に高祖の護念によりて。佛果を得たる者なるべし。この大曼茶羅蓮の字の長壽。實に蛇の勢ひあり。故に蛇形の曼茶羅と稱せり。後高祖涅槃のとき。これに向つて坐したまふ故にまたこれを稱して。臨滅度時の大曼茶羅とす。今猶比企の藏中に存せり。按ずるに佛祖統記自註にいはいはく。比企第六代日行上人の時。應永二十九年壬寅十月十二日。

佐竹氏上總入道常元父子。讒に因て誅に伏す。賊山中に逼るるとき。蛇形の曼荼羅飛て池に入り字字猛蛇の姿を現じ。賊を禦ぐに賊驚き。みな退き去るといふ。日行人に對していはく。蛇形の本尊今日復た。蛇形の威徳を増すと云云。

こゝに眞言宗の碩學。正覺院主こゝに來り。高祖の宗義を詰らんとす。法孫日澄（佛祖統記の作者）これを推く。院主大に屈服し。口を箝みて去けるが。宗を改め寺を捨る今の大巧寺これなりとぞ。かくて副元帥北條時宗。倩高祖が進退を察し。實に聖者の徳あるを曉り。一日懇にこれを招く。折しも四月八日なり。高祖夙に興て徒弟を従へ。執權の館に到り給ふ。家幹頼綱出迎へ。これに對すること以前に變り。膝行して禮を竭し。且手を叉き瞻仰し。面を和らげ度みていふやう。念佛無間等の法門は。その義殊に美なりといふとも。人聞て喜びず。今よりしてこの説を。罷給はゞ可ならん歟。たゞ義を枉げて我に順はゞ何の幸ひかこれに若ん。城門の西に當り。新に愛染明王の殿を構へ。上人を主として國家の護りを請ひ。莊田二千町を寄て。衣盂の資に充んとす。上人宜く受用あるべしと。感慙に演にけり。高祖これに答へていはく。念佛無間は末法の公道。且禪の魔なる律の賊なる。何ぞ算ふるに足るものならん。殊に國を喪し身を亡すは。それ唯眞言宗なるをや。然るを穰災の方となすは。それ誤るかな吁誤るかな。若國家の福田を祈らば。四謗の莠を耘りて。稻穀たる妙法に歸すべし。國の存亡はたゞこの擧に

あり。何ぞ煩はしく我を誘ふることあらん（案るに誘はアザムクなりまづ高祖を宥め誘きてかの愛染堂に居らしめんとするを咎め諫め給ふなり）今日蓮が諫めを容ざらば。蒙古賊に利を射られんこと。日を計へて俟べしとなり。頼綱聞て蒙古賊の。到らんことそれ何時ぞや。上人豫め知り給ふ歟。と高祖答へて經文にその時を指ざれば。貧道その期を知らずといへど。國君日蓮か公道を捨て私速を踏む（速は頑に同じとありて私にカタクナなる所を踏むとはその跡を逐ふなり）因て天の怒り甚急なり。恐らくは年を超えざらんか。國の爲道の爲。已ことを得ずして言ふ。嗟日蓮がごとき色法は。國の賜なり。一に偏に任す。心法は覺皇の有なり以て私すべからず。と更に傍に人なき若く。齒を咬て對へ給ふ。頼綱聞て語なく。列坐の諸士も高祖が直諫。烈しきをもて執權家幹。ともに怒りを起さんかと。肝を寒し腋に汗す是を大諫三次の第三とす。高祖諫めの容れられざるを察し。衣を振てたち出給ふ。時宗熱高祖の徳容。勇猛なるを見て感じていはく。實に大丈夫なるものかな。涅すれども更に緇ます。これを仰げばいよく高くこれを鑽ればいよく堅し。と實に謂つべし間出の聖者なり。自ら如來の使と稱するも。また過言にあらざる歟。と大に信じて衆に語れど。三類の敵拒みて可ず。副元帥の猛威たるも。奈何ともすべからずその儘に止にけり。

按るに紀年録。高田日朝寺の條。迎へて袱包を負ふは。一人の小山伏といへり。信州を過

き一村に宿し給ふ。佐野某檀越となるよし見えたり

日蓮上人一代圖會卷之四終

日蓮上人一代圖會卷之五

第二十八 時宗宗牒を高祖に賜ふ並高祖身延へ入給ふ事

再説副元帥北條時宗。高祖が意氣の凜然たるを見て。心中酷感じけれど。今や禪真言の徒。あるひは念佛の淨土宗。國中に跋扈して。これを甚んとするに路なく。強て棄せんとする時は。かの黨の怒を生じて。亂の至らんとを恐る。然れども高祖が公言。實に無上の法なるを曉り。有司と謀りて。一通の宗牒を示さる。その畧にいはいく頃年數多。眞法の威力に於て。御感尤も淺からず。實に三國に比類なく。妙宗後代有難し。尊僧何れの宗か之に比せん。日本國中に於て宗弘の儀。更に妨あるべからず。仍執達する者なり。と貳なき近臣に持して。高祖の許に贈らる。高祖恭しくこれを拜し。謝して後に宣ふやう。嗟我化の及ばざると。實に甚だしといふべきのみ。如何となれば天下に君たる人。この法をもて公なりと思は。何ぞ憚る處あらん。また公と思はずして。この宗牒を做し給は。これ我に阿ねるなり。末法の弊こゝに至るか。我奚爲これに與せん。三たび諫めて聴れざれば。逃るゝはその禮なり。嘉遜既に時至れり。然らばこの地を去るべし。と頓て昭閣梨を召て長興山。妙本寺に監たらしむ。日

昭まづ拜していふやう。師この地を去り給はし。三類の徒隙を伺ひ。謀を設け官の威を假り。或ひは事を宗論に託し。攻撃逼迫せんとも。また量知るべからず。宗論は時勢に因て。尙偏頗あるときは。清義もまた邪曲に陥り。羸たるも輸となり。真正の説を穢し。邪の爲に摧れん。また甚しければ首を授け。寺を廢す古例も多かり。昭不肖にしてこの任に當らず。蹤を晦し矛を枕として。たゞ法戰を期せんのみ。と高祖これに領き給ひ。重ねて日朗を召てこれを命す。朗謹で命を拜す。曾て檀越波木井氏に。价をもて兜巖(甲州の地)に。隱栖せんことを告給ふ。波木井氏悦びて。其回報ありければ。則ちこの地を去り給はん。と五月十二日發足し給ふ。貴賤道俗別れを惜み。路にして宴を設け。懇に別れを告る。就中老たる者は。再び生前に見えがたし。と悲みの涙を浸し。また少者は彼地を訪て。再會を期せんといふ。高祖固より故郷にあらず。父母の國にあらずといへど。既に志を立がたく。衆人に別るゝを。大に患へて行路遅々たり。かくて彼宗牒は。今陸奥仙臺に在て。國寶になせりといふ。この時御弟子日興日向日頂日持日心の五人及び。久本坊もこれに従ひ。熊王複を負てゆく。高祖ともに以上八人。駿州大宮の莊野中村を過り給ふ。こゝに由井五郎入道は日興が舊識なるゆる。この事を告げるに。入道大に歡びて出迎へ。その宅に請じけり。高祖こゝに入給ひ。入道受戒得法す。また宅を捨て寺となし。日興に授ければ。日興大曼荼羅を圖してこれを記す。今妙覺山大泉寺といふ是なり。

夫より同國黒田の郷。柏坂村に入る。遠藤左衛門是を聞。淨室を設て高祖を請す。十五日こゝに舍る。于時黒田夫婦尊崇して。三物を供じけり。三物とは饅頭餅なり。餅は國俗にいふ柏餅こゝに於てこの地の名を。柏酒と呼けるが。今訛りて柏坂といふとぞ。また寺を造り鷲目山本光寺と申けり。鷲目は乃ち錢の異名なり。それより上野の郷に入給ふ。この郷の邑主の族に内房の尼といふあり。豫て高祖を慕ふ折から。こゝを過り給ふと聞て。路に出て迎へ奉つり。庄司入道をして。懇に。これに敬侍し奉る。高祖拒ますこゝに入給ひ。一宿をなし給ふに。内房の尼禮を厚うし。誠を竭すと至つて切なり。翌十七日別れに望み。尼が志しを懇給ひ。和歌一首を遺し給ふ。「内房にさのみは人のねいらねば月をみのぶにおきかへるかな」按ずるに近年印行せる甲斐叢記といふ書。身延山久遠寺の條下に。日蓮上人としてこの歌を載たり。但し結句「おきかへるらん」とみゆ

後またこゝも寺となし。高祖を崇めて開山祖となし。長遠山本成寺といふ。かくてこの日甲州の。巨摩郡に入給ふ。こゝを相股村といふ。流水長くして清く。その傍に巨石あり。高祖こゝに憇ひ給ふ。村老史氏正左衛門。これを聞て出迎へ。手自粟の飯を盛て。高祖を供養し伴僧及び。其奴隸等を別に置き。酒食を飽しめてこれを勞ふ。その容至つて信切なり。高祖その志しを感じ。晷の移るを覺え給はず。こゝも後に寺となし。大石山正慶寺といへり。その巨石今

尙存せり。かくてこゝをたち出給ひ。晡時に身延の澤に著く。大檀那波木井氏。六郎實長子弟を携え。出迎へて大に喜び。宴を設けて旅情を慰む。

按ずるに實長は。新羅三郎義光五代。甲州巨摩郡飯野御牧。波木井三邑を食み。波木井に館す。因てこれを氏とすと。佛祖統記に見えたれど。新羅源氏の家系に據に。極めて定かならざるとあり。實長本姓は南部なるよし。高祖紀年録にみゆ。南部氏は逸見冠者清光の三男。加賀美信濃守遠光の裔にして。南部三郎光行を祖とせり。故に書して参考に備ふ。また波木井は羽切に作る。この相見の地に一字を造り。これを發軔堂と呼ぶ

かくて實長その家臣。三上長富福士長忠。橋樹光朝の三個に命じ。身延山に精慮を營み。高祖をもて本意とす。争民力を煩はし。その居を飾るに忍びんや。その志しは然るとながら。これ佛の本意にあらず。と固く辭して二三子を役し。木を伐り茅を刈て矮屋を補理。こゝにありて朝暮持念し。讀經勤行懈らず。實長躬歩を企て。敬侍すると主の如く。またたゞ父母に事ふるがごとく。生佛の恩をなせりとなん

第二十九 善智と法力を角ふる並鶉飼を得度の事



高祖の室の
善智と
法術を
くつめふ

爰に甲州の小室寺に。役の小角の流れを汲で。修驗慧朝といふ者あり。一の名を善智といひ。眞言秘密の法を以て。種々の不思議を見はし。法術を以て世に鳴けり。高祖遂にこれを見聞し。是法を銜ひ俗を枉惑す。亡國の兆しわれ往て。誠めずはあるべからず。と一日徒弟二三子を誘ひ小室寺にゆき給ひ。善智に相見せんことを索む。善智も豫てこの國に。高祖の來りたまふを知り。法力を以てこれを降さば。わが寺いよく榮えんと。思ひ居たる折ふしなれば。敢て拒まず出迎へ。まづ相見の禮畢り。御坊近會法華を唱へ。これを最第一として。他の宗を譏り傾く。それ法華經は一大の妙經といふといへども。我宗門に持する處も。また是釋迦の遺教なるうへ。宗祖空海思ひを凝し。研究して一宗を建つ。奚爲以て甲乙あらんや。然るを妄りに他を非とし。我をのみ是なりとす。何ぞ佛意に協ふべけん。向後我執を改めて。自他平等の敎へを守らば。釋氏といふに遯からん。と一言に叱しければ。高祖聞て領き給ひ。汝が宗體實成ならば。いかにも平等の故あらん。然るに空海邪路を開き。迷ひの雲胸を覆て。眞如の月を觀ること難く。大乘の經を以て。第三戲論を欺き譏り。邪智我慢の毒を流す。故にその流れを汲もの。毒の毒たる所以を知らず。これを飲て心酔り。いかで平等たるを得ん。と夫より論談數刻に及び。善智忽に口を箝みて。更に答ふる術を知らず。この沙汰を聞て善智が門人。在る限りこゝに集會。その問答を佑んとすれど。敢て口を開くものなし。善智今は言葉竭き。然らば法力を

較べんと。是をなせども高祖に及ばず。因て終に従ふといへども。中心いまだ服することなくこれを嫉み悲みて。陽には従へども。陰には害を加へんと思ひ。是より後齋を製し。持して高祖を供養せんとす。高祖これを受て喫し給はず。箸をもて一箇を挟み。直に庭に抛給ふ。折ふし一頭の狗子あり。馳來りてこれを食ふに。忽鳩毒に中りて斃る。高祖これを見て色を和らげ。爾我慢の心を起し。暗に我をして害さんとすれど。我は法華經の行者として。爾がこときの害に値べからず。これ併ら日蓮が。智の賢き故にあらず。天自然らしむ。爾實に慚愧なさば。今より宗を改むべしと。懇に諭し給ふ。善智大に愧恐れて。肝戰慄き頭上に烟を出し。涙を流して罪を謝し。この後弟子たらんと請ふ。高祖これを許し給へり。且斃れたる狗子の爲に名を與へ石を樹。卒塔婆を造りて。弔ひ給ふ。その卒塔婆今に存せり。附ていふこの法力。を競べ給ふこと説々あれど。佛祖統紀紀年録。その餘の書にも小室の慧朝言語屈す。頓て法力を角ふに勝ことあたはず。因て陽に服従し。陰に害を含むとありて。法力を較ぶる巨細を載す。その俗に傳ふるは。この傍に一巨石あり。善智最多角金珠を揉で。祈るに忽地驗ありて。了得の巨石宙に昇る。觀る者毛髮逆に立つ。高祖微笑なし給ひ。是既にいふ邪術を以て。衆を惑はす所なり。我念じてこの巨石を。爾が頭の上に墜さん。爾よく持念して。石の爲に打るゝな。いひも畢らす咒し給ふに。かの大磐石動き出して。善智